
屋上の少女

風之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋上の少女

【Nコード】

N2607M

【作者名】

風之

【あらすじ】

高校に入学した相田翔太は、友人ができず屋上に弁当を食べに行く。そこには、ひとりで弁当を食べる少女がいた。

プロローグ（前書き）

書きたくなつたから、書いてみました。どれくらい書けるかはわかりません。拙い文章やストーリーです。それでも読んでいただけたら、幸いです。

ブローグ

桜が満開の時期を終え、散りだした頃。

あいだしようた

相田翔太は、弁当を手に学校の階段を屋上に向かって上っていた。新学期が始まって今日は五日目。クラスではまだ緊張した空気が漂いつつも、新しい友人や環境に適応しようとする雰囲気漂っている。昼の昼食時間でも、近い席の生徒同士で昼食をとる生徒の姿が見えるようになっていた。

そんな中、翔太は一人階段を上り続ける。

屋上に続く扉には鍵がかかっていて生徒が出入りできないようになっていた。しかしその扉の横に置いてある、今は使われていない掃除用具を入れるロッカーの裏に合いかぎがあるのを翔太はすでに知っていた。二日前、今日と同じように屋上で昼食を取ろうとした時、たまたま見つけたのだ。

どこのだれがそんな場所にそれをおいたかしらないが、翔太としては願ったりかなったりである。

翔太は少し気分を沈ませつつも、鍵を取り出そうとロッカーの裏をみた。

しかし、そこにはあるはずの力ギがなかった。

びつくりしてロッカーの周りを捜しまわる。ロッカーの上、下、さらには中まで捜したが、鍵は一向に見つからなかった。

意気消沈しながらも、実は扉が開くのではないかと淡い希望をかけてドアノブをひねる。すると、いとも簡単に扉は開き、翔太は扉をあけた。

実は教師のだれかが清掃か何かのために屋上にいるかもしれない。基本的にここは生徒出入り禁止だから、見つかったら怒られるかもしれない。

それでも、なぜか翔太は扉を開けるのをやめられなかった。まるで吸い込まれるように、扉を簡単に開けてしまう。

まぶしい陽光に一瞬目を細め、正面に人影を確認する。教師か、
なにかの事務員か。目が光りになれるのを待ちながらそう考えてい
た翔太は、しかし人影がそのどちらでもないことに気がつく。
そこには、制服を着た一人の少女がいた。

1 出会い

少女は、屋上に座り込み、昼食をとっていた。

髪の毛は長く、おそらく背中の中ほどまで伸びている。翔太の立っている位置からは、少女の横顔しか見えなかったが、日本人にしては高めの鼻と大きめの目から、整った顔立ちであることが容易に知れた。

しかし、それは翔太が今まで見てきた「かわいい」という顔とはどこか違っていた。今にも消えてしまいそうな、触れば崩れてしまいそうな、そんな繊細な雰囲気彼女の周りを包んでいる。彼女の周りだけ、まるで音が消えているような静けさを感じさせた。

どれだけの間、無言でその少女のことを見つめていたのかわからない。

やがてゆっくりと、少女がこちらを振り向いた。

正面から見たその顔はやはり整った顔立ちで、十人が見たら十人が美人だというようなものだった。

「あ……」

少女に見つめられて、翔太はどうアクションを起こせばいいかわからなくなった。その無表情な視線が翔太に突き刺さり、無言の間が漂う。

そのままいれば、少女側が何か声をかけてきたかもしれないし、こちらから声をかければ何かしら向こうもアクションを起こしたかもしれない。しかし、結果的にはそのどちらも起こらなかった。

屋上へと続く扉を閉めて、翔太は階段を駆け下りていたからである。なぜ自分がそうしているかは理解できなかったが、しかし気付いた時には体が勝手に動いていた。

あの子は誰だろうか。なぜあんなところで一人昼食をとっているのだろうか。

次々と浮かんでくる疑問を抱えながら、翔太はその日、結局体育

館裏で一人昼食をとった。

昔から、友達が多いほうではなかった。

人とおしゃべりするのが苦手で、引つ込み思案な性格も相まって、学校ではほとんど誰とも話さず本を読んで過ごすことが多かった。部活動もやらず、家に帰ってからは別段どこかに遊びに行くわけでもなく、ただただ毎日を過ごしていた。

それでも高校に入ったら変わりたい。友達を作って、今までのようなさびしい生活から抜け出すのだ。

そう考えていたのだが、現実はそのなにくまうはいかず、気がつけば友達を作る流れに一人取り残され、昼食と一緒に食べる相手もないという現状があった。授業などがある時間は教室にいても不自然ではないが、昼食の時間は一人で教室にいるのがいたたまれなくなり、とうとう入学式から三日目、弁当を手に教室を飛び出した。そのとき見つけたのが屋上という自分だけの空間で、そこにいるときだけ、翔太は穏やかな気持ちでいることができた。そこにいれば、教室の喧騒の中、一人さびしく弁当を食べる必要もない。周りから変な視線を向けられることもない。屋上だけが、翔太が学校内で唯一安心できる場所だった。

しかし昨日、その唯一の場所にあの少女がいたのである。

その少女のことを思い出しながら、翔太は今日も階段を上っていた。

昨日は何も言わず、思わず逃げ出してしまった。なぜ自分があの時逃げ出してしまったのかは今もわからない。彼女に出て行けと追い出されたわけでもないし、そもそも声すら掛けられていない。しかし、翔太の体は気づいたら動いていたのだ。

（今日も、いるのかな）

階段を上りきった場所に見える扉を見つめながら、翔太は考える。もしいたら、これからどうしようか。昨日のように体育館裏で食事

を取るという方法もあるが、あそこは日当たりが悪くどこか気分を沈ませる。ほかに一人静かに過ごせそうな場所を探す手もあるが、それはそれで面倒だ。できたら屋上は手放したくないのだが、あの少女がいた場合、自分があの場合にはたしてとどまれるかどうか。

そんなことを考えていると、いつの間にか扉の前にたどりついてた。鍵が掃除用具入れの裏にあるかどうかは確認せず、とりあえずドアノブをひねる。すると、昨日と同じように今日も扉は開いていた。

ゆつくりと、翔太は扉をあける。

そこには、昨日と同じ少女が一人、昼食を食べていた。

「あ……」

昨日と同じように言葉にならない声が思わずもれる。するとそれに反応したように、少女がこちらを振り向いた。

翔太と少女の視線がバッチリあう。昨日はこの時点で逃げ出してしまうていたが、なぜか今日は体が動かなくなった。

それは、自分の中で少女に対する興味が生まれていたからかもしれない。たった一人で、自分と同じように屋上で昼食を取っている少女。なぜ彼女はここにいるのか。なぜ一人で昼食を取っているのか。昨日浮かんだ疑問がフラッシュバックする。

視線があつて、数分後か、はたまた数秒後か。少女はゆつくりと視線を翔太から移し、また元のように昼食を食べ始めた。その様子からは翔太に対する拒絶も、受容もみられない。

勝手に昼食に戻ってしまった少女を、翔太はまたしばらく見つめていたが、やがてゆつくりと、前に歩き出し、そして校内へと続く扉を閉めた。

屋上には春のさわやかな陽光がさし、穏やかな風が吹いていた。どこから飛んできたのか桜の花弁がちらほらと落ちていて、無機質なコンクリートに不器用なイントネーションをえがいている。

そんな殺風景な屋上にいる少女は、しかしそこにいるのがあまりにも自然に感じた。風景に溶け込んでいるわけでもないのだが、し

かし存在感を出し過ぎてもない。それは彼女が作り出す独特の雰囲気のせいかもしれない。端正できれいな顔立ちだが、どこかはかなげなそれは自己主張する華やかさとは全くの別物である。翔太はしばし、その少女に見とれていた。

どれほどそのように固まっていたのかわからない。そんな状態の翔太が再び時間を取り戻したのは、少女が問いかけるような視線をこちらに向けてきたからだ。翔太の体が緊張でこわばる。その段になって初めて少女をじろじろ見ていたことを恥じ、とにかく謝らなければと頭が回転しはじめた。

「あの…」

翔太が発した言葉に、視線だけだった少女がまた顔ごとこちらを見つめてくる。その顔を正面から見た瞬間、なぜか翔太の口からは意図していたこととは全く違う言葉が出ていた。

「ここで、僕も弁当食べていい？」

しばしの沈黙。その間、翔太の脳内では何言ってるんだ俺！ という後悔の叫びが響き渡っていた。昨日逃げ出したやつが今日また来て、じろじろ自分のこと見つめて、拳句の果てに弁当食べてもいいとか、バカだろ！ 最悪だろ！

そんなふうになんか心の中で自分を罵っていた翔太だったが、少女は全く気にとめた様子もなく、コクリとうなずいてまた昼食を食べ始めた。

そのあまりにもそっけない反応に少し面喰いながらも、翔太はその場におずおずと腰をおろして、弁当を広げる。いつもとほとんど変わらない、いつも通りの弁当だった。

そのまましばらくの間、無言で翔太は弁当を食べ続けた。少女のほうも別段話しかけてくる様子もなく、もくもくと弁当を食べている。翔太の中で、またしても少女に対する興味が大きくなり始めた。この少女は何者だろうか。上履きをみる限り自分と同じ一年生のようなだが（上履きのラインの色で学年がわかる）、ならば何組なのか。ここで昼食を食べているということは友人はいないのだろうか。

自分のようなやつといっしょに弁当を食べて嫌じゃないのだろうか。疑問は次々に出てきて、なんとか聞いてみようとかちらちらと視線を少女のほうに向ける。しかし、言葉はあと一歩のところでは何かに遮られ口から出てこない。

そんな状態でいると少女は翔太よりも一足早く弁当を食べ終わった。そのまま弁当を片づけて、立ち上がるのかと思いきや、どこから取り出したのか文庫本を取り出し、それを読みだしてしまった。翔太に対してのリアクションが一切なく、翔太の中で興味と疑問がさらに膨れ上がる。しかし、やはり少女に話しかけることはできなかった。

そのまま時間は過ぎ、あと五分で授業が始まるという段階で、少女は文庫本と弁当箱を持ち立ち上がった。弁当を食べ終わってから、何をするでもなく屋上に座っていた翔太は、あわてて少女に問いかけるような視線を投げる。しかし、少女は翔太にかまわず、その横をさっさと通り過ぎようとした。

「あ、あの…」

翔太はあわてて呼び止める。校内へと続く扉に手をかけたところで、少女がぴたりと止まってこちらを振り返った。その拒絶も受容もしない視線に、翔太は吸い込まれそうになりながら、ひとこと聞いた。

「君、その、名前は？」

「…清泉、きよいずみ楓」

帰ってきた返答は、少女の雰囲気と同じようにはかなげできれいな音色のようだった。

「…あなたは？」

そのまま立ち去ってしまうのかと思いきや、逆に聞き返されて翔太は少し面喰う。しかし、すぐさま答えなければと急いで口を開いた。

「あ、相田翔太」

「…そう」

そう言い残して、少女は校内へと戻っていった。
これが、翔太と楓がかわした最初の言葉だった。

1 出会い（後書き）

とりあえず、今日はここまでです。もしよかったら感想など書いて
やってください。よろしくお願いします。

2 視線の先（前書き）

ここから少し会話文が増えます。というより前話までが限りなく会話文が少なかったただけなのですが・・・。

2 視線の先

次の日以降も、翔太は屋上へと行き続けた。

楓はそこにいつもいたし、いつも一人で昼食を取っていた。

翔太が行くと必ずこちらを無言で見るのが、楓から声をかけてくることはなかった。昼食を取っていいか翔太が訪ね、楓が無言で首肯する。そんなお決まりのパターンで、お昼の時間はいつも始まった。

初めのほうはおどおどして何も話しかけられなかった翔太だったが、楓と知り合って早一週間。その間にかわした会話は時間の割に少なかったが、それでも大分楓のことを翔太は知っていた。

クラスは五組。毎日弁当はここに食べに来ているということ。学校までは自転車通学で、三十分ほど時間がかかることなど。

そのほとんどが翔太が質問し、楓が答えるという会話で知りえた情報である。楓は基本尋ねられない限り話さないということも翔太はわかってきていた。翔太が質問をして、楓は一言それに答えるだけ。そこから会話が発展することもなく、すぐに会話は途切れてしまふのだが、なぜかそこに気まずさはなかった。それは楓に拒絶されているという雰囲気を感じなかったからだろう。自分ももとおしゃべりができない性格なので、他の友人たちと一緒にいるときのように、会話を途切れさせないように必死になる必要がないのは、翔太にとっても心地のいい物だった。

そんな関係のまま、今日。少し曇り気味の空の下、翔太はいつも通り楓とともに屋上で弁当を食べていた。

二人の座っている位置は依然離れている。拒絶されていないのだから、もう少し近くに行ってみようかとも考えたが、その分受け入れられている雰囲気もありないため、翔太はその距離を埋めれないでいた。近くに座ったほうが話しやすいことは話しやすいのだが、そんなことを考えながら翔太が弁当を食べている時だった。

「ねえ」

いきなり声を掛けられて、翔太は驚いて振り向く。楓は無表情で正面を向いたまま、箸の動きだけを止めて、口を動かした。

「どうして、毎日ここに来るの？」

翔太の心臓が跳ねるのがわかった。楓から声をかけてきたことなど初めてだったからということもあるが、それ以上に言葉の中身が胸に刺さった気がした。

「あ、えっと…、やっぱり、来ないほうが、いい？」

とても小さい声で、最後のほうは相手に聞こえたかどうかかわからない。まだ楓は何も言っていないのに、弁当を片づけようとしてしまっている自分の手がどこか卑屈である。

「ただ、気になっただけ」

しかし、楓から帰って来たのは純粹な疑問を表す言葉だった。翔太はその表情を注意深く観察するが、やはりそこには拒絶も受容もない。

翔太が何と答えていいかわからず黙り込んでいると、楓は答えを促すようにこちらを向いた。視線が合い、その透明度の高い瞳に吸い込まれそうな錯覚を受ける。

「えっと、弁当、食べる、友達が…、その、いない、から」

さんざん悩んだ挙句、出てきた答えは正直なものだった。いった瞬間恥ずかしくなり、相手がどんな反応を示してくるか怖くなる。

しかし、翔太の心配をよそに楓からの感想はひどくそっけないものだった。

「そう」

そう呟いてから、また弁当を食べ始めてしまう。翔太はどう対応していいかわからず、楓の横顔をしばらく見つめていた。しかし、その無表情な横顔からはやはり何もうかがい知ることが出来ない。

しばらく楓を観察していたが、結局何も変化がないためおずおずとまた自分の昼食に戻る。一口食べて、ちらりと楓をうかがったが、やはりそこにはいつも通り正面を向いて弁当を食べ続ける楓の横顔

しかなかった。

「…ねえ」

少しためらいがちに、翔太は声をかける。すると、楓は視線だけをこちらに移した。

「その、清泉さんも、どうして、ここで弁当食べてるの？」

聞いてから、やはりやめておくべきだったと後悔した。初めは、楓から質問してきたから自分も質問していいと思ったのだが、考えてみれば自分も答えるのが嫌だったことを、相手も快く感じることはあまりないはずだ。急いで訂正しなければと口を開こうとした翔太だったが、それよりも先に楓のほうから口を開いた。

「私も、いないから」

そう答えて、楓はまた正面を向く。

何が、とは聞かなかった。そんなもの、聞かなくてもわかることだったからだ。

気まずい雰囲気が漂い、翔太はなにか話題はないかと考える。しかし、自分がもともおしゃべりが得意でないうえに、楓もほとんどしゃべらないとあっては、雰囲気を変えるような話題などそう思う思い浮かばない。

どうすればいいかと、無意識に楓のほうを見ると、やはり楓は正面を見つめて昼食を食べているだけだった。

そういえば、楓はいつも何を見ているのだろうか。

ふと疑問に思い、翔太は楓の視線を追う。そこには、町と、遠く離れたところに山が見えるだけだった。

屋上から見える風景を楽しんでいる。ただそれだけかもしれないが、それにしても、楓の視線は一つのものに固定されているように翔太は感じた。それは手前にある街ではなく、遠くに見える山を見据えている。そんな気がした。

「いつも、何を見てるの？」

気付くと、ポロリと疑問がこぼれていた。

楓がこちらを振り向いて、尋ねるような視線を送ってくる。翔太

は少し焦ったが、もう出てしまった質問は取り消せない。

「あ、その、いつも弁当食べてるとき正面見てるから、なにか見てるのかなって思ってた」

「山を、見てるの」

楓が視線を戻しながら、静かに答える。翔太もそれにつられて視線を移動させた。

学校の屋上から見える、少し遠いところにある山。正確には山が連なっていて、ちょっとした山脈のようになっている。翔太たちが住んでいる街は、その山々に囲まれているような形になっていた。

記憶が正しければ、確かあの山脈はちょうど県境となっていたはずだ。別段遠いわけではないが、気軽に行けるほど近くもない。

「どうして、山を見てるの？」

楓が見つめているであろう山を見つめながら、半ば無意識のうちに尋ねる。楓のほうを見ないで質問したのは初めてだったが、なぜか楓と同じものを見ていたいという気持ちのほうが強かったため、気にはならなかった。

「行って、みたいから」

楓の答えに少し齒切れの悪さを感じて、翔太は楓に視線を戻す。

楓は、昼食も食べずに、じっと黙って山を見つめていた。

どうして、という疑問は、なぜか翔太の口からは出てこなかった。

2 視線の先（後書き）

実を言うと、大学側の期末試験が近付きつつあり、レポート課題などが急増しているため、そろそろ更新が止まってしまいかもかもしれません。まだ書き出して少ししかたっていないのに申し訳ないのですが、見放さずに読み続けていただけたら幸いです。

3 部活動（前書き）

会話文が、これまでの話の中でも最高の量！ まあ、ある意味どうでもいいことなんですが。多少軽く読めるようにはなってるかなと思います（と、願っています）。

3 部活動

春というのは、部活動においての勧誘の時期である。

学校の掲示板などには新入生歓迎の文字が書かれた勧誘のポスターが貼られ、下校時刻には一人でも多くの新入生を自分の部活動に引っ張っていかうと待ち構える上級生の姿が見える。熱心な部などは、昼の休み時間などに、校内の廊下を部の宣伝をしながら歩くところもあるほどだ。

そんな勧誘の嵐の中、部活動に入らないと決めている翔太は何とか下校しようと毎日四苦八苦していた。一人で歩いている新入生というのは案外声をかけやすいものらしく、油断するとすぐ上級生が寄ってくる。何人かであれば他の友人とともに強引に逃げ切ることできるし、いざとなったらだれか一人を犠牲にしてそのすきに逃げるといふ薄情な戦法をとることもできる。集団でいるのといないのとは、大きな差があるのだ。

楓はどうしているのだろうかと疑問に思うが、あいにく楓の姿は下校時間に見たことはなかった。学校の中では一度だけ見たことがある。おそらく移動教室のために移動していた最中だったのだろうが、やはりというかなんというか、ひとりぼつんと無表情に歩いていた。

おそらく帰りも一人だろうし、ならば自分と同じように勧誘されているはずなのだが、一体どのようなにして上級生をかわしているのかすこし気になった。無表情の楓が、上級生の勧誘をどのようにかわしているのか。いやむしろ、無表情のまま完全に無視でもしているのではないだろうか。それこそ楓らしいと言えばいいし、容易に想像がつく。それとも、友人を作るために実は積極的に部活動に参加しているのか。

そんなことをぼんやり考えながら下駄箱を出たからだろう。ガツ、と右腕をいきなりつかまれて、ビクツと翔太は振り返った。

「相田翔太君、であつてる？」

そう尋ねてきたのは、セミロングの髪的女子生徒だった。輝いている少し大きめの目が翔太を見つめている。ぱつと見た感じでは整った顔をしておりかわいいと思うのだが、きれいというよりは活発でかわいらしいという印象のほうが強かった。上履きをはいていないため学年はわからなかったが、雰囲気で上級生ということとは分かる。まずい、と翔太はとっさに逃げようとした。

「あの、僕ちよつと急いでるんで…」

「卓球の県大会、個人の部ベスト八。間違いないわね？」

翔太の心臓が大きく跳ねる。この学校ではそのことを言ったことはなかったし、それを知っている中学の頃の友人は皆ほかの学校に入学している。どうしてこの人はそのことを…。

「やっぱり、そうみたいね」

にやー、と上級生の顔が変化する。その笑顔にいやな予感を覚えて翔太は再度逃げようとしたが。

「しゃー！ 大物ゲット！」

そう叫びながら、上級生は翔太をものすごい力で引っ張っていく。その強引な方法に、翔太はなすすべもなく引きずられていった。

そうして連れてこられたのは体育館で、気付くといつの間にか体操服に着替えさせられていた。自分のを持っていないと言ったら、貸し出し用があると、意気揚々と差し出された体操服に無理やり着替えさせられたのだ。体育館シューズまで貸し出されては、用意周到としか言いようがない。

そうして自分の右手には、これも貸し出された卓球ラケットが握られていた。

（なんでこうなっちゃったんだろう）

周りを見回しながら疑問に思う。体育館の四分の一、バスケットコート半分のスペースに卓球台六台が並べられ、そこに新入生と上

級生が押し込まれていた。

新入生は端のほうの四台で、適当に球を打っていた。どう見ても初心者まるだしの打ち方をしている者もいれば、しっかりしたフォームで球を打っている者もいる。数は八人ほど。自分のクラスメートもちらほらと見えるが、翔太は彼らと話せるような間柄ではない。向こうもこちらを確認したようだったが、別段話しかけてはこなかった。

少し胸に痛みを覚えながら、翔太は上級生のほうに視線を移す。驚くべきことに、部員数が極端に少ない。全部で、二人？ しかも二人とも女子だ。そのうち一人は先ほど自分を連れてきた上級生。もう一人はその上級生よりも背が低い女子の先輩。男子部員の姿は見えなかった。勧誘にでも行っているのだろうかと思える。女子の先輩二人は練習はせず、何か隅のほうで話をしていた。

雰囲気を見る限り、新入生は適当に球を打っているということなのだろうが、引っ込み思案の翔太に、すでに球を打っている新入生の輪の中に入っていける勇氣はない。かといって、このまま帰るのはおそらく先ほどの先輩がいる限り不可能だ。

途方に暮れていると、背中をたたかれ、すこしびっくりしながらそちらを振り返る。そこには、細目の男子生徒が笑顔で立っていた。「なあ、君、あいてる？」

その言葉は関西なまりで、そのせいかどこか親しみやすい雰囲気があった。

「ああ、はい。打つ相手がいないっていう意味なら」

「ほな一緒に打たへん？」

そう言うて示したのは隅に置いてある台で、まだ誰も使っていない場所だった。

「えっと、いいですけど、あそこ使っていいんですか？」

相手が年上の可能性もあるので一応敬語になる。それを聞いて男子生徒はからからと笑った。

「ああ、敬語にしんでも、俺一年やから。念のため聞くけど、君も

「一年やる？」

「ああ、はい。えっと、じゃあ、勝手にあいてる台使ったらまずいんじゃない？」

「かまへんかまへん。さっきあそこにおける先輩は開いてる台は自由につこうていいって言うってたから、問題なしや」

そう笑顔で言いながら、男子生徒は開いている台につく。翔太も少しおどししながら台についた。

「ああ、自己紹介がまだやったな。俺、はやしりょうへい林良平言っねん。よろしく」
「僕は相田翔太」

「翔太か。ありがちな名前で逆に覚えにくそうやなあ。経験者？」
良平が笑顔で聞いてくる。その笑顔につられ、翔太も少し笑顔になる。

「一応」

「ほな、ラリーくらい出来るって考えてええな」

そう言って、良平がボールを打ってきた。少し緊張しながらも、翔太はボールを返す。

二、三球ほど球を打ったところで、良平が再び口を開いた。

「君、結構うまいなあ。それ、学校の借りものやろ？」

「うん。でも、先輩の予備のラケットらしいから、そんなに悪いものじゃないよ」

卓球ではラケットひとつでだいぶ打つ感触や球筋が変わる。良平はそのことを言ったのだろう。

「それにしても、人のラケット使ってそれだけ打てるんはすごいと思うで。俺、今自分のラケットつこうとるけど、それでも試合やったら負けそうやわ」

「買いかぶりだよ」

少し照れながら、翔太が答える。正直に言うと、良平も謙遜しながらいい球を打ってきていた。ただのラリーではまだわからないが、フォームを見るだけでもなかなかうまいことが分かる。

「まあ、これから卓球部と一緒に練習していく仲や。よろしくな」

その言葉を聞いて、翔太の体が一瞬こわばる。そのせいで、良平の打った球を思い切りオーバーしてしまった。

「ご、ごめん」

「ええてええて、これくらい練習中いくらでもあることや」

そう言いながら良平が球を拾いに行く。すぐさま帰ってきた良平は、またボールを打ち出す。翔太も半ばつられるようにボールを打ち返し、またラリーが再開された。

「さっき俺がよろしく言うたら、ちよつと緊張したみたいやけど、もしかしたらまだこの部入るとは決めとらんの？」

ラリーをしながら、良平が訪ねてくる。翔太は少し緊張しながらも、うん、と答えた。

「高校では勉強が難しくなるって聞いたから、部活やってる暇ないと思って」

それは本心ではなかったが、そう言うておけば角が立たないことを翔太は知っていた。

「もったいないなあ。せつかくうまそうやのに。ほな今ところは入らない可能性のほうが高いわけか」

うん、と翔太はまた小さく答えた。残念やな、と良平はつぶやく。

「俺としては入ってほしいんやけど。卓球うまそうやし、仲間は一入でもいたほうが嬉しいし」

「ごめんね」

良平が心底残念そうだったので、翔太は謝る。

「ああ、謝らんでええねん。そんなん個人のかってやし。入ってほしいというのは俺のわがままや。俺のわがまままで翔太に迷惑かけるわけにはいかん」

その言葉を聞いて、翔太はすこし胸の奥が暖かくなるのがわかる。その言葉だけで、良平がどんな人柄なのか少しわかった気がした。

「まあ、それでもここで知り合ったのも何かの縁や。学校とかであつたらよろしくな」

「…うん」

そんな言葉でその会話が途切れようとしたときだった。

「なら、仮入部期間だけでも毎日来てくれるのはだめ？」

いきなり声をかけられて、翔太が今度はボールをネットに掛ける。振り返ると、後ろに先ほどの女子生徒の先輩が建っていた。

「部長の私としては、中学生で県下ベストエイトに入る実力の持ち主には入ってもらいたいんだけど」

「県下ベストエイト？」

良平が驚いて声を上げる。翔太は少し恥ずかしい思いをしながらも、それが事実であることを首肯した。それと同時に、自分を引っ張ってきた人が部長であることに少し驚く。

「まあ、無理に入れるのは私もいやだから。やる気がないのに入ってもらっても練習の邪魔になるだけだし」

「無理やりここに引っ張ってきた人の発言としては矛盾してない？」

そう突っ込みを入れたのは、いつの間にか部長の後ろに立っていた女子生徒だった。細身だが、背が低く、すらっとした印象は受けない。身長はおそらく百五十センチほどしかないだろう。

どこか無邪気な雰囲気のある顔はかわいいという正直な印象を持たせる。ロングの髪を結んでポニーテールにし、運動をするうえで邪魔にならないようにしているようだった。

「こんにちは。志村麻紀しむら まきです。副部長やってます。よろしくね」

いきなりの闖入者に驚いている翔太と良平に、笑顔で自己紹介をしてくる。翔太たちは何と答えていいのあ戸惑いつつ、とりあえず「よろしく願います」というのにとどめた。

「ま、無理やり引っ張ってきたのはこの部活を体験してもらったためだからオーケーなのよ。それじゃ、ちょうどころ合いだし一年生を集めようかな」

そう言って部長は一年生に集合をかけ、一か所に集める。顧問も他の先輩もいないのだからいいのかと翔太はなかなかにしていたが、安奈は気にした様子もなく堂々と話し始めた。

「はじめまして、一年生のみなさん！ この部活の部長をしている二年生の大海安奈おおつみ あんなよ。驚いているかもしれないけど、我が部は今深刻な部員不足で私と副部長しか部員がいないの」

一年生の間から驚きのざわめきが上がる。翔太も思わず隣の良平と顔を見合わせる。部員二人など、信じられなかったのだ。

「そのため部員は一人でも多いほうがいいわ。特に男子諸君にはぜひ入ってほしいと思ってる。まだ今は仮入部期間だけど、どんどん参加してください」

そこで部長は後ろに下がり、今度は副部長の麻紀が前に出る。

「はじめまして。副部長の志村麻紀です。みたところ今の段階では男子の数が多いなんて喜んでます。勿論、女子部員も歓迎するから、友達も誘ってどんどん来てください」

無邪気で明るい声に、その場にいた男子が半分うつとりする。それを半ばあきれて見ながら、翔太は頭の中で入部について考えていた。

高校に入ったら部活には入らないでおこうと思っていた。自分などが入っても上手く溶け込める自身がないし、友人もできないのであれば部活動は苦しい場所となるだけだ。ここに来るまではそう考えていたのだが、今は少し考えが変わってきている。顔をあげると、気のよさそうな先輩がたっており、隣を見る笑顔の良平が立っている。ここのなら、大丈夫な気がするのだ。

何より、久しぶりにラケットを握ってボールを打ったら、からだが疼いてしまったのも事実だった。

「いやー、面白そうな先輩やな。ガチで卓球やろうと思うとったけど、卓球以外の意味でも部活来るのが楽しみになりそうや」

「そうだね」

良平のひとりごちのような言葉に、翔太の口が思わず動く。良平が少し驚いてこちらを振り返ってきて、翔太はなんだか恥ずかしくなりうつむいた。

「おお、なんや、入部する気になったんか？」

「まだ微妙」

そう答えたが、翔太の顔は思わず笑顔になっていた。

3 部活動（後書き）

アクセス解析をときどき見るのですが、こんなにも読んでくださっている人がいると知ってびっくりします。こんな小説でも、少しでも目を通してくれる人がいると知れてうれしい限りです。ありがとうございます。

4 できつつある日常（前書き）

今回少しほのぼのしてる感じです。

4 できつつある日常

入学してから三週間もすると、新しい環境にも慣れ、学校には日常というありきたりな空気が流れ始める。

翔太にとつても、それは当てはまることだった。

クラスでは依然友人はいない。たまにクラスメイトとかわす言葉も、事務的な者しかなかった。

それでも翔太は、学校で居場所を見つけつつあった。

昼食の時間になれば屋上へ行き、楓と一緒に弁当を広げる。相変わらず会話は少なく、座る距離もすこし縮んだだけ。それでも、翔太は屋上にいるのが嫌ではなかった。

そして放課後になると部活動へといった。

いまだ仮入部期間で、参加できるのは最初の一時間だけという決まりがあつたが、それでも翔太は毎日のように卓球部に行き、毎日のように良平と球を打った。

良平とは校内でも一度出くわした。お互い移動教室の途中で、良平は何人かの友人と一緒にいたが、方や翔太は一人で歩いていた。なんだか気まずい思いをして視線をそらしてしまったが、その日の部活であつた良平はいつもと変わらない良平だった。

「ふー、今日もごつつい汗かいたわ」

部活終了後、着替えながら良平が言う。おじさんみたいだよ、と翔太がつぶやくと、いやいや、と良平が首を横に振った。

「俺お遊びで打つのも好きやけど、そうやって打つとこんな汗はかけへん。翔太とやるとガチで打たなканぶんこんな汗かけるんや。感謝しとるで」

だからこれからも俺と打ってくれ。そう笑顔で良平はつき足した。そんな笑顔を見て、翔太は心の中が暖かいものであふれる。おそらく廊下で一人で歩いている翔太を見て、良平は気を使ってくれているのだろつ。人付き合いは苦手かもしれないが、俺はそんなこと

は気しない、と。口では出さないが、良平のそんな気遣いが翔太は嬉しかった。

そんな風に月日はたち、明日はとうとう部活登録の日となった。

明日の部活動で、部長または顧問に部活動登録用紙に名前を書いて提出すれば登録完了となる。翔太はすでに配られている登録用紙に、自分の名前を書いてかばんの中に入れていた。

自分が部活動に参加するのがうれしくて、翔太は弾んだ気持ちで屋上の扉をあける。そこには今日も、楓が座って昼食を食べていた。相変わらずの無表情で、遠くの山を見つめている。結局なぜ山に行ってみたのかは聞けないままだったが、人には聞いてほしくないこともあるだろうと翔太はそれ以上その話題に踏み込まないでいた。まだ楓の隣に座ることはできず、翔太は楓から少し離れた所に座る。そのまま弁当を広げて、自分も楓が見つめる山に視線を向けた。今日はとてもよく晴れていて、山の緑がくっきりと見えていた。

天気の良い日は気持ちがいい。翔太は大きく息を吸い込んで春の空気を肺いっぱい満たしてから、静かに吐き出す。そうしてから弁当を一口ほおばった。いつもと変わらないはずの弁当も、どこか今日はおいしく感じる。

明日が部活登録の日だから、浮かれているのが自分でもわかった。そこでふと、あることに思い当って翔太は楓に聞いた。

「ねえ、清泉さんは何か部活動に入る？」

放課後の帰り道、楓を見たことは一度もない。最近は翔太が部活動に行ってしまうためということもあるだろうが、入学したての頃、仮入部期間が始まったばかりのころも楓を見かけていなかったことから、もしかしたらどこかの部活動に入るつもりかもしれないと翔太は考えた。

「ううん、入らないつもり」

しかし、楓の返答はそんなものだった。どこかの部活に入るかも

しれないと思いつつ、その返答はやはり、という思いを翔太の中に落とした。

「仮入部もどこにもいってないの？」

「うん」

楓は答えながら、弁当を食べるのを止めない。そうか、と呟いて、翔太も自分の弁当に箸を持っていく。

「相田君は？」

翔太がおかずを二、三口食べたところで、楓が訪ねてきた。ん？と振り向くと楓が弁当を食べる箸を止めてこちらを向いている。その目を見つめられて、なぜか翔太は本当のことを言おうか迷ったが、結局は真実が口から出ていた。

「一応、卓球部にしようかなって」

「…そう」

いつものように無表情につぶやいたその言葉に、翔太はどこかさびしさのようなものを感じた気がした。あわてて翔太はつけたす。

「あ、だからといって、別に卓球部の友達と弁当食べるからもうここに来ないとか、そういうことは…」

そう言ってしまったから、翔太は後悔する。これではどこか押しつけがましい上に、まるで自分がいやいやここにきているような印象を相手に与えるのではないかと思ったからだ。それに、楓が翔太にいてほしいことを望んでいるとも限らない。なんだか一人恥ずかしいような、申し訳ないような気持ちになって、翔太は口をつぐんで顔を伏せた。楓の顔が見れなくなる。

しばらく、沈黙が続いた。楓のほうを見れないため、楓がいま何をしているのかわからない。翔太の言葉を待つてこちらを見ているかもしれないし、何事もなかったかのように弁当を食べているかもしれない。翔太はそれを確認できないまま、しばらく黙っていた。

「ねえ」

そう楓が声をかけてきたのは、沈黙が続いて一分ほどたってからだっただろう。翔太が顔を上げると、楓は山を見つめたまま無表情

でこう尋ねてきた。

「どうして、毎日ここに来るの？」

同じ問いかけは、前にもあった気がした。楓は依然山のほうを見つめており、こちらに視線を向けない。翔太は何と答えていいかわからず、すこし考え込む。

以前は、昼食を食べる友人がいないからだった。だから逃げるようにしてこの屋上に来て、たまたま居合わせた楓と一緒に弁当を食べていた。しかし、今はどうなのだろうか。本当に、弁当を食べる友達がいないと、それだけの理由でここにきているのだろうか。

いつまでも答えが返ってこないことをいぶかしんだのか、楓が問いかけるようにこちらに視線を向けてくる。風にその髪の毛がなびき、整った顔がこちらに向いたとき、翔太の口は自然と自分の気持ちをついていた。

「楓がいて、一緒に弁当を、食べられるから」

楓のいつもの無表情が少しだけ驚いたような顔をして、翔太は我に返り、自分の無意識のうちにした発言を振り返る。その台詞を思い返して、またもやあわてて翔太は口を開いた。

「あ、ごめん。下の名前で呼び捨てとか、なんかなれなくて。これからは、気をつけるから……」

「うつん」

翔太の言葉を、しかし楓は首を横に振って止める。その顔は、わかりにくいけど、少しだけ、本当に少しだけ、笑っているように見えた。

「そう」

そう言っただけ、楓はまた山のほうを見て弁当を食べ始めてしまう。その横顔はもういつも通りの無表情で、何を考えているかわからなかったが、それでも拒絶されている様子はなかった。その横顔を見て、少し気まづくなりながらも、翔太も残った昼食に取り掛かる。

春の陽光が、暖かく屋上を包んでいた。

4 できつつある日常（後書き）

5 入部テスト（前書き）

今回少し卓球の専門用語が出てくるので、そのことについて少しここで説明しておきます。

卓球の試合は五セットマッチで行われます。つまり、先に三セットとったほうが勝ちです。

一セットは十一点先取。先に十一点とったほうがそのセットをとることが出来ます。

ペンホルダー：ペンを持つようなグリップのラケットです。温泉卓球とかでよく使う、ラケットの片方の面でしか打てない（片方にしかゴムがついていない）ラケットです。

シェークハンド：テニスのラケットと同じようなグリップのラケットです。両方の面でボールが打てる（両方の面にゴムがついている）ラケットです。

5 入部テスト

その日の放課後、翔太はいつも通り部活へと向かった。更衣室をあけると、良平が一足先に着替えているところに出くわす。

「よお、翔太やんか」

「よ、良平」

だいぶ慣れてきたこともあり軽く挨拶をかわす。翔太も荷物の中から着替えを取り出して、着替え始めた。

「さて、いよいよ明日は登録日やな。翔太結局どないするん？」

良平にはまだ卓球部に入ろうと思っっていることを教えていない。初めて仮入部に来た時、まだ入ろうか迷っていると言ったのを覚えて聞いてきたのだろう。

「えっと、やつぱりせつかくだから、入ろうかなって」

少し照れながらも、翔太は正直に答える。おお、と良平が嬉しそうに声を上げた。

「ホンマかいな！ これでこれから毎日翔太と卓球出来るっちゅーことになるんやな！」

心底うれしそうにガッツポーズする良平。本当にこの友人はいいやつだと、翔太は嬉しさのあまり笑ってしまう。

二人して上機嫌で更衣室を出て体育館に移動すると、すでにほとんどの部員が集まっていた。仮入部初日からだいぶ人数が増えており、一年生だけでも男女合わせて十五人ほどになっているだろう。少し人数が多いが、卓球を通して良平以外の同級生とも友人になれるといいなと翔太はひそかに期待する。これからの生活に、今はとても期待感があふれていた。

「さて、それじゃあいったん集まってもらおうかな。今日は少し特別なことするから集まって！」

一年生だいたい揃ったところを見計らって杏奈がそう声をかける。今日もいつも通り、威風堂々と立つ姿は部長という雰囲気かび

ったり合っていた。

「えーと、後ろのほう聞こえる？ 私は見えないかもしれないけど、声だけ聞こえればいいから。おい、そこしゃべらない！ よし、いいね」

ひとしきり一年生を静かにさせて、杏奈はにつこりと笑う。この部長ならば、おそらくこれだけ人数がいてもうまくまとめていけるだろう。

「さて、みんなたくさん集まってくれたわね。私たち上級生としてもこれだけ集まってくれると嬉しいわ」

満面の笑顔で言う杏奈。その後ろでは、麻紀もにこにこ嬉しそうに笑っている。

「いよいよ明日は部活登録日。まあ、登録日っていつでも、実は明日以降も部活登録は出来るから、明日の登録日以降に入りたいたいって言う子がいればどんどん連れてきてもらって構わないから、そこんところよろしくね」

まだ増やす気なのかとすこし翔太は驚くが、しかし杏奈が次に発した言葉でその考えは百八十度変わった。

「と、いうことで、入部テストを行います」

……………？

「杏奈ちゃん、文脈が繋がってないせいで一年生が戸惑ってる」

「ええ？ きちんとつながってたじゃん」

後ろで黙っていた麻紀が突っ込むが、杏奈は自分の発言のどこがおかしかったのか理解していない。正直に言っと、翔太自身杏奈の言葉が理解できなかった。

「あの、先輩」

すると、一年生の疑問を代表するように良平がずっと手を挙げる。ん？ と杏奈が促すと、良平は一年生のだれもが持っている疑問を口にした。

「今までの話の流れだと、部員は多くしたいみたいな印象を受けたんですが、入部テストを行うっていうことは、逆に部員を絞り込む

っていいことですよな？」

すこし関西なまりの敬語だったが、そこには誰も口をはさまない。むしろ杏奈の応答に意識が向いていて、それどころではなかった。

「そう。つまり、部員はほしいけど、量よりも質を優先させようっていう意味。だから、今から入部テストをして、合格した人だけこの部に入部することを認めます」

「それって学校の規則的にありなんですか？」

別の一年生が手を挙げて質問するが、もちろんよ、と杏奈は答える。

「学校側は部活動の活動やその中身、部の勧誘や入部手続きなどの条件は一切関与していない。基本的に、部活の中の規則は部活の中で決めろっていうことになってるの」

そのばに一瞬の沈黙が下りる。つまり、この部に入ろうとしても入れないものがあるということだ。

「それで、そのテストの内容はなんなんですか？」

良平が最も気になる質問を口にする。すると杏奈はにやり、と無言で笑いだす。その笑いはどこか意地悪な印象を受けた。

「テストは、私と麻紀と卓球をしてもらうこと！」

一年生の間にすこし緊張が走る。卓球部のテストなのだから卓球に関するのだとは思っていたが、先輩と打つことになるとは思ってもみなかった。

「今までの仮入部期間で、みんなの打ち方とかは見せてもらったわ。それを見て、経験者と私たちが判断した人は私と、初心者、もしくは初心者と変わらないほどの実力と判断した人は麻紀と試合をしてもらうわ」

一年生の間にさらに緊張が走る。思い返してみれば、仮入部期間中先輩二人が卓球をしている姿を見たことがない。二人の実力は、全くの未知数だった。

「勝負は五セットマッチの三セット先取制。私たちに勝つか、私たちが実力を認めた人は入部を許可するわ。どうしてもこの部に入り

たい人は死に物狂いでかかってきなさい」

どちらに挑戦するかはこの紙に書いてあるから。そう言って安奈は一枚の紙を取り出し一年生にみるように回す。翔太もその髪をみると当然というかなんというか、自分は安奈のほうに挑戦しなければならなかった。

その安奈はというと、一年生が紙を見ている間に嬉々としながら自分のラケットを取りだし台の前に立つ。麻紀のほうも自分のラケットを鞆から取り出し、安奈の隣の台についた。

二人のあまりの行動の速さに一年生はどうしていいか戸惑いを覚える。翔太もどうするべきか立ち尽くしてしまっていた。

「あの、先輩」

そこで一人の女子一年生が手を挙げた。少ない女子の中でも、人当たりのよさそうな、しっかり者のような雰囲気放つ一年生だった。

「経験者の子はいいとしても、初心者の子に先輩を倒せるとは思えないんですけど…」

「安心しなさい。麻紀のほうはその辺も考慮して本気ではやらせないから」

安奈がそう言って麻紀のほうに視線を送る。その視線の意味を悟ったように、麻紀は笑顔でラケットを示して見せた。

「私、本当はシェークハンドのラケットを使うんだけど、今回はペンホルダーのラケットを使うから、初心者の子でも勝つのは無理っていうわけではないと思うよ」

「しかも、麻紀も卓球を始めたのは高校に入ってからだ。十分勝つチャンスはあるわ」

安奈が付け足すように言って、他に何か文句はあるかしらと一年生を見回す。もう一年生からは質問は上がらなかった。

「それじゃ、誰からでもかかってきなさい。と、言いたいところだけど、こうなるとたんに委縮しちゃうのが一年市だから、トップバッターはこっちから指名させてもらおうかしら。相田君！」

いきなり名前を呼ばれて、翔太はビクツと肩を震わせる。安奈は一年生の中からしっかりとこちらを見つけているようで、バツチりと視線があつた。

「私の最初の挑戦者はあなたにしてもらうわ。中学生で県ベストエイトに入る実力を見せてもらおうかしら」

挑戦的な笑みを見せながら安奈が肩を回す。翔太は緊張しつつも、恐る恐る前に出た。ラケットを握る手が震える。

「しっかり自分用のラケットは持ってきてるわね？ シューズも卓球用のみたいだし」

一通り翔太の用具を確認してから、安奈はポケットからピンポン球を取り出す。

「それじゃ、始めましょうか」

半ば強引に、試合が始まった。

5 入部テスト（後書き）

少し専門用語が入ったわかりにくい話で申し訳ありません。興味と時間がある人はインターネットなどで写真を見ていただくとより分かると思います。

ちなみにこの話からもわかるように作者は卓球部に所属しております。

6 山へ（前書き）

物語がここから動き出します。

6 山へ

どうしてこうなってしまったのかは分からない。

部活が始まる前に、良平と二人で着替えて時とは考えられないほど落ち込んで、翔太はロッカーから着替えを取りだす。

いきなり行われた入部テスト。結果は一セット取ったものの三セットあんなに取られ敗北。一セット取れて入るが、内容としてはかなりの実力差があった。

「終わった人は解散ね。今日はまだ仮入部期間だから、全員相手するにはちよつと時間が厳しいのよ」

試合が終わった後、安奈は翔太に目もくれずそう言った。完全に翔太のことなど眼中にないように。

そのときの翔太は抜け殻のようにただ立ち尽くしているだけだった。

そのまま、気づいたら更衣室にいて、今も何も考えられないままもぞもぞと着替える。

靴下をはいて、着替え終わった翔太が、半ば無意識に鞆に手を伸ばした時、ロッカーから一枚の紙がひらりと床に落ち、翔太は視線を向ける。

それは、自分の名前が書かれた卓球部の入部届けだった。

「ひっ」

思わず、しゃくりあげる声が出る。視界がにじみそうになり、鼻の奥のほうがつんと痛くなるのがわかった。更衣室には誰もいないが、それでも唇をかみしめ、目からあふれようとするものを必死に食い止める。

やっと見つけたと思った、この学校での居場所。ここでならやっていけると思った、居心地の良い場所。それが手から滑り落ち、届かない場所へと行ってしまった、なくしてしまった。

翔太は溢れそうになる涙をぬぐうと、入部届けをそのままに、鞆

を持って更衣室を出る。そこで誰かとぶつかりそうになり、翔太は顔をあげる。そこには、悔しそうな表情をした良平の顔があった。

「俺も、負けた」

ぼんやりとした頭で、その言葉だけを聞くと、翔太はまた茫然とした表情で歩き出す。自分でもどこに向かっているかわからない状態で、ただ足だけを前に出す。

良平とも、もう一緒に部活はできないのだ。

後ろで良平が何か言っていた気がしたが、翔太の耳には入ってこなかった。

気がつくと、翔太は屋上へと続く扉の前に立っていた。どうしてここに来たのか自分でもわからないまま、翔太はぼんやりと扉を見つめる。そのまま扉を開けようとして、翔太はあることに思い当る。今は昼の昼食の時間ではないため、楓はいないはずだ。

翔太はぼんやりとした頭で、扉わきの掃除用具入れの裏を覗き込む。そこにあるはずの力ギを取りだそうとしたが、しかしそこに鍵はなかった。

ぼんやりとした頭で驚きつつも、まさかと思いドアノブに手をかける。すると、ドアは昼食の時間と同じようになんなく開いた。

そこに、夕暮れの日を浴びた楓が、いつもの場所で山のほうを見つめていた。

翔太は驚きながらも、一歩足を出して屋上へと出る。そこで楓がこちらを振り向き、視線があった。楓のが少しだけ驚いたような表情をする。毎日会ったびに、翔太には楓の微妙な顔の変化が少しだけわかるようになっていた。

なんと声をかけていいのかわからず、翔太は二、三步楓に歩み寄る。その間も楓はこちらを見つめていて、その視線はあつたままだ。やがていつも弁当を食べる位置にたどりついて、翔太は足をとめた。なぜだか、楓にはこれ以上近づくことができなかった。

「もしかして、放課後毎日ここにいるの？」

無意識のうちに翔太の口から疑問がこぼれる。対して楓は、コクリと一度うなずいただけだった。

「何時まで？」

「四時半くらいまで」

ちょうど仮入部の時間が終わる直前である。今日は翔太の仮入部が早めに終わったため、翔太がここにきて也會えたことになる。

「なんで、ここに？」

翔太がそう尋ねると、楓はすぐには返事をせず、ずっと視線を前に戻す。翔太もその視線を追う。視線の先には、楓が昼食の時間中、ずっと見続けている物があつた。

「山を、みているの」

返ってきた返答は、はかなげで、しかしピアノの音色のような優しい雰囲気を含んでいた。その言葉は小さく発せられたにもかかわらず、風に運ばれたように翔太の耳にしっかりと届いた。

「山に、行つてみたいから」

「……いけないの？」

楓に視線を向けて、翔太は問いかける。楓は無言で、一度だけうなずいた。

そのどこか悲しげな、はかなげな横顔を見て、翔太の心のどこかが刺激を受けた。

針で少しだけつつかれたような、どこか物悲しくなでられたような、そんな感覚。

その感覚の正体を、翔太はそつと探る。胸の中のもやもやした概念が少しずつ輪郭を現していくうちに、その中身がだんだんとわかってきた。

自分の求めるものが手に入らない、その感覚を、楓はおそらく、入学してから、もしかしたらそれ以前からずっと味わってきているのだ。そこに行きたいのにいけない。手を伸ばしてもつかめない。それはおそらく、翔太が先ほど味わった感覚と似たものだろう。

自分の中の苦しみは、いまだ残っている。求めていたものが手か

ら離れていった感覚は、今でも手に取るように分かる。その苦しみを確認しようとする、心がとてつもなく苦しくなり、目をそむけなくなる。そんな苦しみを楓はずっと抱えているのかもしれない。

翔太は視線を山に戻す。かすかにかすんで見えるほど、その山は近くにはないし、しかし、見える分だけ遠くもない。山と行っても一つの山があるだけではなく、山脈のようにいくつもの山が連なっている。ここからでは見えないが、おそらくあの山の向こうにもまた同じような山があるはずだ。どこまで行っても、山、山、山。楓が行きたい山がどれかは分からないが、その山脈地帯のどこかではあるはずだ。

いつの間にか、翔太の心の中ではもう決まっていた。見えない力に後押しされるように、翔太は口を開く。

「ねえ、あそこに、一緒に行ってみない？」

いつもの無表情が、完全に驚いているとわかる表情になって、楓が翔太のほうを振り向く。翔太は無意識のうちに笑って、言葉を付け足す。

「行きたいなら、行けばいい。お金がないなら、僕が出す。だから一緒に行こうよ」

しばらく、沈黙が降りた。お互いに視線を合わせたまま、見つめあう時間だけが過ぎる。

やがてゆっくりと、楓の表情が驚きから少しだけ笑顔に変わり、コクリとその首が縦に振られた。

「連れてって」

その表情は、今までの楓の表情の中で、もっとも決意のこもった、美しい笑顔だった。

7 二人旅

楓を誘ったその日、翔太は家に帰って急いで荷造りをしていた。旅行の時に使うスポーツバッグを引っ張り出し、中に着替えなどを詰めていく。

山へと行くことに決めた翔太は、楓にいつ行きたいかを尋ねた。

山に視線を向けたまま、楓は無表情で答えた。

「できるだけ、すぐに」

「なら、明日の朝出発しよう」

明日は金曜日。学校はあるが、今の翔太にはあまり気にならなかった。見えない力は翔太の背中を押し続け、多少の無茶でも気にならなくなっていた。

山を見つめていた楓は、すこしだけ驚いた顔を翔太に向けたが、やがて無言でしっかりとうなずいた。

それから朝八時に翔太の家の最寄り駅に集合すること、すこし距離が遠いので向こうで宿泊すること、具体的な目的地などを決める。考えてみれば山といっても範囲が広すぎて、具体的な地名を聞いていなかったことを翔太はおもいだした。尋ねたところ、楓は一つの地名を挙げる。かろうじて記憶にあった地名だったため、頭の中で地図を開くと、案の定隣の県にある地名だった。日帰りで行くには朝早くに家を出て、夜中にしか帰ってこれないような場所だった。ついでに何かあった時のためにお互いの携帯電話の番号も交換した。これで今日家に帰って何か相談しなければならぬことが出来ても電話をかけられる。

楓の電話番号とアドレスが翔太のケータイに登録される。翔太のケータイのアドレスに、家族以外の名前が初めて登録された。

そんなやり取りを行い、翔太は家に帰ると急いで荷造りに取り掛かった。親には学校が終わった後友達の家泊まりに行くと言いついて準備を進める。その傍ら、机の上のパソコンで宿泊施設や生き

方などを調べる。基本的には電車での移動。楓から予算は聞いていたためそれを考慮して宿泊施設と、使う電車を決める。

予約が空いている宿泊施設を探してみると、民宿が一軒だけ見つかった。前日予約なのでこの際そこは我慢する。民宿なので値段も手ごろだ。

電車も乗り換え時間や路線の一覧が載ったものをプリントアウトする。ついでに宿泊施設近くの地図も検索し、何かあった時のために宿泊施設への連絡先も控えた。

すべての準備を終えたのは、午後の十二時だった。いつもならベツドに入っている時間だが、今は全然眠くない。少しでも寝なければと思いベツドにもぐりこんだが、結局寝つけたのは午前二時を回ったところだった。

翌日、午前七時五十分に翔太が駅に行くと、楓がすでに駅前に立っていた。白のワンピースに、淡いブルーのカーディガンをはおっている。頭にはつば広の帽子をかぶっていた。脇にはキャリアバツクが置いてある。

その楓が向かってくる翔太に気づいて、すこし驚いた表情をする。翔太は恥ずかしい思いをしながらも楓に駆け寄る。

「ごめん、待った？」

ゆつくりと、楓が首を横に振る。その間も視線は翔太に問いかけるように注がれていた。

「それじゃ、さっそく行こうかっていいんだけど、またちょっと待ってもらえる」

翔太はかばんを持ち直して言う。

「これ、トイレで着替えてくるから」

親に学校に行くと言ってあるため、翔太は制服だったのだ。

翔太が着替え終わり、二人は切符を買って、改札口を通る。ホームにはすこし遅めに出勤する人や大学生などがいて、まだ多少込んでいた。迷子になるというほどではないが、あまりしゃべらない楓はふと気付くと見失ってしまいそうになる。翔太は歩く際、楓が出来るだけ視界に入っているように心がけた。

やがて目的の電車がやってきて、翔太と楓は一緒に電車に乗り込む。ピークの時間帯ほどではないが、それでも電車の中には通勤通学の人が多い。自然翔太は楓の近くに立たざるを得なくなった。楓とこんなに近づくのは初めてで、翔太はどこかドキドキしてしまう。と、電車が発車する際のゆれでバランスを崩した楓が翔太のほうに倒れ掛かってきた。

「っ！」

とつさに吊皮を片手でつかみ、バランスをとって楓を受け止める。揺れはすぐに収まり、楓は何とか自分の足でバランスをとれるようになる。

「……ごめんなさい」

もたれかかっていた身体を起こしながら、楓が誤ってくる。翔太は多少パニックになって視線をそらし、「だ、大丈夫」とだけ答えた。すぐに楓の身体が離れるのを感じる。あまりの緊張に、視線を楓のほうにむけられなかった。

初めて触れた女の子の感触に、心臓は過敏に反応してなかなかおさまってくれない。顔が熱くなり赤くなるのを感じる。まずいと思いつつ何かで顔を隠そうとしたが、そんな都合のよいものがあるわけではない。

少しして、ようやく顔の赤みがおさまってきたころ、楓の反応が気になり、恐る恐る翔太は視線を楓にもどした。しかし、翔太の視線に入ってきたのはこちらを見ず、窓の外をじっと見つめる楓の姿だった。

もう何度目になるかもわからないその視線を追いかけると、そこにはいつも見ている、山があった。これから向かうその山を楓はい

つも通りの無表情で見つめている。その横顔からはやはり何も読み取ることはできなかった。

移動中、楓と翔太の間にはほとんどいつていいほど会話がなかった。時たま翔太が行先を教えるために声をかけるだけで、それに楓が淡白に答える。今まで屋上でもそれほど会話が少なかったわけではないし、それも別段気にならなかったのだが、いつもと場所が違うことと、二人だけの旅行という特殊な環境が翔太を変な気分にならせていた。

一方の楓はというと、いつも以上に無言だった。翔太が問いかけてもどこか上の空だし、呼びかけても反応が返ってこないということもあった。無視されているのだろうかと翔太は少し不安になったが、旅行が進むにつれてそうではないことが分かってきた。

楓は、いつも以上に視線の先にある山を意識しているのだ。正確には、今自分たちが向かっている場所を、といったほうがいいかもしれない。始終電車の窓から外を眺め、視界に少しでも山が入るように意識しているのがわかってきた。

昼食は、ある駅で乗り換えの電車を待っているときに駅弁で済ませた。ホームのベンチに一緒に座るも、席は二つ分間をあけた状態で。食事中も会話はほとんどなく、どこか気まずい雰囲気を感じていた翔太は、視線を無意識のうちに楓にむけてしまう。しかし、楓はいつも通りの無表情で線路の先、これから自分たちが向かう先を見つめているだけだった。そのたびに少し気落ちしながら昼食に戻るという作業を何度か繰り返した後、翔太は楓の弁当がほとんど減っていないことに気がついた。

「ごはん、食べないの？」

おそろおそろ声をかけると、楓がはじかれたようにこちらを振り向く。無表情ながら、その顔はどこか緊張しているようだった。

「大丈夫？　なんだか、あんまり具合がよくなさそうだけど…」

「大丈夫」

無表情で首を横に振り、楓は一口弁当を口に入れる。しかし、またすぐに線路の先を見てしまい、昼食を食べる手が止まる。そんな楓を見て、翔太は不安な思いに駆られた。

楓がどんな思いで線路の先に視線を向けているのか、翔太にはわからない。実はいやなことを強要しているのかもしれないし、楓は本当は行きたくないのかもしれない。それでも、翔太が誘ったとき楓はいいと答え、すぐに出発することも了承した。それは翔太が強要したことではなく、楓が自分で決めたことのはずだ。ならば自分の役目は楓を目的地まで連れていくことのはずである。それは翔太が楓を誘った瞬間から決めていたことだ。

いつもとすこしだけ雰囲気の違いを、翔太は目的地まで連れていく。

午後二時。 目的の駅に二人は到着した。

7 二人旅（後書き）

服の名前を知らないものですから、結局楓のファッションが自分が知ってる服の名前だけで表現しました。次に服の説明を書くころまでには勉強しておこうと思います。

8 なみだ

降りた駅は、無人の小さな駅だった。

線路の数も一本で、周りに人家も見当たらない。線路に沿うように国道が走っており、車が忘れたところに通り過ぎていく。

ホームに立つて線路のほうを向くと、その向こう側に湖が広がっている。湖は山を背景にするように広がっており、水面は青空を映してきらきらと輝いている。

その風景に翔太は感動を覚える。すこしひんやりした風がほほをなで、心地よい開放感を感じる。このままずっと、この風景を黙ってみていたい気分だった。

ふと思い出して隣を見ると、楓もどこか感動したように、口を少し開いてその風景を眺めていた。その目には今までのようにどこか遠くに視線を向け緊張している雰囲気はない。その表情は、まぎれもなく驚きと感動を表していた。

そのまましばらく、二人は黙ってその湖を見つめていた。後ろの国道を通り過ぎる車のエンジン音も二人の耳には入ってこない。それなのに、水鳥が水面に降り立つかすかな水音や、風が湖のほとりの草むらを揺らす音だけはしっかりと聞こえてきた。

どれほどそうしていただろうか。ふと横をみると、楓がこちらを窺うように見つめていた。そこで翔太は楓の存在を思い出す。楓の存在を忘れてしまうほど、翔太は湖に見入っていたのだ。

「ああ、ごめん。もうそろそろ行こうか」
「うん」

静かにうなずいて、楓は自分のキャリーケースを持つ。翔太も自分のスポーツバッグをもって、駅を出た。

駅といっても、ホームと小さな小屋のようなものがあるだけである。当然、自動改札機や券売機もない。二人は駅から、国道にそって続いている歩道に出た。

右手は自分たちが電車に乗ってきた方向である。遠くに目を向けても山しか見えず、道と線路が並行して延々と続いているだけである。

左手を見てみると、少し行っただころに看板が立っていた。『ようこそ、自然と緑あふれる街へ』と書かれたその看板には、そのあとに町の名前が載っている。どうやら無事目的地に着いたことをその看板は教えてくれた。ここからに十分ほど歩いたところに、自分たちが今日泊まる民宿があるはずだ。

「まず民宿に行つて荷物を置こうと思うんだけど、いいかな？」

翔太が道の先を示しながら楓に尋ねると、楓は無言でコクリとならず。そうして二人は並んで歩き始めた。

左手に湖を見ながら、二人は無言で歩いた。それでもなぜか翔太は移動中のような息苦しさを感じなかった。なぜかこの場所では、無言で歩いたほうがいいような気さえた。楽しくおしゃべりしながら歩いてもいいかもしれないが、黙ったまま歩いたほうがこの雰囲気壊さずいい気がした。時折湖のほうからやさしい風が吹いてきて、身体をなでるのも心地よい。

自分の左側を歩いている楓を見ると、その表情もいつもより心地よさそうに見える。来る途中は少し心配もしていたが、やはり楓をここに連れてきてよかったと翔太は思った。

駅を出てに十分後、翔太と楓は目的の民宿に到着していた。扉をあけると、中から一人のおばあさんが出てきて笑顔で二人を出迎えた。背筋が少し曲がっているように見えるが、足取りはしっかりしており、表情も生き生きしている。この人がこの民宿の管理人のようだった。

「こんにちは。今日ここに止めていただく相田です」

「こんにちは。長旅御苦労さまでした。お部屋のほうにすぐご案内しますのでおあがりください」

おばあさんに促されるまま翔太と楓は上がり、部屋へと向かう。

あてがわれた部屋は、二階の一部屋だった。

「ここがお客様のお部屋になります。お出かけになるときはこちら
の力ギで施錠してからフロントにお預けください」

「ありがとうございます」

「当民宿には本日お客様だけのお泊りですが、お風呂は一つしか
ないため申し訳ないのですが交代で入っていただくことになります」

「はい、大丈夫です」

「では、何かありましたらフロントに声をおかけください。どうぞ
ごゆっくり」

そう言っておばあさんは部屋を出て行った。翔太はぐると部屋
を見回してから、隅に荷物を置く。広さは十畳。部屋の真ん中には
ちゃぶ台が置いてあり、隅にはテレビ。押入れを開けると、二人分
の布団が置いてあ……。

「あ……」

翔太はそこでとんでもないミスに気がついた。二人で一部屋を予
約したが、今一緒に来ているのは楓である。同年代の女の子。ここ
に二人で泊るということはつまり同じ部屋で寝るということ……。

「ねえ」

「はい！」

そんなことを考えていた時楓が声をかけてきたため、翔太は思わ
ず飛び上がって返事をする。おそらく同じ部屋に連れてこられたこ
とを問い詰められるだろうと思った翔太は必死で他意はないことを
弁明しようと頭を回転させたが、翔太が何かを言う前に楓のほう
が先に口を開いた。

「私、ちよつと、行きたいところが、あるんだけど……」

しかしその言葉を聞いて、翔太の焦りが少しおさまる。冷静に考
えると、楓から声をかけてきたのはこの旅行中初めてかもしれない。
覚めてきた頭で楓を見ると、楓の表情は移動中と同じように、い
や、それ以上に緊張しているように見えた。身体の横でキュツと握

られたこぶしが少し震えているのがわかる。それをみて、翔太はようやく冷静になることが出来た。

「いいよ。一緒にいこうか」

楓の緊張が何から来るのかはわからないが、すこしでもその緊張を和らげようと翔太は笑顔を浮かべる。下手な作り笑いだっただ、楓は少しだけ安心したようでコクリとうなずいた。

楓が行きたいと行ったのは、近くの高原だった。冬になると雪が積もりスキー場にもなっているというその高原は、この民宿から歩いて五分ほどの場所にあるリフトに乗って行けるということだった。簡単な道順を民宿のおばさんに聞いた翔太は、楓と一緒にそのリフト乗り場へと向かう。歩いている間中、楓はやはりどこか緊張した様子で無言で歩いていった。

何か話でもして気を紛らわせた方がいいのではないかと翔太は考えたが、自分はそんなおしゃべり上手ではない。それに、楓に何か話しかけても淡白な返事が返ってくるだけで、おそらく会話はあまり弾まないだろう。翔太はどこか息苦しさを感じながらも、楓の希望をかなえるために目的地まで歩き続けた。

到着した場所には、一本のリフトが山の上へと延びていた。リフトの横には斜面一面の木をすべて切り取った場所があった。おそらく、冬になればスキー場のゲレンデとなるであろう。

リフト乗り場には観光客らしい人がちらほらと見えた。登山をするような格好の人や、カメラと三脚を持った人などがまばらにリフトに乗っている。翔太たちもリフト券を買い、その人たちと同じようにリフトに乗った。

リフトは四人乗りのクワッドリフトだったが、翔太と楓は二人で乗る。無意識のうちに座った位置はリフトの真ん中で、まるで二人より添うような形にだった。

リフトが登っていくにつれて、楓の緊張は少しずつ高まっている

ようだった。表情が一層固くなっていくのがわかる。安全バーに乗せられた手は震えており、唇はキュツと結ばれていた。

リフトが登り続ける間、翔太は何とか楓の緊張をほぐせないかと頭をめぐらした。楓が何に呈して緊張しているのかわからないし、そもそも楓がここに来たいといった理由もわからない。そんな状態で緊張をほぐすなど何か気のきいた話しかないような気がしたのだが、それも翔太には出来ない。それでも何かしてあげたい、何とかできないかと考えるうちに、翔太の頭にひとつだけアイデアが浮かぶ。それはあまりにも不器用で、恥ずかしいことだったが、それでも、楓のためになるなら翔太は手を動かした。

その手が、そっと楓の肩に触れる。緊張した表情でリフトが登る先に視線を向けていた楓はびっくりしてすこし身体を震わて翔太のほうを振り向く。あまりに緊張していて、翔太の存在を忘れていたようだった。そんな見慣れない楓の様子に戸惑いながらも、翔太は出来るだけやさしく口を開く。

「大丈夫？」

しばらく無言で翔太のほうを見つめていた楓は、やがてゆっくりとうなずく。その表情はやはり緊張したままだった。

「もしいやなら、リフトを降りてすぐ引き返すこともできるよ。もし今日が嫌なら、明日来てもいいし。だから、無理しなくて大丈夫だよ？」

とてもストレートな、不器用な心遣い。それでも、翔太は気のきいたおしゃべりも、緊張をうまくほぐす方法も知らない。だから素直に、今の気持ちを楓に投げかけた。

少しだけ、迷うように楓は視線をさまよわせた。安全バーに乗せられた手はいまや緊張のあまり関節が白くなるほど強く安全バーを握り締めている。翔太が触れる肩からも震えが伝わってくる。それでも、楓はすっと視線を翔太に戻し、しっかりと首を横に振った。

「…大丈夫。ありがとう」

そう言われれば、翔太はもう何も言えない。依然楓は緊張してい

るようだったが、それでも翔太はその肩から手を離す。楓は翔太にむけていた視線をまた前にむけ、しっかりとリフトが進んでいく方向を見つめる。緊張は抜けていなくても、その表情にはしっかりとその緊張と戦おうという意思が見て取れて、翔太はそれ以上何もいわなかった。

やがて、リフトの終着点に到着した。

リフトの終着点は小屋のようになっていて、その小屋の中にリフトが吸い込まれるように入っていく。安全バーを上げて、減速したリフトから翔太と楓は地面に降りた。リフトから地面に降りるのがうまくいかなかったようで、楓が思わずふらつく。とっさに、翔太は手を伸ばして楓を支えた。

「大丈夫？」

あわてて顔を覗き込むと、楓は緊張しながらも、大丈夫というように笑顔を作ってうなずいた。ゆっくりと自分の足で立ち上がる楓から翔太は手を離し、楓の横に並んで歩きだす。そうして、薄暗い小屋の中から、二人は一緒に外に出た。

そこには、今までに見たこともないような美しい風景が広がっていた。

他にもっと表現の仕方があるのかもしれない。しかし、翔太にとってその風景は、それ以上の言葉で言い表すことのできないものだった。

正面に見えるのは遠くの山々。ところどころその頂上に雪を残すそれらは、言いようのないほど素晴らしいコントラストと風景を作り出している。空の上には、真つ青な空にイントネーションを加えるかのような白い雲が点在し、絵にかいたような絶景を作り出している。

正面のそんな景観から横に視線を移すと、色とりどりの花が緑の芝のあちこちに点在している。バスケットコートが三つは入るだろ

うと思われるその広い芝生の先には斜面に沿った林があり、そこから小川が流れてきて自分たちの前を横切って左側へと続いている。左側からも小川が流れてきており、その小川と合流してリフトで登ってきた方向へと流れていた。そのまま左側へ視線を向けると、小さな滝が流れ落ちていて、涼しげな風をこちらに送ってきていた。まるで楽園。この風景を美しいと言わずなんと言おうか。美しいという言葉がこの場所のために存在したかのような錯覚さえ受けるその場所に、翔太は言葉も出ずに目を奪われ立ちつくす。今の気持ちをどう言い表しているのか分からず、思わず求めるような視線を隣の楓に移した時、翔太の感動は一瞬にして吹き飛んだ。

楓が、涙をほほに流して、その風景を見つめていた。

なにがどうなったかわからず、翔太は思わず反応に困る。と、楓の足から力が抜け、ふっと膝が地面に着いた。翔太はすぐさまがみこんで、楓の身体が倒れないように支える。楓は力の入らなくなつたその身体を翔太に預け、嗚咽を漏らし始めた。

「か、楓？」

肩を揺らし、翔太は必死に呼びかける。しかし、楓の涙は止まらず、一向に泣きやむ様子もない。翔太の服を助けを求めるように掴んできて、翔太は思わずその手を握った。それでも楓は泣き続ける。

「楓？ 楓、大丈夫？」

翔太は必死に呼びかける。すると、楓の口から嗚咽とともに、何か言葉が聞こえた気がした。翔太はその言葉を聞き取ろうと、楓の口に耳を近付ける。本当にそう言っていたのかはわからないし、嗚咽がたまたまそう聞こえただけかもしれないが、翔太の耳にはこう聞こえた。

お母さん、と。

8 なみだ（後書き）

情景描写が下手ですみません。書きたいという衝動だけが先走って書いた話なので、ところどころ申し訳ない点があるかも知れませんが、読んでいただければありがたいです。

9 理由（前書き）

物語もだいぶクライマックスです。このあたり勢いだけで書いているのでだいぶ雑かも知れませんが、生あたたかく読んでいただけると幸いです。

9 理由

楓が泣き出してからのあとは、大変だったと言わざるを得ない。まず、何事かと思つた周りの大人たちが集まつてきた。

大人たちの手を借りて楓をレストハウスまで連れていくことは出来たのだが、そこからが大変だった。楓がどうしていきなり泣き出したのかを大人たちに質問され、それがわからないから答えあぐねていると、そのうち自分たちはどうしてここにいるのか尋ねられた。どう考えても、金曜日に高校生二人がこんなところにいるのはおかしい。それにも答えあぐねていると、今度は楓と自分の関係を尋ねられる。友人ですと答えると、どこで知り合つたのか、どこから来たのか、宿泊先はどこかなど次々に質問が投げかけられた。

そんな質問攻めにあつているうちに、隣に座っている楓が泣きやんだ。それを見て追及の手が病んだ一瞬のすきを突いて翔太と楓はレストハウスを出た。そのまま逃げるようにリフトに乗り、民宿への帰途に就いたのである。

結局、民宿へと帰る間奏では泣いた理由を言わなかった。

午後七時半時。翔太は民宿の自室で、窓を開け、ふる上がりの身体を冷やしていた。

夕食は民宿の近くにあつたコンビニで買つてきた弁当で済ませた。おかみさんが風呂の用意が出来たといいに来たのはそんな時だった。民宿の風呂は一つしかなく、交代で入ってもらうことになることを許してほしいというおかみさんに、大丈夫ですと言って楓とどちらが先に入るか相談した。お湯を汚しても悪いと思い楓に先に入るよう勧めたが、楓は首を横に振り翔太に先に入るよう促した。どうしても自分の意見を曲げないようだったため、結局翔太が先に風呂に入ることになった。

楓は帰ってきてから、いつも通りの無表情に戻っていた。正確に言えば、いつもの無表情よりもどこかつきものが取れたように晴れ晴れした雰囲気漂っている。あの高原に行つて、泣いた後楓の中で何かが変わったのかもしれないが、翔太は楓にそのことを聞けないでいた。なぜだか、そのことについては触れてはいけなような気がした。

とにかく、今日を無事に終えることができてよかった。

そんなことを考えながら窓の外を夜空を眺めていると、部屋の扉がノックされる音が聞こえた。おかみさんに頼んで楓とは部屋を別々にしてもらったため、一瞬楓とも思ったが、楓は今風呂に入っているはずである。ならばおかみさんだろうかと適当に考え、どうぞと答えると、案の定おかみさんがお盆を持って扉を開けた。

「失礼します。お風呂上りに冷えた麦茶でもいかがでしょうか」

お盆にはガラスのコップが二つと、麦茶が入っているであろうポットが乗っていた。

「ありがとうございます。でも、いいんですか？」

民宿には基本的に、こういったサービスはないはずだ。そう考えた翔太の言葉に、おかみさんはふふふ、と笑う。

「これはサービスのようなものです。さきほど隣の御嬢さんにも同じサービスをしてまいりました」

そう言っておかみさんはお盆を手に部屋の中に入ってくる。翔太の隣にお盆をおくと、コップを一つ手にとってそこにポットの中身を注いだ。

「ただ、もしお客様がよろしいとおっしゃるのなら……」

麦茶を注ぎながらおかみさんが言う。翔太はなんだろうかとかおかみさんのほうを見た。

「少しお話をさせていただいてもよろしいでしょうか？ この年にこの民宿に一人だと何分人恋しくなるもので」

おかみさんは乾いた笑い声を上げる。その笑顔には、あきらめと寂しさが入り混じっているように見えた。翔太は差し出された麦茶

を受け取りながら、笑顔でうなづく。

「僕でよければ。でも、僕そんなにおしゃべりは得意じゃないんで、楽しんでいただけるかどうかかわからないんですけど」

「いえいえ、お話してくださるだけで結構ですよ」

笑顔で言いながら、おかみさんはお盆に乗っていたもう一つのコップにも麦茶を注ぐ。そこでお盆にコップが二つのついていた理由を翔太は理解した。

「でも、いきなりおしゃべりしようとしても、何を話せばいいのかわちよつと困ってしまうんですが」

翔太は麦茶を一口飲みながら言う。冷えた麦茶は、火照った身体の間々に心地よく沁みるようだった。

「では、お客様がお連れ様と二人でここに来た理由などお聞かせいただけないでしょうか。もちろん、お話ししたく何のであれば無理にとは言いませんが」

「いえ、そういうことでしたら構わないですよ」

そう言って翔太は自分たちがここに来た経緯を順番に語った。

昼休憩、屋上で楓と出会ったこと。それから毎日楓と一緒に屋上でご飯を食べるようになったこと。楓が山に行きたがっていたこと。楓の希望をかなえてあげたいためにここに来たこと。

おかみさんは話の合間合間に相槌を打ちながら、翔太の話を聞いていた。やがて昼にここの民宿に到着したところで、翔太は説明を終えた。

「なるほど。それでこの民宿をご利用くださいましたか。まことにありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ、止めていただいてありがとうございます」少し照れながら翔太は頭を下げ、もう一口麦茶をすすす。心地よい感覚が身体に行きわたる。しかし、そんな気持ちのよい気分はおかみさんが言った次の一言で一気に吹っ飛んだ。

「しかし、失礼なのですが、お客様は一つ嘘を付いていらっしゃるような気がするのですが」

ビク、と翔太の身体が震えた。手の中のコップの麦茶が危うげにゆれる。

「うそをついてる？　僕がですか？」

「はい。この年になると、人の嘘などが何となくですが見抜けるようになるのです。まあ、勘のようなもので本当かどうかはわからないのですが、ただ、この感覚もあながち間違っていないことが多いものですから」

おかみさんは少し申し訳なさそうに、それでもまっすぐ翔太の目を見てそう言った。その視線に、翔太は言いようのない緊張感を覚える。なぜか鼓動が速くなっていくのを感じた。

「えっと、僕、嘘なんてついてないんですけど」

しかしその言葉とは裏腹に、翔太の心臓はどんどん加速していく。コップを持つ手は小刻みに震えている。そしてなにより、頭の隅のほうがなんだか痛い気がする。まるで今まで抑え込んできたものが頭の中から必死に飛び出しそうになっている、そんな感覚。

「うそ、というよりも、何かを隠してる感じでしょか。本当のことをすべて言っていないような、そんな感じです。もしおわかりでないのであれば、お客様が気づかぬうちに嘘をついてらっしゃるのかもしれない。もちろん私の勘違いということもあるかもしれないのですが」

頭の痛みがひどくなる。胸が苦しくなってくる。おかみさんの視線が、まっすぐ自分を貫いている。

「もしわからないのであれば、私が違和感を感じた箇所を教えて差し上げるのですが」

子供に語りかけるように、おかみさんは言う。翔太は何も言えず、その視線に吸い込まれそうになる。おかみさんは翔太が何も言わないようなので、再び口を開いた。

「お客様は、お連れ様とここに来られた根本的な理由において、嘘をついていらっしゃるのではないかと思うのですが」

その言葉が、決定打だった。

翔太の頭の中で、つい昨日のことがフラッシュバックする。

部活動の入部テスト。

学校で、居場所がなくなったと思っていた自分が、見つけた居場所。大らかで仕切り屋の杏奈。明るく元気な麻紀。気さくに話しかけてくれて、もつとも仲良くなれるだろうと思っていた良平。

そのすべてが、一瞬にして手からこぼれおちた。やっと手に入れた、そう思っていたものが、この手から離れて行ってしまった。手を伸ばしても、届かなくなってしまった。

自分にはもう、学校での居場所がなくなってしまった。

どこかに自分の居場所はないか。自分を拒絶しない、見放さない、そんな居場所。

そうして翔太の足は、その居場所へと無意識に向いていた。

夕方の、屋上。

そこには楓がひとりいた。毎日、お昼に弁当を食べに行っても自分を拒絶しない、見放さない、一緒にいてくれる学校で唯一の人物。たった一つの自分の居場所。

その居場所を、もう手放したくない。なくしたくない。だから翔太は逃げた。その居場所が他の誰にも奪われないように、その居場所を持って逃げた。

楓の気持ちを利用して。山に行きたいという楓の希望をかなえろという偽善も甚だしい建前を使って。

気付くと、翔太の目から涙があふれていた。畳に落ちる涙は、ぬぐっても拭っても泊らない。ひっく、と息がひきつる。それは止める暇もなく嗚咽に変わり、翔太は床に突っ伏して声を上げて泣いた。自分が嫌で。楓に申し訳なくて。

「僕は、居場所が、ほしくて…」

思わず口から声が漏れる。気持ちに涙だけでは足りず、口からも溢れ出す。

「手に入ったと思ったのに、なくなって…」

女将さんは何を言っているのかわからないだろう。それでも、言葉は止めることができない。おそらく、女将さんもそれをわかっているのだろう。何も言わず、ただ黙って翔太の言葉を聞いている。

「だから、自分のためだけに、楓を…利用して」

涙が一段とあふれる。胸が張り裂けそうになる。自分のことがこれほど憎いと思ったのは初めてだった。自分という存在を消してしまいたい。この見にくい心を葬りたい。

「僕は、醜い人間です」

「…そうかもしれないね」

女将さんがささやくように呟く。翔太の胸の痛みが一層強くなる。しかし、胸を締め付けていた自己嫌悪は次に投げかけられた言葉でかき消された。

「それでも、お客様がいなくなっても誰も許しませんし、解決にもなりません。大事なことは、その過ちを償うことと、次に何をなすか考えることではないでしょうか」

ぴたり、と翔太の涙が止まった。それまで止まりそうもなかった涙がなぜだかそこで止まり、翔太は女将さんの顔を思わず見つめる。女将さんは窓の外を見つめたまま、独り言のように呟いた。

「人生とは、そういうものの繰り返しだと思いますよ」

そう言っ、女将さんはコップを持ったまま立ち上がる。気づくと、廊下のほうから足音が聞こえてきた。楓が、この部屋に向かってきているようだった。

「あとは、お客様がどうするかお考えください」

振り返らずにそういった女将さんの背中が、とても優しく見えた。

9 理由（後書き）

この物語、実は一回書きなおしてあります。一回目書いたのが納得いかなかったわけではなく、USBに保存しておいたデータが破損してしまって、バックアップデータがとっていなかったため、仕方なく書きなおしたのですが…。バックアップデータをとることの大切さを知った一話でした（笑）

10 りゆう(前書き)

とうとう楓の山への執着の理由がわかります。まあ、何と言いま
すか、ものすごくこじつけのようなものになっているので、あまり
過度な期待はしないで読んでみてくださいm(_____)m

女将さんが扉の前に立つのと、扉がノックされる音が聞こえたのは同時だった。女将さんは一度だけ翔太のほうを確認するように視線を投げかけてくる。翔太は目元をぬぐい、鼻をすすってから然りとうなずいた。女将さんは少し笑ってから、扉をゆっくりと開けた。そこには、風呂からあがり、浴衣に着替え、ガラスのコップと麦茶の入ったポットを手に持った楓の姿があった。湿った髪の毛は、後ろで縛ってポニーテールにしてある。

「どうやら、新しいコップを持つてくる必要はないようですね」

楓のコップをみて、おかみさんはそうつぶやく。楓は翔太の部屋からおかみさんが出てきたことに少し驚いたようだったが、すぐに会釈しておかみさんに道をあける。

「ああ、ありがとう。それでは、ごゆっくり」

道を開けてくれた楓にお礼を言い、おかみさんは部屋を出て行った。後には部屋の中で座っている翔太と、扉の前に立つ楓が残された。

「…入っても、いい？」

いつも通りの静かな声で、楓が問いかけてきた。その表情はいつも通りの無表情だが、どこか躊躇しているような印象を受ける。

「うん。いいよ」

翔太は笑顔で答えて、手近にあった座布団を床に敷く。自分から近くもなく、遠くもない、そんな位置。楓はゆっくりと部屋に入ってきて、扉を閉めた後、その座布団に素直に座った。

二人はちょうど向き合うような形で座る。楓は翔太の顔を見て少し驚いたような顔をした。おそらく泣いたばかりだからそれがバレたのだろう。翔太はそのことを尋ねられる前に、話を変えようとポットを持ち上げて、飲む？ と問いかける。少しだけ不思議そうな表情を残したまま、それでも楓はコクリとうなずいて、素直にコッ

プを差し出してきた。翔太はそこに麦茶を注いでやる。

「僕さ、清泉さんに、謝らなきゃいけないことがあるんだ」

麦茶を注ぎ終わってから、翔太がそう切り出した。まっすぐに、楓のほうを見る。楓は少し驚いたような表情をしたが、そこで翔太の言葉を待つことはせず、代わりにこんなことを言った。

「わたしも、言わなきゃいけないことがあるの」

しっかりと翔太の目を見て、そんなことを言った。しかし、すぐに視線を落としてためらうような表情になってしまふ。じっとコップの中の麦茶を見つめているようだった。

なんと声をかけていいのか翔太はわからず、しばらく二人の間に沈黙が下りる。楓の言葉を待つべきか、自分から言うべきか。少し考えてから、翔太は後者をとることにする。まず何よりも先に、自分は楓に謝らなければならない。

「それじゃ、まず、僕から謝らせてくれないかな」

そう声をかけたがしかし、楓は首を横に振った。それは今までの楓からは想像できないような、激しい首の振り方だった。目を瞑り、懇願するように首を振る。後ろで縛った楓の長い髪の毛がそれに合わせて揺れた。

「お願い、私から、言わせて」

相変わらず視線を合わせず、楓はそういう。自分から謝らなければならないと思ったが、先ほどの楓の様子をみて、翔太は結局楓の言葉を待つことにする。またしばらく沈黙が下りたが、やがてひとつ深呼吸吸ってから、楓は話し始めた。

「私、お母さんがいないの」

楓の第一声に、翔太は少し驚きを覚える。しかし、あえて聞き返さず、楓が話しやすいように黙って先を待った。

「もともといたんだけど、私が中学二年生の時に交通事故で死んじゃったの。お父さんは単身赴任してて、一人になっちゃった私はいったん転校してお父さんが勤めてる場所の中学校に転校した」

楓は翔太と目を合わせずに、話し続けた。こんなに話す楓を翔太

は初めてみる。いつもは無表情な顔も、今はどこか悲しそうにうつむいていた。

「でも、転勤が多いお父さんよりはお母さんのほうのおばあちゃんたちにお世話になっていたほうがいいんじゃないかってことになって、高校に入るのと同時にまたお母さんとすんでいた今の町に帰って来たの」

そこで楓は一口麦茶を飲んだ。少し話すのが苦しそうに、ふう、と息を吐き出す。

「お母さんとね、死ぬ前に、一緒に旅行に行こうって言ってたの。お父さんがいないけど、それでも楽しい旅行にしようって、そう話してた矢先、お母さんは事故にあった」

楓はすっと、窓の外に視線を向けた。その視線を、翔太も無意識のうちに追う。そこには、開けられた窓に切り取られた、夜空があった。

「その旅行に行こうって言っていた場所が、ここ」

強い風が、部屋に吹き込んできた。翔太は驚いて楓を見る。楓は窓の外を見つめたまま、無表情でいた。それは、今まで楓が学校の屋上からここをみるときの表情だった。

「ここには、とてもきれいな場所がある。お母さんは昔ここに来たことがあって、その時みたとってもきれいな場所を私にも見せたいだから、一緒に行こうって約束をしていたの。私は、お母さんが死んだ後も、その言葉をずっと忘れることができなかった」

楓は窓の外を見続けている。その視線の先に何が映っているのか、今の翔太にはわからない。窓の外を見ているようで、実はそうではないようだった。

「お父さんと一緒に暮らしている時は、まだよかった。ここから遠かったし、まだ何とか気持ちを抑えていられた。でも、こっちに帰ってきてからは、無理だった。気づくと、いつも母さんと一緒に行こうとしていた山を見てる。あの山を越えれば、お母さんと一緒に行くはずだった場所がある」

まるで楓は、独り言を言うように話し続けた。その言葉は翔太に向けられた言葉だったはずなのに、なぜだか自分に言い聞かせているように翔太には感じた。

「あそこに行ってみたいと思うのだけれど、どうしてそうなのかわからなかった。お母さんはもういないし、あそこに行く意味が本当にあるのかもわからない。それでも、私はここに来たかった。お母さんと一緒にみるはずの景色を見たかった」

そこで楓の視線が翔太に映った。その表情は無表情から、どこかはかなげな微笑に変わっていた。

「そんなとき、あなたがきた」

学校の屋上、初めて扉を開けた時の記憶が、翔太の頭の中でフラッシュバックする。そこで見つけた少女が、いま、自分の前に座っていた。

「ここに來たかったのに、心のどこかで私はここに来ることが怖かったの。お母さんと一緒に來れなかったことを悔やんでしまいそうで、一人だけできているいろいろな思いにつぶされそうな気がして。だからと言って、私、学校では一人だったから、一緒に行こうってお願ひできる友達もいなかった。私、無口で、おしゃべりがほとんどできないから」

一瞬悲しそうな表情が楓の顔に浮かぶ。しかし、その表情はすぐに消え、はかない微笑に変わった。

「そんなとき、あなたは言うてくれた。一緒に行こうって」

夕方、夕日が差し込む屋上で、山を見つめる一人きりの少女に、翔太がかけた言葉だった。

楓の目に、涙が浮かぶ。翔太はその顔を、黙って見つめているしかなかった。楓に、何も言葉をかけることができなかった。

「そして、見せてくれた。私がお母さんと一緒に見に來るはずだった景色を。お母さんが私に見せようとしていたものを。それが、とてもうれしかった」

楓の涙が畳に落ちる。その頬を伝う涙をぬぐうこともせず、楓は

はかなく笑っていた。

「あの時は、泣いちゃってごめん。とっても迷惑かけて、いけないことだとは思ったけど、私、心の中の何かが切れちゃって、泣くのをやめれなかったの。あの時は、ごめんね」

すつと、楓が頭を下げる。あ、いや、と口ごもる翔太にかまわず、楓は顔をあげ、その涙が流れる顔のまま、今までで一番きれいだと思える笑顔を翔太に見せた。

「だから、私をここに連れてきてくれて、一緒にここにきてくれて、どうも……」

「っ！」

そこまで言葉を聞いた瞬間、翔太の体は勝手に動き、楓の口を押さえていた。いきなり動いた翔太に、楓はびっくりして目を向いている。しかし、翔太はその先の言葉を聞くわけにはいかなかった。

「ごめん。その先の言葉は、聞けない」

顔を伏せ、楓の顔を見ないまま、翔太は言った。楓が今口から出そうとした言葉を今の翔太は聞くことができなかった。その言葉を聞いてしまうのは、楓に言わせてしまっただけはいけないことだった。

「僕、楓のことを思って、楓をここに連れて来たんじゃないんだ」

楓の口から手をゆつくりと話しながら、翔太が言った。翔太は顔を伏せたままのため、今の楓の表情をみることができなかったが、それでも翔太の言葉を待っていてくれることだけは気配で分かった。「僕、昨日卓球部の入部テストに落ちちゃって、その、自分の学校での居場所がなくなっちゃうのが怖かったんだ」

胸の奥がまた鈍い痛みを発し始める。その痛みは先ほどよりもだんだん強いものへと変化していった。楓の今聞いた言葉が頭の中で反響し始めて、罪悪感が先ほどよりも増す。

しかし、だからこそ、これは楓に言わなければならない。楓にここで嫌われても、これだけは謝らなければならない。

「僕、クラスでは一人ぼっちで。それでも卓球部なら僕の居場所になると思った。拒絶されないと思った。でも、入部テストで落ちて、

手に入れたと思ったその居場所は、またなくなっちゃった」

声が震える。目がしらが痛み、涙が徐々に出てくる。先ほど止まったと思っていた感情が、再び涙となりあふれ出てくる。

「そんなとき、学校で唯一残ってた、楓っていう居場所を、僕は…僕は手放したくないって思ってた、嫌なことからも、ぜ、全部、逃げたくなってる…」

息がひきつるせいで、言葉がうまく出なくなる。嗚咽のせいで、言葉が聞き取りにくくなる。それでも、ここでやめるわけにはいかなかった。翔太は泣きながら、顔を伏せたまま、半ば叫ぶように、言葉を吐き出す。

「だから、か、楓の、き、気持ちを利用して、ここ、に、来た。楓を、誰にも、と、取られないように、ここまで連れてきた。だから…」

「ごめんなさい。そういうつもりだった言葉は、背中に優しくおかれた手によって止められた。」

「…それでも、私はうれしかった」

ゆつくりと、翔太は顔をあげる。そこには、涙で頬を濡らしたままの、楓の笑顔があった。怒りもせず、拒絶もせず、ただ優しい、笑顔がそこにはあった。

「だから、言わせて」

その笑顔を見て、翔太の心の中で先ほど言おうとしていた言葉が消えた。その言葉を言うまでもなく、楓は自分を許してくれていた。いつもより優しい、そして美しい笑顔で、翔太を受け入れてくれていた。初めて会った時のような、拒絶も受容もない無表情ではない。翔太は、その笑顔を見て、ゆつくりと口を開いた。

「…僕にも、言わせてほしい」

鼻を一度すすり、息を整えるために、翔太は一度深呼吸する。楓も一度深呼吸してから、翔太をまっすぐ見つめた。そのまま二人は視線を外さず、同時に口を開いた。

「…ありがとう」

涙まみれの顔で、二人は言葉を重ねる。
夜空には、満天の星が輝いていた。

10 りゆう（後書き）

次の物語で、一応ひと段落つきます。それ以降の話もなんとなくはできているのですが、テストという障害物の上に、それが終わつた後しばらく小説が書けない状況に陥ってしまうものですから、更新がだいぶ後になると思います。こんな作者ですみません。

1 1 居場所（前書き）

居場所を探していた我が友人に、この物語を贈ります。

11 居場所

落ち着いてから、翔太と楓は一緒に女将さんのところへお礼をい
いに行った。

聞くと、翔太が風呂に入っている間、楓も女将さんとお話をして
いたらしい。その時翔太と同じように旅行に来た敬意を尋ねられ、
理由を交えながら楓はお話したという。

女将さんに話す前は、翔太に自分の過去を離すべきかどうか迷っ
ていたそう。しかし、女将さんに話した後、やはりここまでして
くれたのだからお礼をしなければならぬと思いつたらしい。そ
の時の心境の変化やきっかけは詳しく聞けなかったが、それでもあ
の女将さんのおかげでそういう心境になったことは確かだろうだっ
たので、二人でお礼に行くことに決めたのだ。

一回に入口近く、管理人室の扉をノックすると、女将さんが笑顔
で現れた。翔太と楓が二人揃って頭を下げお礼を言うと、女将さん
は笑顔で首を横に振った。

「別に私は何しておりません。ただお客様の話を聞かせていた
だけだけで、私としてもとても有意義な時間を過ごさせていただ
きました。私からも、お礼を言わせていただきます」

そう女将さんに頭を下げられて、翔太は胸の奥に温かいものがこ
み上げるのがわかる。ここに来ることはもうないかもしれないが、
ここもすでに自分の居場所となっている気がした。

「ただ、お節介とは存じますが、お客様に、一つずつだけ、私から
アドバイスというか、助言のようなものを差し上げたいのですが」
そう前置きして、女将さんが下げていた頭をあげる。翔太は楓と
顔を見合わせたが、すぐさまお互いにうなずいて、お願いしますと
促した。

「ありがとうございます。まあ、アドバイスと言っても私のような
ものの言葉ですので、参考にならなければ無視してくださいませ」

そう前置きして、女将さんはまず楓のほうを向いた。

「お客様は、もう少し笑われてはいかかと思えます。せっかく美しい容姿をお持ちなので、笑うだけで、おそらく印象がとてよくなると思います。勿論、無理にとは言いませんが」

ありがとうございます、と楓は答える。その顔にはすでに、わずかながら微笑が浮かんでいた。それを満足そうに眺めて、女将さんは次に翔太に向き直る。

「お客様、居場所とは、与えられるものではなく、手に入れるものと、私は考えております。こんな私の考えが役立つかわかりませぬが、もしお客様が本当にほしい居場所があるのでしたら、簡単に諦めないほうがよいと思います。形はどうあれ、その結果が、いまお客様の隣に立たれていると私は考えております」

翔太は思わず隣を見た。そこには、笑顔の楓が立っていた。自分が求めた居場所。逃げるといふ形を取りこしたが、求め行動を起こした結果、手に入れた居場所。

おそらく女将さんは、翔太がどのような状況にいるかはしっかりと把握していない。入部テストに落ちたことも知らないし、楓との関係もしっかりとはわからないはずだ。

それでも、なんとなくは翔太の置かれている状況を察しているのだろう。だからこそ、アドバイス。翔太はまた胸の奥が温かくなるのを感じて、もう一度頭を下げた。隣で、楓もまた頭を下げる。

そんな二人を、女将さんは笑顔で見ていた。

翌日、翔太と楓は朝食を済ませ、民宿を後にした。朝食は女将さんがサービスで作ってくれたものをいただいた。

昨日の夜、楓が自分の部屋に帰って行ったのを見届けてから、翔太は自分の部屋で一人、女将さんの言葉について考えていた。

居場所を手に入れるための、行動。

その行動とは、一体何をするべきなのか。

答えは、五分も考えないうちに思い浮かんだ。ぐっとこぶしを握りしめ、翔太は覚悟を決める。

その答えを今朝、楓に伝えお願いしたところ、楓はすぐに了承し、帰ろうと言ってくれた。見たかった景色をしっかりと見れなかっただろうから、もう半日はここにいてもいいと翔太は言ったのだが、楓は連れてきてくれただけでも十分だと首を横に振った。

そうして翔太と楓は、帰りの電車に揺られていた。昨日からのことを思い返すと、なんだか別の人の人生を生きていた気分だった。同い年の女の子と一緒に二人だけで旅行。その旅行の内容も特殊なもので、ひどく現実感がなかった。

それでも、隣の席を見ればそこに楓は座っている。疲れているのか、翔太の肩にもたれかかって眠ってしまったている。そのせいで翔太は先ほどから身動きが取れず、心臓も早鐘を打っているのだが、それでもうれしい気持ちがかみ上げる。楓の表情は行きのように緊張しておらず、視線は外には向けられていない。寝顔はあどけない、どこにでもあるような少女のものだった。

そんな自分の居場所を肩に感じながら、翔太は電車に揺られていた。

午後一時半。翔太と楓は地元の駅に返ってきた。改札を通り駅の入り口をくぐると、そこはもう見慣れた町である。その風景を、なんだか久しぶりにみる気がして、翔太はなんだか懐かしい思いになった。

「帰ってきたね」

隣に立つ楓が、どこか感慨深そうにつぶやく。その視線は、やはり翔太と同じように懐かしそうに町を眺めていた。

「行くときは帰ってくるなんて考えてなかったけどね」

翔太は少し照れながら呟く。本当に、あの時は現実から逃げるのに必死でここに帰ってくるなどまったく考えなかった。

「今から、行くの？」

「…うん」

楓に尋ねられて、翔太はすっかりとうなずく。今日は土曜日だが、あの部活なら練習は休日だろうとしているはずだ。

「だから、清泉さんとはここまでかな。一人で、帰れるよ…ね、そりゃ」

「大丈夫」

微笑を顔に浮かべながら、楓はうなずく。

「それじゃ、また月曜日に学校で…」

「あ…」

別れの挨拶をしようとしたところで、楓に呼び止められ、翔太は止まる。楓はすこし恥ずかしそうにしながらも、おどおどと口を開いた。

「その、呼び方だけど、苗字じゃなくて、名前で、いいから」

……。

しばらく、何を言われたかわからなかった翔太だったが、その言葉の意味を頭で理解してからは、顔が熱くなるのを感じた。

言った楓はというと、恥ずかしそうに顔を伏せている。とにかく何か言わなければと翔太は口を開き、

「じゃ、じゃあ、そうする、ね」

そうしどろもどろに言ってから、あわてて付け足した。

「あ、その、僕のこと、名前でもらっていいから」

そう言ってから、これまでに楓に自分のことを呼んでもらったことがないような気がした。なんだかいきなり変なことを言ってしまったようで、翔太はあわてて訂正しようとしたが、その前に楓が口を開いた。

「じゃあ、今度からは、そうする」

その言葉で、二人の間に気まずい沈黙が流れた。なんと声をかければいいのかわからず、翔太はそわそわしてしまう。一方の楓も顔を伏せたまま、何も言っていない。

一分ほどそのまま時間がたち、先に行動を起こしたのは楓だった。キャリーバッグを持ちなおし、「それじゃ」と言って歩き出す。

「あ、うん。また、学校で」

そう小声で言って、翔太は楓と別れた。楓が歩いていく後ろ姿を見つめながら、翔太は少しだけ楓と距離が近づけた気がした。

学校に着き、体育館に向かうにつれて、さすがに翔太は緊張感を覚えていた。いったん家に帰り卓球用具を取り出してから、ここに来るまではまだよかったのだが、学校に入ってくるとさすがに緊張感が高まってくる。

それでも、翔太は決めたのだ。自分の居場所を手に入れるために、自分にできることをするのだ。

がらりと体育館の思い扉を開け、中に入る。予想通り、いつもの体育館の隅で、卓球第が並べられていた。

そこには、安奈と麻紀、そして、良平の姿があった。体育館に入ってきた翔太の姿を見て、三人は少し驚いた顔をしたが、まっすぐ向かってくる翔太を見て少しうれしそうな表情に変わっていく。翔太はそんなこと全く気にせず、安奈の正面に立って足をとめた。

「どうしたの？ 部外者は勝手に入ってきてもらったら困るんだけど」

「にゅ、入部テストを、もう一度、受けさせてください」

意地悪そうな笑顔とともに投げかけられた安奈の言葉に、翔太は内心少しビビリながらもそういう。その言葉を聞いて、安奈の顔がうれしそうな笑顔へと変わった。

「昨日は林君だけが来て、君は来ないと思っていたけど、どうやら勘違いだったかな？」

「僕は、諦めてません。この部活に入れてもらえるまで、何度でもやらせてもらいます」

これが、翔太の出した答えだった。

居場所を手に入れるために、自分にできる、精いっぱいの行動だった。

そんな覚悟を決めた翔太の表情を見て、安奈は満面の笑みを浮かべてから、台についた。

「いいわよ。満足するまで、何度でもかかってきなさい」

以前とは違い、自分の意志で、翔太は試合を始めた。

エピソード

月曜日。翔太はいつも通り、弁当を持って階段を上っていた。

昨日の日曜日は雨が降り、今日は屋上で昼食を食べられないのではと心配したが、打って変わって今日は快晴。雲ひとつないと言っているいい天気で、気温も高め。今日の部活の練習は熱いだろうなと今から少し緊張する。

階段を登り切り、一応掃除用具入れの裏を確認したところ、やはりそこに鍵はない。少しだけ笑ってから、翔太は屋上に続く扉に手をかける。ドアノブをひねり、扉を押しあけると、いつもの見慣れた場所に、いつもの少女が座って弁当を広げていた。その視線はやはり無表情に山に向けられている。

その視線が、翔太に向けられ、その顔が少し笑顔に変わった。その顔を見て、翔太も思わず笑顔をこぼす。すこしためらいながらも、少女の隣まで行って、腰を下ろした。

「一緒に、弁当食べてもいいかな、楓」

「うん、翔太」

温かい春の日差しが、二人を包むように降り注いでいた。

エピソード（後書き）

ここで一応ひと段落です。長い間更新できず申し訳ありませんでした。

次からのお話ですが、実はまだあまりまとまっていけません。ですから更新は少し先になると思いますが、それまで忘れないでいただければ幸いです。

ここまでのお話で感想などございましたら、お手数ですがお書きください。

2・プロローグ（前書き）

大変長い期間更新せずに失礼しました。夏休み中いろいろと忙しくてなかなか書けず申し訳ありません。ようやく続きができてきたので更新再開したいと思います。もし覚えていらっしゃる方いれば読んでいただけるとありがたいです。

2・ブローグ

五月の風が、屋上を優しく流れる。

春のにおいを漂わせながらも、そこには夏の到来を予想させるような香りが含まれていた。

ゴールデンウィーク明けの火曜日。相田翔太は昼食を取るために、屋上に来ていた。

本来屋上は生と立ち入り禁止で、屋上へと続く扉には鍵がかかっている。しかし、翔太はその合鍵が階段の踊り場にある掃除用具入れの裏側にあることを知っていた。

普通の生徒は教室や中庭などで友人と一緒に昼食を取るのだが、引っ込み思案で内気な翔太はクラスと一緒に昼食をとれる友人などおらず、毎日昼休みになると弁当を持ってこの屋上へ来ていた。

いや、正確にはある人物と一緒に昼食を食べるために屋上に来ていると言ったほうがいいかもしれない。

その人物は翔太の隣に座り、無表情のまま屋上から見える山々を見つめながら黙々と昼食を取っていた。

彼女の名前は清泉楓。翔太と同じ年の女の子である。楓も性格上、クラスと一緒に昼食を取る友人がおらず、昼休みは毎日屋上に来ている。

そんな自分たちが出会ったのは入学して間もないころ。お互いに屋上で出会った自分たちは、楓の希望で一拍の旅行に出かけた。その旅行で少しだけ楓の事が理解できたような気がした翔太は、今でもこうして毎日彼女と昼食を取っている。

特におしゃべりすることはなくてもお互いにお互いのことは分かっている。だから、今のままでいいと翔太は思っていた。隣に楓がいて、二人きりのこの時間はずっと続くと思っていた。

屋上の扉の軋む音が聞こえたのはその時だった。

翔太は誰が来たのかと顔を向ける。隣の楓も、扉に視線を向ける

のが気配で分かった。

「ん、なんだ、久しぶりに来てみれば、どこぞのカップルが昼食中か」

そこには、教師と思しき一人の男性がたばこの箱片手に立っていた。

2 - 1 夏目和馬（前書き）

サブタイトルですが、僕の中では一応大きな流れの二つ目なので、数字が2 - 〇という形になります。イメージとしては文庫本の二冊目に入ったと考えるもらえば分かりやすいかと…。

2 - 1 夏目和馬

放課後の廊下を、体育館に向かうために翔太は一人歩いていた。いつもならばこれから始まる部活動の事を考えているのだが、今日はなぜか昼の時間に屋上にやってきた男性教諭の事が頭から離れなかった。

突然やってきた男性教諭に翔太と楓がどう対応を取ればいいか考えていると、彼はゆるゝい笑顔を浮かべたまま顔の前で手を横に振った。

「ああ、別に警戒するな。邪魔しちまったことは謝るが、別にお前ら叱ろうとかはおもってないから」

そう言って彼は翔太たちの横を通り過ぎ、屋上の端にある貯水タンクの陰に隠れてしまった。姿は見えなかったが、煙が出ていたことからどうやらそこで煙草を吸っていたようである。

結局、昼休み終了五分前になっても男性教諭はそこから戻ってくることはなかった。楓も登場した時こそ気にしていたようだったが、最終的にはいつも通り昼食を食べ終えてから本を読みだしてしまった。そのまま翔太と楓は授業に戻るため屋上を後にしたのだが、男性教諭はまだ屋上に残っていたようだった。

あの教師は何者だったのか。その疑問が頭から離れず、翔太は頭をひねる。簡単に考えれば、一服するために屋上に来た教師、というのが妥当だろうが、生徒が立ち入り禁止の屋上にいる時点で注意するのが普通なのではないだろうか。そもそも、翔太たちが屋上にすることができているのは正しい方法ではない。誰が作ったかわからない、倉庫裏の合鍵を使っているのだ。その存在を知らない教師は、当然どのように屋上への扉をあけたか気になるはずだが。

そんなことを考えながら、翔太は体育館横の更衣室の中へと入る。そこには、見知った友人が一足先に服を着替えていた。

「おお、翔太。なんや、なんか難しそうな顔しとるで」

そう声をかけてきたのは、翔太と同じ部活に所属する一年生、林良平だった。二人は卓球部に所属しており、自分と唯一の同い年の部員だった。

「いや、ちよつと気になることがあつて」

自分の荷物から着替えを引っ張り出し、翔太は答える。んん？

と良平はいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「なんや、恋の悩みか？」

「な、そんなことじゃないって」

翔太はあわてて否定する。知り合つて約一月。これくらいの冗談はもう出るようになっていた。

「隠すな隠すな。俺らもう高校生や。恋の悩みの一つや二つ、あつてもおかしくないで」

「だから違つて。今日ちよつと変な先生を見て、それが気になつてるだけ」

「先生？」

良平が興味をそられたように聞き返す。

「なんや、一目ぼれするほど美人の先生やつたんか」

「僕が見たのは男の先生！」

少し勢い込んで否定すると、良平は悪かつたというふうに関手をあげた。

「すまんすまん。冗談や。それで、なんかそのセンスがおかしかつたんか？」

「いや、別におかしかつたわけじゃないんだけど…」

なんといいつついいのかわからず翔太は言葉を濁す。聞いているほうの良平としては今一わかりにくい言葉だっただろう。

「それじゃそのセンスのどこが変やつたんや？」

「うゝん、態度というか、こつちに対するアプローチというか…」

翔太は靴を卓球用のものに履き替え、ラケットケースを持つ。良平もラケットケースを持つて一緒に更衣室から出た。

「なんや、ようわからんな。その時の状況教えてくれんか？」

「あー、それはちょっと…」

屋上で楓と昼食を食べているのはまだ誰にも言っていない。基本生徒が立ち入り禁止の屋上にいること自体公言できないというのに、楓と二人きりで昼食を取っているなど、どこか恥ずかしくて言えなかった。

翔太はどう説明したものかと頭をひねりながら体育館の扉をあける。卓球台がいくつか並んでいるところを見ると、すでに先輩が来ているらしい。翔太は体育館シューズをはきながら、先輩二人の姿を何気なく探したところ、ある一点で視線が固まった。

「なんか、今日の翔太は煮え切らん感じやな。別にいいとうないなと言いんやけど、やつぱりちょっと…」

後から入ってきた良平が翔太の様子を見て言葉をとぎらせる。しかし、翔太は今それどころではなかった。

体育館のすみ、すでにいた先輩と何やら話していた男性教諭。その人物をみた瞬間、翔太の頭の中では、なぜここに？ という言葉が繰り返し響いていた。

「あ、相田君、林君、ちょうどよかった」

男性教諭と話していた先輩、大海安奈がこちらに気づいて声をかける。そこでこちらに視線を向けた男性教諭の表情が、翔太を見た瞬間少し驚いたような顔になった。なぜかその一瞬で、翔太はとてつもなく嫌な予感を覚える。

「お、なんだ、今日の昼屋上デートしてたやつじゃないか」

「…デート？」

隣の良平がある一言を反復する。翔太は背中に冷や汗をかきながら、どう言い訳をしようか必死に考えていた。

「改めて紹介するわね。こちら顧問の夏目和馬先生。専門は数学。まあ、ちょっと適当なところとかあるけど、基本いい人だから安心して」

「ちよつとじゃなくて、かなりな」

安奈の紹介に自分で訂正を加える夏目先生。翔太と良平はなんと答えていいかわからずはあ、と答えるにとどまった。

「ちよつと、せつかくオブラートに包んだのに自分で訂正しちゃ意味ないじゃない」

「こういうことははつきり言つといたほうがいいんだよ。あとから印象が悪くなるよりもよくしていったほうがいいからな」

「よくすることができればですけどね」

「そんじゃもうちよつと印象悪くしとくか。今まで俺がいなかった理由だけど、ちよつと現実逃避して学校休んでたんだ」

「適当言わないでください。育児休暇だってことは他の先生に聞いて知ってますよ」

二人のやり取りを見て、翔太と良平はどう対応していいかわからない。指示を仰ぐようにわきに立っているもう一人の先輩、志村麻紀に視線を向ける。

「まあ、いつもの事だからほつといていいわよ。それより…」

麻紀は翔太に近づいて、真正面から笑顔のまま翔太の顔を覗き込んできた。

「私としては、翔太君のデートの話のほうが気になるんだけど」
う、と翔太は言葉に詰まる。となりの良平もおお、と声をあげてこちらを向いてきた。

「俺も気になるで。なんや、屋上でデートって」

「いや、その、別にデートしてたわけじゃ…」

視線をさまよわせつつ翔太が口ごもる。なんと答えようかと考えていると、安奈と話していた夏目先生がこちらに視線を向けて決定的な一言を放った。

「何言つてんの。屋上でかわいい女の子と二人で弁当食べてたじゃん」

「へえ！」

「あら！」

「おお！」

安奈、良平、麻紀が同時に三者三様の声を上げる。翔太の体はまだ卓球をしていないというのに汗でびっしょりだった。

「いや、その、楓とは別にただの友達で…」

「楓？」

「呼び捨てするほど親しい仲なの？」

「入学一カ月ちよいでもうそこまでいくとは、翔太も隅におけんやつやな〜！」

どんどん悪い方向へと傾いていく状況に翔太は頭を抱える。ちらりと見ると、この状況を作り出した夏目先生はどこか楽しそうにニヤニヤしていた。

卓球部に新たに現れたこの教師が、翔太は早くも苦手になりだしていた。

2 - 1 夏目和馬（後書き）

いったんここまでです。また数日中に更新していこうと思うのでよろしく願います。

2 - 2 部活へ(前書き)

結局間が空いてしまった更新です。こんなのですみません。なるべく更新できるように努力はしているつもりなのですが…。

2 - 2 部活へ

結局、翔太に対する追及はその日の最後まで続いた。

練習が始まってからは全員練習に集中しなくてはならないので、翔太に対して何か質問してくる者はいなかったが、練習が終わってからは質問の嵐だった。片づけている最中、着替えている最中、帰り道。どこへ行っても質問が途切れることはなく、翔太はとても苦勞したが、その一方で、自分はまだ楓のことをそれほど知らないことが分かった。

例えば誕生日であったり、例えば将来の夢であったり。そう言ったことを、翔太は何も知らない。

以前行った旅行以来、楓との距離はぐっと近づいた気がしたが、実はまだまだ距離はあるのかもしれない。

そんなことを考えたものだから、翔太は次の日の昼、さっそく楓に質問してみた。

「ねえ、楓の誕生日っていつ？」

弁当を広げながら何気なく質問すると、弁当を広げる楓の手がぴたりと止まり、こちらに視線が向けられた。その顔は無表情に見えるが、どこか尋ねるような雰囲気をしている。楓は基本的にあまり表情を変えないが、その微妙な変化を翔太はわかるようになってきた。

「ああ、この前部活の友達と誕生日の話になって、それで楓はいつなのかって」

翔太は補足説明を加えると、楓は再び弁当を広げながら答えた。

「六月六日」

六月六日。翔太はその数字をしつかりと記憶に刻む。せっかく知ったのだから、その日にはなにかお祝いをしなくては。

翔太が心のメモ帳にメモをしていると、楓が再びこちらを見ているのに気がついた。ん？と視線を向けると、楓は静かに訪ねてきた。

「翔太の、誕生日は？」

そういえば自分の誕生日も教えてなかったな、と翔太は思い出す。
「俺は五月十八。ちょうど中間テストが終わってちょっとたってからくらいかな」

「…そう」

それだけ言って楓は弁当を食べ始める。その表情からは何もうかがえなかったが、別段気にすることもなく翔太も弁当を食べ始めた。これが楓の普通の状態なのだ。冷たくされているとか、そういうことではないことを翔太はすでに知っていた。

そんなふうには弁当を食べていると、今日もドアが軋む音がして翔太はそちらを振り向く。そこには今日もだるそうな顔をして辰目先生が屋上の扉を開いてきたところだった。

「おお、今日も弁当か。毎日仲がいいな」

翔太たちを見つけると、夏目先生はそう声をかけてくる。しかし、それ以上どうするということもなく、二人の横を通り過ぎてまた給水塔の陰に隠れてしまった。

一体なんのためにここに毎日来るのか。おそらくあの人の事だから、校内で吸えない煙草でも吸いにきているだけで、それ以上の理由などないのかもしれないが、翔太にとって楓と二人きりでの場所、にそう何度も来られるのはどこか居心地が悪かった。

楓はどうなのだろうかと楓に視線を向けてみると、楓は何も変わった様子もなく弁当を食べ続けていた。

なんだか、気にしているのは自分一人だけのようで、翔太の口から自然にため息が漏れていた。

その日の部活が始まる前、翔太が良平と一緒に卓球台を用意していると、今日も練習前から来ていた夏目先生が手招きして翔太を呼んだ。少しだけ嫌な気分を持ちながらも、翔太は良平に断ってから夏目先生のところまで行く。いきなり呼び出して悪いな、と一言断

つてから、夏目先生はいきなりこういった。

「お前、清泉とはどうして一緒にあんなところで飯食うことになったんだ？」

はい？ と翔太は思わず聞き返してしまふ。いきなり聞かれた質問の内容にも驚いたが、それ以上に夏目先生が楓の苗字を知っていることにも驚いた。

「だから、どうして清泉と飯を食ってるんだって聞いたんだ」

あくまでもけだるそうに、夏目先生は質問を繰り返す。ええと、と翔太は少し口ごもった。

「どうしてって言われましても、その、屋上へいったらまたま楓がいて、そこでおしゃべりして、一緒にご飯食べるようになっただけですけど」

「…そうか」

そう呟いて、夏目先生は体育館の天井を見上げる。その開いた口から、煙草の煙が盛大に出てきそうな構図だった。

「えっと、それだけですか？」

「ん？ ああ、いや。ちなみに、清泉は何か部活は？」

いきなり質問の矛先が変わって、翔太は少し面喰う。

「いえ、たぶん何もしてないと思います」

「なら、明日一回連れてこい」

「…はい？」

何を言われたかわからず、翔太が聞き返す。この先生にはペースを持つて行かれっぱなしのような気がした。

「だから、一回明日連れて来い、ここに」

「えっと、楓をですか？」

「そうだ。何か不都合なことでもあるか？」

いえ、と翔太はつぶやく。一体この先生は何を考えているんだ？ 楓の名前を知っていることといい、一体何を目的に楓を連れてこないなどと言っているのだろうか。まさか楓を部に勧誘する気なのだろうか。

疑問は溢れるように出てきたが、なぜか目の前の教師にそれらを訪ねることはできなかった。なぜかはわからないが、おそらくこの教師の事がまだよくわからなかったため、どう対応していいのかわからなかったからだろう。結局、翔太は一度頭を下げてから準備に戻っていった。

「なんや、センスになんか言われたんか？」

「うん、なんか、明日楓を部活に連れて来いって」

良平が台を広げるのを手つないながら、翔太は答える。ほつ、と良平は少し興味を持ったように声をあげた。

「ほな、明日翔太の彼女を見ることができるんか！」

「だから、彼女じゃないって」

もう何度目になるかわからない訂正を入れながら、しかし翔太は頭の隅で夏目先生の事を考えていた。

一体、どういつつもりで楓を連れてこいなどで行ったのだろうか。

夏目先生の狙いがわからないにしても、とりあえず翔太は楓を誘うことにした。屋上で、いつも通り弁当を広げる。楓はめったに自分から話すということはないから、こういうときは話を切り出すのに都合がよかった。

「ねえ、楓、今日の放課後って暇？」

翔太が尋ねると、楓が箸を加えたままこちらを振り向く。その様子がお茶目で、少し翔太はかわいいなと思いつつも目的の言葉を口にする。

「昨日や一昨日にここに来た先生覚えてるよね？ あの先生卓球部の顧問の先生なんだけど」

楓はそこで箸を口から抜き、口を動かす。相変わらずの無表情だが、視線はこちらを向いているので翔太の話はしっかりと聞いているはずだ。

「あの先生が、今日もし楓の予定がなかったら一度卓球部に連れて

来いっていうんだけど…」

しばらく楓は口の中身を飲み込むためにかむことに専念していたが、やがて口の中のをすべて飲み込んでからゆっくりと口を開いた。

「どうして？」

「えっと、その、実は僕にもよくわからないんだけど」

そう言うってから、翔太は少し後悔する。相手に部活に来てくれと頼んでいるのに、理由も知らないとは、考えてみればおかしい話だ。翔太は少し気まずくなつて視線を落とす。しばらく無言の時間が続き、翔太は楓を怒らせたかと思い恐る恐る顔をあげたが、そこには何やら考え込んでいる楓の姿があった。どれほどそうしていたかは分からないが、おそらく一分ほどだろう。やがてゆっくりと、楓は翔太の目を見てうなずいた。

「一時間くらいなら、大丈夫」

その返事を聞いた瞬間、翔太は体に疲れがどつと押し寄せてくるのがわかった。どうやら、知らず知らずのうちに緊張して肩に力が入っていたようだ。先生に言われたとおりただ楓を誘っただけなのに、なぜだかとても緊張してしまった。

一安心してその原因を考えていると、実は楓が部活動に来ることがうれしい事がわかる。まるで相手をデートに誘いオーケーをもらった時の気分とでもいうのか。実際そういう体験をしたことはないが、それでもどこか達成感とうれしさに満たされていく気持ちを抑えられないまま、翔太はその日の午後を過ごした。

その日に限って、なぜか夏目先生は屋上に来なかった。

2 - 3 断り（前書き）

更新が遅くなつてすみません。できるだけ書こうとしているのですが、大学はじまつてから一気に忙しくなり始めて、書く時間が激減…。それでもまだ続けていこうと思っているので、もしよかったら読んでください。

2 - 3 断り

放課後、翔太が下駄箱で待っていると、ホームルームを終えた楓がやってきた。楓と屋上以外で会うことは珍しいため、翔太はどこか緊張してしまう。そもそも二人で待ち合わせていたという状況に、翔太はどこか恥ずかしい気持ちを覚えた。周りには下校する生徒が何人もおり、なぜか人目を気にするように翔太は周りに視線を泳がせてしまう。

「お待たせ」

「あ、うん」

楓に対する返事もどこかぎこちなくなってしまう。しかし、楓はそんな翔太にお構いなしに自分の下駄箱を開き靴を履き替え始める。そのいつも通りの淡々とした様子に、翔太はどこか拍子抜けしたような気分を覚える。なんだか自分だけが意識してしまっているようでバカみたいだった。翔太はため息をひとつついて、自分も靴をはきかえた。

部活動をする生徒は、校内で活動を行う生徒以外、基本的に上履きを下駄箱にしまう決まりになっていた。校舎が閉まる時間よりも、部活動が終わる時間のほうが遅いからである。そのため翔太と楓は校内からではなく、靴を履き替えて体育館へと向かった。

そういえば、下校時に楓と下駄箱などであったことは一度もなかった。翔太のクラスの水戸グループが先に終わり、教室の中の楓を見ることは時々あるが、楓が下校している姿を見たことは一度もない。たまたま顔を合わせていないだけという可能性もあるが、入学してすでに一月以上たっている。偶然にしては少しすぎような気もした。

「ねえ、楓っていつも学校が終わったらまっすぐ家に帰るの？」

気になった翔太が声をかけると、楓はふるふると首を横に振った。「え、でも、部活とか何もしてないんじゃないっけ？」

「…いつも、屋上に行くの」

その言葉で、翔太は数日前の事を思い出した。翔太が卓球部の入部テストに落ちた時、無意識に向かった屋上。そこに、夕日を浴びる楓の姿があったことを。

あの頃、楓はお母さんと一緒に行くはずだった山に思いをさせていた。そのために、昼時間だけでなく、放課後も屋上へと足を運んでいたのだ。

その習慣が今でも続いているのだろう。翔太と一緒にその山へ行ったのはいいが、それだけの出来事ですべてが終わったわけではない。山に向ける視線の意味はどこか変わったかもしれないが、それでも楓にとって思い入れのある場所には変わらないのだ。

「そっか」

だから、翔太はなぜ屋上に行くとか、そんなことは聞かない。また、それ以外の言葉も口にしない。一言、相槌を打つだけ。しかし、それだけで何か伝わるものがあつたようで、楓の口元にかすかに笑みがこぼれたのを翔太はみた気がした。

ガラガラ、シーン、ガシツ、ズルズル…。

翔太が体育館に入ってから十秒の内に出了た音を表記すると、およそこんな形となる。正直、翔太自身その十秒間に起こった出来事を理解したのは体育館の隅に良平、安奈、麻紀の三人に連れて来られてからだつた。

翔太が体育館に入った瞬間、すでにそろっていた卓球部員の視線が翔太とその隣に立つ楓に注がれたことは言うまでもない。そこから五秒ほど沈黙が起きた後、三人に無言で肩を掴まれた翔太は、抵抗する間もなく体育館の隅に引きずられ、今は三人に囲まれている、という状態である。

「おい、翔太、まさかあの子か！ あの子がお前の彼女か！」

良平が翔太に問い詰める。勿論楓に聞こえないよう小声ではあつ

たが、表情はどこか鬼気迫るものがあつた。

「いや、だからその、彼女じゃ…」

「すつごくかわいい子じゃない！ 翔太君やるねえ」

翔太の反応を無視して麻紀が珍しく下世話な笑みを浮かべて言う。
いや、だから、と言いかけた翔太の言葉を今度は安奈が遮った。

「まったく、あれだけ可愛い子とは思わなかったわ。どんな手使つておとしたのよ」

「まさかお前がここまでやり手とは思わなかったで翔太！」

良平はなぜかうれしそうに翔太の肩をバンバン叩く。なかなか威力があり、翔太の口から苦笑いが漏れた。

「にしても本当にかわいいね。あの長い髪、ここから見てもさらさらだよ」

「スタイルもいいし。まあ、胸がちよつと小さめだけどそこはまだ発育途中だし」

「それよりあんなきれいな顔みたことありまへんよ僕は！ どんだけつちゅーはなしですよ」

翔太が止める間もなく、三人はどんどん話を進めていく。楓はというと上手く状況が飲み込めていないのか、体育館の入り口でぼつと突つ立っていた。

「それじゃ、とりあえずどうやって告白したか聞こうじゃないの」

「いや、僕はその前に出会ったきっかけとか聞きたい思っんですけど」

「今どこまで進んでいるかも私は気になるな」

「いや、それは後回しで出会ったきっかけとかを…」

「だから彼女じゃないって言うてるじゃないですか！」

三人の質問攻めに、翔太は思わず叫んでいた。珍しい翔太の叫び声に、三人は一斉に口を閉じる。その反応を見て、翔太はようやく無意識のうちに大声を出したことに気がついた。

その場に気まずい沈黙が降りる。その原因を作ったのが自分のため、翔太は何か言わなければと口をパクパクさせるが、肝心の言葉

は何も出てこない。そんな気まずい状況が十秒ほど続いた時だった。
「あの、私はどうすればいいんですか？」

いつの間にそこにいたのか、気づくと安奈の後ろに楓が立っていた。その無表情な顔は安奈、麻紀、良平、そして翔太へと順々に向けられていく。そこでようやく、安奈が楓をほったらかしにしていたことを思い出した。

「ああ、ごめんね、ほつといちゃって。とりあえず、今日あなたをここに読んだのは顧問の先生だから、その人が来るまでちょっと待っててくれる？」

「はい」

楓は短く返事をして、体育館の隅へ行って鞆をおく。その淡々とした態度に、安奈たちはどう対応していいかを決めかねているようだった。

「えつと、言い方悪いけど、なんや機械みたいな子やな」

「まあ、翔太君から話を聞くのは後にして、とりあえず練習始めない？」

「そうね。夏目先生が来るまでたぶんまだ時間があるし。どうせだから彼女にも見学してもらって暇をつぶしてもらいましょう」

安奈がそういったときだった。ガラガラと音を立てて体育館の入口が開かれ、そこから夏目先生が入ってきた。

「お、全員そろってるな。それで、と。おお、ちゃんと連れてきたな」

夏目先生は体育館に入ってくるなり、楓を認めてうれしそうに笑った。

「ちょうどよかった。今、翔太の彼女をどうすればいいか悩んでて……」

「だから、彼女じゃないですって」

安奈の言葉を翔太が即座に否定する。楓に聞こえていたらどうしようかと翔太は楓をちらりと見たが、どうやら聞こえていなかったようで、楓の視線は夏目先生に注がれていた。

「先生が読んだので、私たちじゃどうすればいいかわからなかったんですよ」

「ああ、悪い悪い。ちよつと一服してきたからな。それで、今日清泉を連れてきてもらった理由なんだが……」

適当そうな笑顔で夏目先生は楓を見る。楓はいきなり自分の名字を呼ばれて少し不思議そうに首をかしげていた。

「お前、この部活に入らないか？」

「うん ええええええええええ？」

するりと夏目先生の口から出てきた言葉に、夏目先生と楓以外の口から驚きの声上がる。しかし、夏目先生はそんなものどこ吹く風でもう一度楓に聞いた。

「ここには相田もいるしな。他の部活が入りにくくても、ここなら知り合いがいて入りやすいだろうと思って……」

「ちょっと待ってください！」

夏目先生の言葉を安奈が途中で遮る。

「もし入部させるならテストを受けてもらわなきゃいけません！
そうしないと仮入部期間にきた子たちと不公平になります！」

「テスト？ ああ、伝統的にやってる入部テストか。んなもん俺の権限でなしにすりゃいいだろ」

「だから、いくら顧問でもそれはだめです！ 入部テストで入れなかった新入生もいるんですよ！」

「別にいいじゃねえか。あのテスト、実力を試すためのものじゃないか。」

「まだテスト受けるかもしれない新入生の前で種明かししないでください！」

安奈と夏目先生が言い合うのを、どうしたらいいかわからず翔太と良平はただみているだけ。そういえば初めて来たときもこんな感じだったなと思いつつ、麻紀に視線を向けると、前回と同じように笑顔で「放っておいていいよ」といわれた。

それじゃ、終わるまで見ていようかなと翔太が二人に視線を戻し

た時、ふと視線を長い髪が横切った。

「あの」

気づくと、楓が一步前に出て二人に声をかけていた。言い合いをしていた二人はそこで言葉を切って楓に視線を向ける。楓はどちらかというとき夏目先生に視線を向けたままこういった。

「お誘いはありがたいんですが、お断りします」

すつ、と楓は頭を下げる。その場の誰もが、一瞬面喰ったように動きを止めた。その沈黙を最初に破ったのは一番年長者の夏目先生だった。

「卓球部には、興味はなかったか？」

「そういうわけではないのですが、部活をやる余裕がないので」

どこまでも淡々という楓に、翔太以外の面々は面喰いどう対応しているかわからない。翔太自身、楓の態度に慣れているとはいえ、それでもどう声をかけていいかわからなかった。

「…そうか。わかった。無理に呼び出して悪かったな」

「…いえ、誘ってもらって、ありがとうございました」

楓はもう一度お辞儀をすると、鞆を持ち、そのまま体育館の出口に向かっていく。その遠ざかっていく背中に、翔太は思わず声をかけていた。

「楓！」

楓が立ち止まってこちらを振り向く。視線があつた瞬間、しかし

翔太はなぜ呼び止めたのかわからなくなった。

「あ、その…また、明日」

「うん、またね」

結局それだけのやり取りだけを残して、楓は体育館から出て行った。

翔太の中で、何かもやもやしたものが漂っていた。

2・4 プレゼント（前書き）

またまた期間が空いてしまいました。誠に申し訳ありませんm
|) m |

2 - 4 プレゼント

楓が体育館から去ってから、しばらく気まずい雰囲気が漂った。

その原因の一つとして楓の態度があまりにもそっけなかったということもあるだろうが、楓としてはあれがいつも通りののだからしょうがない。しかし、だからと言って何か話してこの場の雰囲気を和ませるということは翔太には難しいように思えた。

それでもおそらく一番戸惑っていないと思われる自分が何か言わなければと考えていた時だった。

「あゝあ、振られちゃったな」

夏目先生がどこか気の抜けたような調子で呟いた。その言葉で卓球部の視線が夏目先生に集まる。

「ま、本人が嫌だっというならしょうがねえな。相田がいるからいけると思ったんだが…」

「いや、そもそもなんであの子を入部させようと思ったんですか？」

少し調子が戻った安奈が口を開く。夏目先生は大きなあくびをしながらつまらなそうに答えた。

「そんなの、今年の入部者に女子が一人もいなかったからに決まってるじゃねえか。さすがに男子だけなんてむさくるしいだろ」

「私の年も去年も女子しか入らなかったのに、男子部員は連れてこなかったじゃないですか」

「そりゃ、男は別にいらねえからな。男が増えてもむさくるしいだけだし…」

「全部あんたの都合じゃないですか!」

安奈の鋭いツツコミを皮切りに、また安奈と夏目先生に言い合いが始まる。三回目ともなると、さすがに慣れた翔太と良平はその様子をどこか冷めた気持ちで見つめる。麻紀もいつも通りの笑顔で、二人のやり取りを見つめていた。

「…とりあえず、準備済ませて練習始めよか」

「まあ、そうだね」

「それじゃいつも通りフォアラリーから入ってね」

麻紀の笑顔の指示にウツス、と返事をして翔太と良平は台につく。しかし、台につきながらも翔太は別の事を考えていた。

本当に、夏目先生はただ女の子がほしただけで楓を誘ったのだろうか。屋上で楓と翔太をいたといっても、女の子なら他にもたくさんいるはずである。良平のほうが交友関係は広いだろうから、良平の女友達で他にも部活に入っていない女の子を探そうと思えばできたはずだ。それが真っ先に楓を誘ってきたことに少し違和感を覚える。

一体、何を考えているのだろうか。

翔太はまだ安奈と言い争いを続けている（正確には安奈の言葉をのらりくらりとかわしている）夏目先生を見つめながら考えた。

次の日、いつも通り屋上に向かう翔太の足取りはいつもより重かった。

昨日、楓があまりにもそっけなく帰ってしまったためどう接していいかわからなかった。楓が昨日の勧誘についてどう思っているのかもわからないし、そのため話題に上らせていいものなのかわからない。もし楓が昨日のことを思い出たくないものだと考えているのなら、そのような態度を出すのもいけないのかもしれない。とにかく、昨日のことには一切触れず、いつも通り接しようと翔太は心に決め、屋上の扉を開いた。

楓はいつも通り屋上の真ん中に座って弁当を開いているところだった。その視線がこちらに向けられる。

「あ……」

なぜか、その視線が向けられた瞬間、翔太はその場に固まってしまふ。いつもなら手をあげて挨拶しながら楓の隣まで歩いていくところなのに。

しかし、楓はそんな翔太にいつも通りかすかな笑顔を向けた。その笑顔をみた瞬間、いつも通りの楓だと翔太は胸をなでおろす。その笑顔はお互いにあつた時のあいさつのようなものだった。

翔太は固まった体を再び動かし、方手をあげて挨拶をしてから楓の隣に座る。翔太も弁当を広げ、手を合わせていただきますをいいいつも通り弁当を食べ始めた。

「ねえ、翔太」

食べ始めてから二分ほどたって、楓がそう声をかけてきた。楓から声をかけてくるのは珍しいので、少し驚きながらも、翔太は「なに？」と楓のほうを見る。楓は、ポケットの中から一つの包みを取り出して翔太に差し出した。

「これ、誕生日プレゼント」

少しだけ、恥ずかしそうな表情で差し出されたのは、茶色の小さな包みだった。翔太はしばらく何をされたかわからなかったが、それが何を意味するか理解した瞬間喜びで思わず顔がニヤけてしまった。以前話した誕生日を、楓はすっかり覚えておいてくれたのだ。そして、翔太のためにプレゼントまで用意してくれていたのだ。親以外の人から誕生日プレゼントをもらったことなどない翔太にとっては、これ以上うれしいことはなかった。それが楓からの贈り物であればなおさらだった。

「ありがとう。あの、開けてもいいかな？」

「…うん」

やはり恥ずかしそうにうなづく楓から包みを大切に受け取り、丁寧に包みを開ける。中から出てきたのは、淡いブルーのガラス玉がついたストラップだった。シンプルなデザインだが、それでもどこかとおしくなるようなそれは、自分で買ったものではないからだろう。

「かわいいね。これ、高かったんじゃない？」

もらってうれしいのは間違いないのだが、楓にお金を使わせたことに少しだけ罪悪感を覚えて翔太は聞いたが、楓は首をふるふると

横に振った。

「そんなに。それに、翔太にあげるものだから」

目を伏せがちにそう言われてしまうと、翔太の中の喜びメーターが振りきれてしまう。同時に顔が熱くなり、顔から湯気でも上っているのではないかと思わず手で頬を確かめる。湯気は上がっていないが、十分熱くはなっていた。

「その、ありがとう」

もう一度お礼を言うと、楓は視線を合わせず無言でうなづく。そのままご飯を食べに戻ってくれば翔太も昼食に戻るのだが、楓はなぜかそのまま目を伏せて固まっている。どうすればいいのか翔太も困ってしまって、二人の間に気まずい沈黙が流れる。いつも特におしゃべりをすることなく二人ではいるが、今日のこの沈黙はいつもととは別種のもので、なんだか胸の奥がむずむずした。しかしそれは不快なものとはいき切れず、どちらかといえば喜びに近いもので、しかしだからこそ何か言わなければと心が焦るようなものだ。不意に楓の視線があげられ、そのせいで翔太と視線があった。いつもは何気なく見ているその目を、今はどこか直視するのが恥ずかしい。しかし、その視線を外すこともできず、二人はそのまま見つめあう。何かいうべきか。なにかするべきか。そんな焦りにも似た思いが翔太の中を駆け巡り、視線があってどれだけ時間がたったかもわからなくなったその時。

ぎい、と音がして、屋上への扉が開いた。翔太ははじかれたようにそちらに視線をむける。そこには、けだるそうな表情で屋上に上がってきた夏目先生がいつも通りいた。

「よお、相田。今日も部活あるから送れずに来いよ」

言葉とは裏腹に、遅刻してもよさそうな口調で夏目がそういい、翔太の目の前を横切っていつも通り給水塔の裏に隠れてしまった。翔太は何かを邪魔された気がして、すこし恨めしい気持ちで夏目の

背中を見る。楓はどうしたんだろうかとちらりと視線を向けると、すでにいつも通り昼食に戻っていった。

今までは二人だけの空間であった屋上が、夏目が来てからというものそうではなくなってしまうている。翔太はなんだか釈然としな
い思いを抱きながら、弁当を口の中にかきこんだ。

2・5 試合（前書き）

またまた更新が遅れてしまって申し訳ありません。できるだけ書くようにはしているのですが、どうにもこうにも時間がなく…。本当に申し訳ないです。

2 - 5 試合

五月も下旬に差し掛かったところの日曜日。翔太は乗りなれない電車に揺られ、安奈たちが待つ駅へと向かっていた。

今日は、翔太が高校へ入ってから初めてとなる卓球の試合の日である。今日は地方のシングルスとダブルスの試合だが、勝ち上がっていけばインターハイへとつながる大会の、地区予選だった。

「おお、翔太。こっちやこっち！」

駅に着くと一足先についていた良平が手を振って呼びかけてくる。すでに安奈と麻紀もそろっていた。

「すみません。集合時間もっと早い時間でしたっけ？」

「そんなことないわよ。電車の関係で、相田君が一番遅いだけ。時間もぴつたり五分前だし」

翔太の不安を安奈が笑顔で取り払う。翔太はほっと胸をなでおろし、そこでまだ一人いないことに気がついた。

「まだ夏目先生は来てないんですね」

「ああ、あの人は来るまで直接会場に来るから大丈夫」

そういいながら、安奈が地面に下ろしていたスポーツバッグを肩にかける。それが出発の合図なのだと、麻紀と良平もそれぞれの鞆を持ちあげた。

「まあ、いつも必ず遅刻してくるんだけどね」

そう笑いながらいうのは麻紀。もう慣れっこになっているようだ。「いいわよ。最悪顧問がいなくても、大会には出れるから」

そういいながら安奈は歩き出す。夏目先生の部内での立場がいったいどういうものか、翔太はほぼ理解しつつあった。

会場に着くと、ちょうど体育館が開いたところのようだった。体育館の入り口付近で待っていた学生たちが次々と体育館の中に入っ

ていく。背中に学校名が書かれたおそろいのジャージを着ている学校。エナメル鞆を方にかけていかにもスポーツをしそうな格好をした学生。翔太は久しぶりの試合の空気に心地よい緊張感を感じながら人の流れに混ざって体育館の中へと入っていく。

体育館の中に入ると、まずは体育館内の席を取ることになる。卓球のシングルスやダブルスの試合では、アリーナに用意された台に呼び出された人がその台に入り、試合を行うことになるのだ。呼び出される順番はトーナメント表に書かれた順である。そのため競技を行うアリーナに設置されている観客席に荷物を置き、席を確保して、呼び出しがかかるまではそこで待機するのだ。

翔太たちは入って体育館に入っただけの席に荷物を置き、席を確保した。会場を見回すと、入って来たばかりの学生たちが席の確保に忙しそうだった。翔太たちのように人数が少ない学校は席を確保するのも楽だが、名門校など人数が多い学校は席を確保するのも一苦労なのだ。

「私は受付に行ってトーナメント表をもらってくるから、みんなはそれまでに試合に出られる格好になっておいて」

そう言っただけで安奈は席を立ち走って行った。その背中を、翔太たちだけでなく、他の学校の生徒たちも見ていることに翔太は気づいた。今だけではない。体育館についたときから、安奈だけではなく、麻紀もどこか他の学校の生徒から視線を向けられていた。それは、二人が有名なあかしでもある。つまり、それだけの実力者ということの意味していた。

安奈と麻紀の実力はかなりのものだった。麻紀の実力が県でベスト十六、安奈に至っては県でベストエイトである。個人戦でそれだけの実力を収めようと思えば、かなりの練習を積まなければならない。実際、安奈や麻紀以外のベストエイトやベスト十六に入る学生のほとんどが名門と呼ばれる私立校の選手たちである。翔太たちの学校は公立で、私立よりも設備が整っているわけではない。しかし、その差をもつともせず二人はそれだけの実力を身に付けていた。

正直、それだけの实力を持った安奈に、男子である翔太も良平も勝ったことはない。入部テストでは入部の条件が安奈に勝つことだったが、それは建前で、あきらめず何度も立ち向かってくる根気とやる気を見るためのものだったのだ。ほとんどの学生は安奈の实力をみた瞬間、勝てないとあきらめてしまう。その中でも、あきらめず勝つまで何度も挑戦する。それが翔太と良平だったというわけだ。「なんや、緊張するの。先輩が強いと俺らもだらしな成績残せれへん」

「あははは、大丈夫だよ。去年の私なんか君たちよりずっとへたくそだったんだから」

良平の不安を、麻紀が笑って否定する。そういえば、麻紀は高校に入ってから卓球を始めたと言っていた。にもかかわらず県のベスト十六に入る実力の持ち主とは、一体どれだけの練習をしたのだろうか。

「麻紀先輩は、県のベスト十六に入ったのはこの大会じゃなんですよね？」

「そう。その成績取れたのは冬のブロック大会の予選のとき。結構最近なの。去年のこの大会の成績は一回戦負けだったから、たぶん一回戦はそうとう強い選手に当たっちゃうと思うんだよね」

大会の対戦組み合わせは、各校の校内での実力と去年の同じ大会の成績を考慮して決められる。麻紀は去年一回戦で敗退しているの、それを考慮されたトーナメントだった場合、麻紀はいきなり強い対戦相手とあたらざるを得ないのである。

しかし、麻紀の表情にはそれに対して悲観している様子は少しも見当たらない。いつも通りの笑顔で、にこにこ笑っている。

「気負わずに、自分にできること精いっぱいやって、楽しんでければ結果はすぐについてくるよ」

笑顔の麻紀にそう言われると本当にそうなる気がして不思議である。翔太と良平は自然とうなずいていた。

「お待たせ。トーナメントもらって来たわよ。こっちが男子で、こ

「ちが女子ね」

翔太たちが試合のユニフォームに着替え終わったところで、安奈が受付を済ませて戻ってきた。翔太たちは差し出されたトーナメント表を受け取って自分の名前を探す。ほどなくして自分の名前を見つけた翔太は自分の対戦相手を確認した。当然ながら、全く知らない名前である。位置としてはシードから離れていることから、それほど悪い位置ではないだろう。

「さて、ここで一つ問題が発生しました」

翔太たちがトーナメント表を確認していると、安奈がいきなりその声をあげた。翔太たちは視線をトーナメント表から安奈へと向ける。安奈は全員の視線が向けられたのを確認してから、いきなりズバツと麻紀を指差した。正確には、麻紀の履いているユニフォームをだった。

「今日、私と麻紀はダブルスの試合にも出るわ。ダブルスに出るうえで、ユニフォームについて一つ大切なルールがあること、翔太は知ってるわね？」

いきなり指名されて、翔太は驚きながらも、一つうなずいて答えた。

「えっと、ユニフォームは出場者二人ともが上下同じものを着ていなきゃいけないっていうことですか？」

「その通り！」

安奈は大声でいう。そんなことは翔太だけでなく、この場にいる全員がすでに知っている基本的なルールだ。一体こんなことを聞いてどうするのかと首をひねる翔太と麻紀だったが、良平だけが、あ、と声をあげた。

「もしかして、大海先輩たちユニフォームそろってないんですか？」

「そう！ 正しくは、私がユニフォームを忘れちゃったんだけど」

ニコツと笑いながらいう安奈だったが、他の三人は沈黙。気まずい沈黙が二秒ほど続いた後、えー、という声が一斉に響いた。

「いや、忘れたって、それじゃ出れないってことじゃないですか！

「ニコッ、じゃないですよ！」

「忘れたといっても、上はしっかりそろってるから大丈夫。問題はハーフパンツのほうなのよ」

そう言っただけで安奈はスカートを脱ぐ。出てきたのは、色こそ麻紀のものと同じ黒だったが、全く別メーカーのデザインの子となったハーフパンツだった。

「いや、大丈夫やないですよ。どないするんですか？」

「まあ、忘れちゃったものはしょうがないのよ。今更取りに帰るわけにもいかないし、私も困ったなと思ってたところで、翔太がいたわけよ」

「またもいきなり名指しされて、翔太は首をひねる。しかし、あ、と今度は麻紀が声をあげた。

「翔太君、私と同じハーフパンツ」

「え？」

言われてみると、確かに翔太と麻紀のハーフパンツは同じものだった。翔太は中学のころ使っていたものをそのまま持ってきただけだし、麻紀も自分のものをただ持ってきただけだろう。本当に偶然に、二人のハーフパンツはそろっていた。

「そう。だから私と翔太のハーフパンツを交換すれば、何も問題ないわけよ。個人戦はハーフパンツなんて関係ないし、体格は私も翔太も同じくらいだし」

安奈のいうことは確かにこの状況を解決するためにはうってつけだった。翔太と良平は、まだであって日も浅く、ダブルスの練習をする時間がなかったため、今回の試合ではシングルスにしか出場しない。だから翔太と安奈がハーフパンツを交換することには何も問題は無いのだが、先輩とはいえ女子が履いていたものを交換して履くというのは、どこか後ろめたいものがあつた。しかし、それでもこの状況を解決できるならいいかと、翔太は制服のズボンを手に取る。

「じゃあ、僕が今から更衣室に行つて、ズボン履き替えてきますか

ら、それ持って今度は安奈先輩が更衣室で着替えて、安奈先輩のハーフパンツを持って僕がまた更衣室で着替えてくる、って感じていいんですか？」

「ああ、そうしたいのは山々なんだけど…」

安奈がそう言って更衣室に向かおうとする翔太を止める。何か問題があるのかと翔太が立ち止まった瞬間、館内放送が流れた。

「…五コート、十二番、大海・志村組、十三番、服部・森組。第五コートに入ってください」

それは、安奈と麻紀に試合を行う台まで来いというものだった。

「というわけで、そんなまどろっこしいことはしてられないの。だから、もっと手っ取り早く済ます方法で行きます」

安奈はにつこりと笑って、恐ろしい言葉を発した。

「広い多目的トイレがあったから、そこで一緒に着替えましょう」

2 - 5 試合（後書き）

久しぶりの更新にも関わらず、物語は進展せず。本当にすみません。
次のお話は少しだけギャグ要素を含むつもりです。

2 - 6 気持ち（前書き）

またまた更新が遅くなってしまいました。申し訳ありません。
次はいつに更新できるやら、ちょっと不安ですが途中で投げ出すの
もいけないので、次話更新します。

2 - 6 気持ち

翔太は安奈のあとについて、体育館の廊下を歩いていった。すれ違う生徒はみなジャージやユニフォームを着て、試合独特の緊張感が廊下にもあふれている。

しかし、そんな興奮したような緊張感とは全く別種の緊張感を、翔太は感じていた。どこかうれしい気もするのだが、しかし後ろめたさと気恥かしさが入り混じったようなこの感覚。思わず周りを歩く人の視線を気にしてしまう翔太は、無意識のうちに挙動不審になっってしまう。試合前に緊張することはよくあることだが、なぜ試合とは別のことに對して緊張しなければならないのか。

そんなことを考えているうちに、多目的トイレに到着した。通常ならば、車いすの方や障害者の人が利用するような場所であり、翔太や安奈のような人が入るような場所ではない。しかし、安奈は何のためらいもなくその横開きの扉を開けた。中は車いすの人が入っても十分なスペースが余るように、広々としたつくりになっていた。「ほら、早く入って。人に見られたくないでしょ」

さすがの安奈も小声で促す。今はたまたま廊下に人はおらず、入るには絶好のタイミングだった。翔太は周りを確認してから、安奈の顔を見る。

「先輩、本当にやるんですか？」

「いまさら何言ってるの！ ほら、早く」

グイッと手を引っ張られて、翔太は多目的トイレの中に強引に連れ込まれた。扉が閉まり、安奈が力ギをかける。

二人入っても、十分ゆとりがあるスペース。これなら楽に着替えもできるだろう。

そこまで考えて、翔太は頭を振ってその考えを打ち消す。着替えるって、この密室で二人きりの状態で、着換えるというのか。上半身ならまだしも、下半身をである。ハーフパンツの下にはトランク

スを履いているとはいえ、抵抗が全くないわけではない。

それは安奈も同じはずである。そもそも、一緒に着替えるといつてもどうするというのだろう。この状況下では、翔太だけでなく、安奈もハーフパンツの下を見せることになってしまうのだが。

「それじゃ、翔太は後ろを向いて、ハーフパンツを脱いで」

鍵がしっかりとしまっていることを確認した安奈は、翔太にそう指示した。ええ？ と翔太はうろたえる。

「でも、それじゃ僕ハーフパンツの下見せることになるんですけど……」

「別にいいじゃない、男なんだし。まさかノーパン？」

「ち、違いますよ！」

顔を赤くして、翔太は反論する。冗談よ、と安奈は笑ったが、それでもすぐに笑いを引つ込めた。

「まあ、ちよつと嫌かもしれないけど、時間がないから協力して。ほら、早く」

まだ少し抵抗は残っていたが、翔太は覚悟を決め、安奈に背を向けてからハーフパンツを脱いだ。そのまま、顔を後ろに向けずにハーフパンツだけ後ろに差し出すと、そのハーフパンツがすぐさま手からもぎ取られた。

「ありがとう。いいつていうまでこっち見ちゃだめよ。しっかりと見張りながら着替えるから」

「わかりました」

心臓が早鐘を打つのを感じながら、翔太は答える。その答えを聞いてから、後ろでハーフパンツを脱ぐ音が聞こえた。

「ごくり、と思わず翔太は唾を飲み込む。ハーフパンツを脱いだ状態を安奈に見られている恥ずかしさが先ほどは強かったが、全く別の意味で今は緊張している。自分がハーフパンツをはいていないとか、それを安奈に見られているとか、そんなことはどうでもよくない、無意識のうちに体全体が耳になり後ろの音を聞こうとする。わずかな衣擦れの音だけで、意識してもいないうちに変な妄想が膨ら

み、口の中が渴く。後ろを向いてしまいそうになる首を理性で必死にコントロールし、音を聞かないようにと言いつける。しかし、そうしようとすればするほど、耳は敏感に音を感じ取っていく。

「ねえ、翔太はさ」

だから、安奈からそう声をかけられた時は、思わず「ひゃい！」と変な声をあげてしまった。

「ちよつと、大丈夫？」

「は、はい！ 大丈夫です！」

翔太はそう答えながらも、声は自然に上ずってしまっている。普通にしゃべることなど、今はできる気がしない。

それを察してか、後ろからため息が漏れるような音が聞こえた後、安奈の言葉が再び聞こえてきた。

「この前連れてきた、清泉、さんだっけ？ あの子のこと、どう思ってるの」

いきなり楓の名前が出てきて、翔太の心臓がさらに跳ね上がる。どう思っているのかって、どう答えればいいんだ？ 好きだとか？ 嫌いだとか？

「この前あの子、部活に入ること断ったじゃない。翔太としては、それどう思ってるの？」

安奈のその言葉で、翔太の頭は少し落ち着く。内容で、安奈の聞こえている事が自分が思っていたことと違う気がしたからだ。

「翔太はさ、自分の気持ち相手にいうのヘタでしょ。どっちかっていうと、他人の意見に合わせて行くタイプじゃない。だから、自分の意見いうことってそんなに得意じゃないんじゃない？」

それはその通りだ。今まで生きてきた中で、翔太は自分から積極的に意見を発したことはない。それは、誰に対しても同じだった。友人にだって、教師にだって、家族にだって。こうしようと提案されれば賛同するし、こうしなさい、ああしなさいと言われるれば素直に従う。自分が多少苦しい思いをしても、そうしていれば周りの人は怒らないし、変な争いことも起こらなかった。

「でも、女の子って、案外そういうのって不安になることもあるのよ」

翔太はその言葉に、すこし疑問を覚える。不安とは、一体何の事だろうか？

「相手が自分の子とどう思ってるのか。どう考えてるのか。そういうのって、女の子は敏感に感じやすいけど、反面言葉にしてもらえないと不安になる時もある。清泉さんみたいにおとなしい子は、特にそうだと思うの」

翔太は楓のことを思い出す。いつも表情の変化が乏しく、何を考えているのかわかりにくい楓。そんな楓が、実はいろいろと悩んでいるのではないだろうか。

「清泉さんを、どう部活に連れて来たのかは知らないわ。たぶん、夏目先生に連れて来いって言われたからって行っただけでしょうけど。結局、彼女は部活に入るのを断ったけど、じゃあ、そのあとあの子と部活について話した？　もし、翔太が楓に部活に入ってほしいと思っているなら、それを相手に伝えるべきであるとは思うの」

そこで言葉がいったん途切れて、手にハーフパンツが触れる。安奈が差し出した、安奈がはいていたハーフパンツだ。それを手に取り、翔太はハーフパンツをはく。その間も、安奈の言葉は続いた。

「あの子がどんな理由で入部を断ったかは分からない。けど、もし翔太が入ってほしいと願っているのなら、入りたいと思っていたかもしれない。けれど、それを言葉で聞けない以上、確信は持てない。逆に、誘ってこないということは自分は部活に入ってほしくないと思われているのではないだろうか」

「そ、そんなことは……！」

翔太はハーフパンツをはき終え、思わず振り返る。すると、すぐ間近に、安奈に顔があつた。翔太は驚いて、一步、後ろに下がる。安奈はその翔太の目を真正面から見つめて、真剣な表情でこういった。

「なら、そう行っただけがいいわ。さっき言った、私の言葉が本当

にあの子の気持ちだという保証はない。むしろその可能性のほうが低い。ただ、私がいいたいのはね」

そこまで行つて、顔を離してから、安奈は扉に向かう。鍵を外して、取っ手に手をかけてから、こう続けた。

「自分の気持ちはしっかり伝えないと、離れていつちやうものもあるのよ」

そう言つてから、安奈は勢いよく扉を開けた。その瞬間、それまで多目的トイレの中にあつた空気が一掃される。

「さ、早く行きましょう。試合に送れるわ」

何事もなかったかのように、安奈はそう言つて外に出る。翔太はあわてて安奈の後を追いかけるが、安奈の言葉が胸にしこりのように残っていた。

気持ちをしっかり伝えなければ、離れていくものもある。

楓も、やはりそうなってしまうのだろうか。

2・6・5 電話（前書き）

更新遅れた分二話同時更新です。

厄介な電話が来た。

奥村教諭が受話器を取って話を聞くうちに考えたのは、そんなことだった。

電話の相手は自分が担任しているクラスの生徒の保護者である。生徒の名前は清泉楓。おとなしい性格で、クラスでは目立たない存在。外見はいいのに、あまり社交的でない分、クラスではいつも友達達の輪に入れていないような生徒だった。

彼女の父親は仕事のために別居している。母とも中学生のころ死別しているため、彼女が今同居しているのは母方の祖父母の家ということ、奥村はもちろん知っている。電話をもらったのは、その同居している祖母からだった。

内容は、簡単に行ってしまったえば最近子どもの様子がどうもおかしいというもの。いつも何やら考え事をしているようで、いまいち元気がない。前まではこんなことはなかったのに、ということらしい。中学から高校に上がって、新しい環境に上手く対応できず、それまでと様子が変わる生徒は割という。中学生や高校生など、まだまだ成長途中。そんな生徒が環境ががらりと変わった瞬間、少しくらい様子が変わるの当たり前。実際、そういう子どもの変化を心配して、保護者が電話をしてくるといことはたまにあるのだ。

ただ、奥村としてはそのような経験がまだなかった。どう対応したものが少しだけ考えたが、とりあえず生徒と面談をし、家庭訪問などをして正確な情報を集めるということで話はまとまった。よくある話とはいっても、万が一、いじめにつながっている可能性もある。何しろ対象となっている生徒がクラスで目立たないおとなしい性格の女の子ときている。できる限りの対策は取っておくべきだ。

家庭訪問をする日時を決め、奥村は受話器を置き、一つため息をつく。なんだか先行きが不安で、一服したい気分になった。校内は

禁煙なので、喫煙できる場所へ行こうと席を立ちあがりかけた時、ちょうど同じように席を立つ教師に目がついた。

「ああ、夏目先生。今から一服ですか」

「ええ、奥村先生もですか」

声をかけた相手はすぐこちらを向いて返事をする。教師としてはまだ若い、生徒の指導が上手いと評判の夏目。生徒だけでなく、年上の教師からもあまり悪い評判は聞かない。教師になって二十五年以上たつ奥村も、その実力には一目置いていた。

「先ほど電話をして、ため息をついてらっしゃいましたが、なにかよくないことでもありましたか？」

二人並んで歩きだすと、夏目がそんなことを聞いてきた。奥村は、ああ、と正直にうなずく。

「クラスで受け持っている保護者からちよつとね。生徒の家での様子がおかしいというんだ」

「様子がおかしい？ まさかイジメですか？」

「まだ確証があるわけじゃないんだ。正直、クラスの様子を見ている感じではそう思えないんだが、その可能性を考えると気が重くてね」

「この時期は、新しい環境になれずに様子が変わる生徒もいますからね。その可能性のほうが高いんじゃないですか？」

夏目が希望的観測を述べる。この青年は相手が落ち込んでいたりする時はフォローが上手い。それが同僚からも人気のある理由の一つといえた。

「ああ、経験上、その可能性のほうが高いとは思ったが、万が一もある。とにかく早めに対応して、対策をとるに越したことはないんだよ」

そこまでいって、奥村はふとあることを思い出した。そういえば夏目は、最近楓を卓球部とやらの勧誘していなかったか。つい先日、楓を卓球部に勧誘していいかと聞かれた覚えがあった。

生徒の個人情報にもかかわるため、個人名を出すのはよくないの

だが、何か手掛かりが得られるかもしれない。奥村はそう考え、口を開いた。

「そういえば、夏目先生は清泉を部活動に勧誘していませんか？」

「はい？ と夏目が反応する。

「まさか、今回電話があつたのは清泉の保護者からですか？」

「ああ、なんでも、中間テスト前後から様子がおかしくなったと聞いたんだが」

話が早くて助かると奥村は思う。考えてみれば、夏目が清泉を勧誘していたのもその時期だ。これはどうやら夏目が関連していそうだと、奥村は推測を立てる。

そんなことを考えていたら、いきなり夏目が勢い込んでこちらを見つめてきた。びっくりして、奥村は思わず一步下がるが、そんなことはお構いなしに夏目は質問してきた。

「奥村先生つて、もしかして清泉の家に家庭訪問をしに行く予定とかってありませんか？」

「あ、ああ。明後日の午後に、一応うかがわせていただくことになっていきますけど…」

いきなり様子が変わったことに、奥村は戸惑いを覚える。しかし夏目の勢いはそれだけでは止まらない。

「あの、もしよければ僕も一緒に同行してもいいでしょうか？」

「え、いや、まあ、保護者の方がいいと言えはいいですけど。何か清泉の変化に心当たりでもあるんですか？」

「はい。大ありです」

それだけ自信たっぷりになると、夏目はようやく奥村から離れる。ほつと一息ついてから夏目を見ると、何やら考え込みながらぶつぶつ独り言をいつていた。どうやら心当たりがあるというのは本当らしい。

とりあえず、夏目からももう少し詳しい話を聞いたほうがよさそうだなと思いつながら、奥村は夏目にかける質問を頭の中で考え始めた。

2・7 不安（前書き）

最近にしては珍しく、短期間更新です。

2 - 7 不安

卓球の試合があつた日から、ちょうど十日。翔太はいつも通り、弁当箱を手に屋上への階段を上つていた。

「自分の気持ちはしつかり伝えないと、離れていつちゃうものもあるのよ」

頭の中では、安奈が試合の日にしたその言葉が響いていた。結局、翔太は楓に、自分の気持ちを伝えられないでいた。

部活に来てほしい。ただ一言そういうだけだというのに、そのことがなぜだか翔太には言えなかった。その理由がなぜなのかもよくわからない。楓に拒否されることが怖いのか、楓に自分の気持ちを押し付けることに罪悪感があるのか。ただ、部活に誘つた日以降、楓とは部活に関する話は一切していなかった。そもそも楓と何か話すこと自体少ないのだが、それでも楓が部活に来て日から一カ月弱一度もその話が出ていないのも少し不自然な気がした。なんだから、楓がその話題を避けているような、わざと口にしないようにしているような、そんな雰囲気があるのだ。

そんな状況も手伝つて、翔太は結局安奈のアドバイスを実行できないでいた。いっそ、このままでもいいのかもしれないと思うときもあるが、翔太の気持ちが伝わっていないために楓が入部しないのだとしたら、やはりつて得るべきなのでは、と考えることもあるのだった。そんな葛藤を抱えたまま、翔太は今日も屋上への扉をあける。そこにはいつも通り、楓が一足先に弁当を開いていた。

扉を開けた翔太を、楓はちらりと見る。翔太は手をあげて挨拶をしてから、楓の横にいつて腰を下ろした。楓の隣にいれるのはうれしい事なのだが、最近は少しでもそれに抵抗を感じるようになってきた。それは心の片隅に引っ掛かっている安奈の言葉が、ここにいと少しだけ痛むからだった。何とかして自分の気持ちを伝えなければと思う気持ちと、本当にそれはいいことなのかと悩む気持ち。

二つの間に板挟みになって、翔太はどこか気まずい思いをしていた。そんなことを考えていたからだろう。いきなり楓に話しかけられ、翔太は肩を少し震わせた。

「ねえ」

「な、何？」

少しだけ緊張もしてしまう。ただ話しかけられただけのことなのだから、緊張するのはおかしいことだ。そう思っただけで内心の緊張が収まりかけた翔太だったが、楓の次の一言でまた緊張感が高まった。

「何か、悩み事でもある？」

「…え？」

楓はまっすぐ、翔太の目を見て問いかけてきた。翔太は何と答えていいかわからず、しばらく固まる。楓は視線を外さないまま、さらに続けた。

「なんだか、最近表情がよくない気がしたから」

どこまでもまっすぐ見つめてくる楓の視線には、翔太を気遣う気持ちが見て取れた。しかしその悩みを正直にこの場でいってしまってもいいのか、それともなんでもないと黙っておくべきなのか。心の中で悩む翔太だったが、その時ふと気がついた事があった。

「楓、もしかして寝不足？」

楓の目の下に、薄くだが隈ができていたのだ。白い肌にうつすらとできているそれは、少しだけ化粧がしてあってごまかしてあるようだった。

「うん、ちよつと、昨日寝れなくて」

そういつて楓は視線をそらす。どこか見られたくないものを見られた、そんな様子だった。その様子が翔太の気持ちに拍車をかけて、余計心配になる。しかし、楓の次の言葉で翔太はそれどころではなくなった。

「私より、翔太は大丈夫なの？」

「え？」

再びまっすぐこちらに視線を向けて話しかけてきた楓に、翔太は

返答に窮してしまう。正直にいうべきか、いわぬべきか。

「……………」

三十秒ほど、沈黙が流れた。楓と翔太だけの時間が止まったかのように、無言で見つめあう時間だけが続いた。

「その、楓は…」

やがて、ゆつくりと翔太の口が動いた。楓は無表情でひたすら翔太の言葉を待っている。耳の奥で鼓動の音が大きく聞こえる。その鼓動の音にかき消されて、次に口から出てきた言葉を、翔太は自身でもしつかりと聞き取れなかった気がした。

「やっぱり、卓球部には入りたくない？」

「……………」

楓の瞳が、ゆつくりと大きく開かれた。その表情は、驚いた時のものだということを翔太は経験で知っていた。やはり質問するのはまずかったか。すぐに後悔して、翔太は楓から視線をそらす。

「ごめん、忘れて。変なこと聞いちゃったね」

楓の顔が見えない。翔太の心の中にはただ申し訳ないという気持ちが渦巻き、楓の顔を再び見ることはできなかった。おそらく楓は嫌な顔をしているだろう。一度入部を断ったのだから、楓の意志は明白だ。にもかかわらず、自分はまた勧誘するようなことを口走ってしまった。やはり、自分の気持ちを楓に伝えようとするべきではなかった。

「翔太は」

ふと、隣の楓からそんな言葉がかけられる。翔太がおそろおそろ楓のほうに顔を向けると、弁当を見つめてうつむいたままの楓がゆつくりと言葉を続けた。

「私に、卓球部に入ってほしい？」

恐る恐る、確認するような声。その答えを、聞くのを恐れていそうな声。そんな楓に、翔太は、何と答えるべきか迷ってしまう。正直に伝えるべきか、伝えぬべきか…。

『自分の気持ちはしつかり伝えないと、離れていっちゃうものもあ

るのよ』

迷う翔太の頭の中に、安奈の言葉が聞こえた。翔太は唾を一つ飲み込んでから、再びゆっくりと口を開く。

「僕は、できたら楓に、入ってほしい」

絞り出すように、ゆっくりと出てきた言葉が、何も無い屋上に響いた気がした。強い風が吹いて、楓の長い髪の毛が舞い、顔を隠してしまう。うつむいていてたださえ見にくい楓の顔が完全に隠れてしまった。

風は、すぐに止まった。しかし、乱れた髪の毛のせいで楓の表情は依然隠れたままだ。楓は翔太の言葉を聞いてから微動だにせず、その気持ちをうかがい知ることも出来ない。どうしていいのかわからず、翔太が思い切って声をかけようとした時、楓がスッと、弁当箱のふたを閉めた。中身はまだ半分ほど残っている。驚いて声をかけようとする翔太だったが、楓はお構いなしにさっさと食べかけの弁当箱を片づけてしまう。

「か、楓？」

やっと翔太が声を出せたのは、楓が弁当を片づけ終わり立ち上がるのと同時にだった。そのまま何の返事もせず、楓は屋上の出口へと走り出してしまふ。翔太はあわてて立ち上がろうとしたが、それより先に楓は屋内への扉をくぐってしまっていた。

「楓！」

二度目の呼び掛けには、返事の代わりに階段を下る音だけが聞こえてきた。一人屋上に取り残された翔太は、何が何だか分からず、どうしていいかわからないまま、途方に暮れてしまふ。とにかく楓を追いかけなければと思い弁当を片づけようとしたところで、ふと楓が座っていた場所に目があった。

そこには、晴天にも関わらず、三、四敵のしずくの跡が残っていた。

次の日、楓は屋上にこなかった。

今までこんなことは一度もなかった。雨が降った日でも、屋上への出入り口に座って翔太と楓は昼食を食べた。たいていは楓のほうに屋上に先にいて、もし翔太のほうが先にいたとしても、少し待てば楓はすぐにやってきた。

しかし、楓が屋上から不意に立ち去ってしまった次の日、屋上には楓の姿はなかった。昼食の時間、翔太はいつまでも一人だった。

屋上から立ち去ってしまった楓を翔太は追うことができなかった。その日はそのまま楓の姿を見かけることなく終わった。なんだか残念な気持ちになった半面、どこかほっとした自分がいたのも事実だ。楓にあつて、何か話したい。しかし、何を離せばいいのかわからない。泣かせてしまったことを謝るのか。なぜ楓が泣いてしまったのかもわからないまま？ ではなぜ泣いてしまったかを聴くのか？ そんなことできるわけがない。無神経にもほどがある。では楓を泣かせてしまったままでいいのか？ そんなわけはない。ならばどうするか？ ……。

思考のたどりつく場所が決まって沈黙で、どうしていいかわからない。とにかく次の日の昼食になれば楓に会えるのでから、そこでなんとかしようと考えていた翔太の考えは、結局、破綻してしまった。

途方に暮れたまま午後の授業を終え、翔太は部活に向かった。もちろん授業の内容など頭に入っているはずもない。休み時間に、何度か楓のクラスを除いて楓の姿を探したが、移動教室だったらしく、クラスには楓の姿を見つけないことはできなかった。放課後楓のクラスメートを捕まえて楓がいるかどうかを尋ねようとしたが、人見知りの翔太にはそんなことはできなかった。第一、楓を呼びだして、一体何を離すというのか。結局そんな思考に行きついてしまい、

翔太は楓のクラスの前を後にした。

胸の中にあるのは罪悪感と不安がごちゃ混ぜになったもので、自分自身、子の感情をどうしていいのかわからない。頭がぼんやりとして、ただ形を持って浮かぶのは、楓と話をしたいということだった。翔太が楓を泣かせてしまった、その前の状態の楓とだ。できるなら、昨日の会話をなかったことにしたい。すべてなかったことにして、また楓と元の関係に戻りたい。思考によって解決策が浮かばなくなってくると、そんな現実逃避ぎみな思考が頭の中を埋め尽くす。ひどくぼんやりとした状態で歩き、ふと気がつくと、翔太は体育館の前にいた。しっかりと上履きから靴に履き替えた状態で、いつも通り、部活をするための状態だった。自分がいつ靴を履き替え、どのようにしてここまで来たのかもわからない。このまま帰ろうかとも思ったが、無断で部活を休むのも気が引ける。どうしようかと立ち止まっていたら、後ろから肩をたたかれた。

「よーっす、翔太。今日も元気に部活やるうや…って、おい！大丈夫か？ 死にそんな顔しとるで」

そんなふうに驚きの声をあげたのは良平だった。翔太はぼんやりとした頭のまま、よお、と挨拶を返す。しかし、その声には自分でもわかるほど覇気がない。

「ちよ、どないしたん？ なんか有ったんか？」

「いや、大丈夫」

「大丈夫なわけあるか！ 鏡見てみい」

良平は翔太の言葉をすぐさま否定する。自分はそんなにもひどい顔をしているのかと、人ごとのように考えながら、そういえば楓もどこか疲れたような顔をしていたなと思いだす。疲れは取れただろうかとぼんやりと考えながら、ふと気付くと、翔太の頬を何かが伝っていた。

「な、翔太？ ほんとどないした？」

良平があわてて訪ねてくる。翔太はわけもわからないまま、頬をぬぐう。それは自分の目から出てきたものだった。

「…良平」

そこで、翔太はようやく自分のほうから良平に話しかけた。ゆっくりと、良平のほうに顔を向ける。

「なんや？ どないしたか言つてみい」

優しく声をかけてくれる良平に、翔太はゆっくりと口を開いた。

もう、自分一人で抱え込んでいることはできなかった。

「僕は…」

そこからゆっくりと、翔太は昨日の出来事を話した。

「なるほど。翔太が正直な気持ちを言ったら、清泉さんは泣いて逃げてしまったと…」

安奈が事の顛末をまとめる。はい、と翔太は力なくうなずいた。

ここは体育館の中で、翔太たちは部活の用意もそこそこに隅に集まって話し合っていた。卓球台も出しかけのまま、今は練習している部員は一人もいない。

翔太が話したことを、良平は自分だけでは手に負えないと判断し、すぐさま安奈と麻紀にも知らせて、現在に至るという状況である。

「でも、なんで清泉さんは逃げちゃったのかな？ 泣く理由もいまいちよくわからないし」

首をかしげるのは麻紀である。良平も、その意見にはうなずいた。

「僕もそれがわからんですわ。そこで入りたくないと思えるのであれ、やっぱり入ると翔太の気持ちを受け入れるのであれ、泣いて逃げ出す言うのはちと理解できません」

「おとなしい子だからね。あんまり執拗に迫られるのが嫌で逃げちゃったのかもしれない」

安奈が自分の予想を言うと、翔太の心は一気に沈んだ。自分は楓に嫌われてしまったのだろうか。

「ちよつと先輩。あんまり翔太をがっかりさせること言わないで下さいよ。それに翔太が正直に言ったのは先輩のせいっていうのも有

るんですよ」

「まあ、そうね。そこについては悪かったわ。私は自分の経験から言っただけでなんだけど、それが裏目に出ちゃったわけだし」

素直に安奈は翔太に頭を下げる。いえ、と翔太は力なく首を振った。安奈は翔太の何を思っ言ってくれたことなのだ。安奈が悪いわけではない。

「でも、ここで話し合ってるだけでも事態は進まないやないですか。とにかく、清泉さんに会うことが先決やと思うんですけど」

「でも、あつて何をどうするの？」

良平の意見に、安奈が疑問を投げかける。

「泣いちゃった原因がわからない以上、あつて謝るか、どう対応するかが代わってくると思うわ。そのためには、しっかりと泣いちゃった原因を考えないと」

「でも、それは僕らの予想で間違ってるかもしれないじゃないですか。それなら、とにかく謝って、理由を聞くようにしたほうがいいような気がしますけど」

「女の子って、ただ謝られるだけじゃなくて、理由をきちんと理解したうえで謝らないと納得しなかったりするんだよ。清泉さんがどうかはわからないけど、とにかく謝つとけっていう男の子の考えは、女の子には逆効果にもなるんだから」

女性二人の意見を聞いて、良平は自分の意見を引っ込める。男の予想よりも、こういうものは女性の意見に従ったほうがいい。

「あー、こういうときに限ってあのバカ顧問はいないし。こういう人的トラブルってあいつの得意分野なんだけどなー」

安奈が頭をかきむしりながらばやく。いないものはしょうがないよ、と麻紀がなだめたところで、安奈の鞆の中のケータイが着信音を出した。ちよつと失礼、と安奈は自分のケータイを取り出し、画面を見る。

「…噂をすればなんとやらだわ」

そう言つて安奈は電話に出る。どうやら、夏目先生からのようだ。

「もしもし、今どこにいるんですか？ いまちよつと困った事態が発生してて…」

安奈が会話を始めるのを、翔太はぼんやりと聴いていた。みんながいろいろな意見を出してはくれたが、具体的な解決策には至っていない。やはり一度楓とあってみて、直接話をしたほうがいいのだろうか。そんな事を考えていたら、安奈が突然驚いた声をあげて翔太は顔をあげる。すると安奈の口から、とんでもない言葉が出てきた。

「清泉さんが、入院した？」

2 - 9 病室

今日は部活、休みなさい。

安奈にそう言われ、翔太は夏目から聞いた市立病院へと急いだ。部活のための服には着替えていなかったから、荷物をひつつかんで、文字通り体育館を飛び出す。自転車置き場から自転車にまたがり、学校近くの駅まで全力でペダルをこぐ。普通ならば自転車で五分ほどの距離を、わずか二分で駅に到着した翔太は、そのまま改札口を駆け抜けた。切符はもともと通学用に使っておいた回数券を使う。ホームに到着してから、十秒と待たずに電車がホームにやってきた。焦る気持ちに急きたてられながら、翔太は電車に乗り込んだ。

夏目先生の話では、楓が入院したのが昨日の夜。なんでも家で倒れたので、救急車で病院まで運ばれたとのことだった。大したことはないから心配しなくてもいいと、夏目先生は言っていたが、翔太の感覚では、倒れて大したことがないですむはずがない。昨日楓を泣かせてしまったことや、あつて何を話すのかとか、そんなことは翔太の頭から消え去っていた。とにかく、一刻も早く楓に会いたかった。

二駅目で電車を降りた翔太は、市立病院目指して全速力で走る。息が苦しくなるのがわかるのに、足をとにかく前へ前へと送りだす。一歩でも早く、一歩でも先へ。

五分後、翔太は市立病院の入口の前に立っていた。膝に手をつき、肩で大きく息をし、肩にかけていた鞆を地面に投げ出して、息が整うのを待ちながら、翔太はある一つのミスを思い出していた。

（やばい。楓の病室の番号聞き忘れた）

これでは病院に入っても意味がない。そういえば夏目先生は楓が入院している事を知っていたのだから、楓の病室も知っているかもしれない。夏目先生の携帯番号は知らなかったが、安奈の携帯番号ならば知っている。安奈を経由して夏目先生に病室番号を聞けばいい。

いと考え、ポケットから携帯電話を取り出した時だった。

「よお、遅いぞ。なんでそんなところで立ち止まってる」

正面から声をかけられ、翔太は下に向けていた顔を前に向ける。

そこには、夏目先生が学校にいるような服装そのままに立っていた。

「せ、先生、いたんですか」

「まあな。それより、早く行くぞ」

だるそうに、夏目先生は翔太に背を向けて病院の中へと入って行ってしまう。翔太はあわてて鞆を肩にかけると、夏目先生のあとに続く。

「あの、楓は大丈夫なんですか？」

夏目先生に追いついたところで、翔太は勢い込んで尋ねる。その慌てふためいた翔太とは打って変わって、夏目先生はどこかけだるそうに答える。

「安心しろ、ただの貧血だ。思春期の女子にはよくあることだ。それほど問題じゃないよ」

夏目先生が言うのだから、間違いはないのだろうが、それでも翔太の不安は完全にぬぐい去れない。そんな翔太の様子を見て、夏目先生は面倒くさそうにため息をついた。

「少し疲れがたまって貧血で倒れることなんてよくあることなんだよ。まあ、あいつの場合は精神的な疲れもあつたらしいが、とにかく、今は元通り元気だ。大事を取って今日はもう一日入院するが、明日の朝には退院して、学校には来る予定だ」

「そ、そうですか」

最後の言葉を聞いて、少しだけ翔太は胸をなでおろす。予想していたよりも重症ではないらしい。

「だが、さっきも言ったように少し精神的な疲れもあつたようだ。その疲れの原因を取り除かない限り完全な状態の退院とはいかないかもしれないけどな」

少し不吉な言葉に、翔太は再び夏目先生を不安げな目で見つめる。その視線を受けて、ま、と夏目先生はどこまでも態度を変えずに気

軽に続けた。

「詳しいことは本人から聞けばいい。精神的な負担は、そんなに気にすることもなくお前が何とかできる部類だ」

言葉の意味が理解できず、翔太は問いかけるように夏目先生に視線を投げかけるが、それ以上夏目先生は何も言わなかった。

そのまま、二人は無言で歩き続けた。市立病院はこのあたりでは一番大きい病院で、楓の病室までも少し距離があった。渡り廊下のようなところを通り、病棟をいくつか移動してから、エレベーターに乗り、五階まで登る。エレベーターから降りると、そこはもう病室が並び、ナースステーションがある、完全な入院専用の病棟だった。夏目先生に連れられるまま翔太は歩き、やがて一つの部屋の前で立ち止まった。

「この中に、清泉がいる」

夏目先生が示したのは、一つの病室をカーテンで区切ったものではなく、一つの病室を一人で使うタイプのものだった。

「それじゃ、俺は廊下の端にある待ち合い場所にいるから」

「え……？」

立ち去ろうとする夏目先生に、翔太は思わず声を上げる。ん？

と夏目先生は足を止めて翔太を見た。

「なんだ？ もう清泉の病室はわかったからいいだろ」

「いや、そういうことじゃなくて……」

ここまで来て、翔太の頭の中には昨日の屋上のがよみがえっていた。昨日泣かせてしまったばかりだというのに、病室に入って何を話せばいいのかわからない。しかし、そのことを夏目先生になんと言ったらしいものか。迷っていると、夏目先生は面倒くさそうにため息をついて頭をかいた。

「まったく、お前と言い清泉といい、面倒くさいやつらだ。ほら……」

そう言っただけで夏目先生は楓の病室の前に立ち、その扉をノックする。

「清泉、相田が来たから入るぞ」

「え？ ちょ……！」

翔太が何か言おうとした時には夏目先生は扉を開け、翔太の背中を病室の中に押し込んでいた。

「じゃ、終わったら待ち合いに来いよ」

そう言い残して、夏目先生は扉を閉めていった。まさに電光石火。翔太は何もすることができず病室に取り残された。

振り返り、病室から逃げだそうとも思ったが、病室の中にいる楓にはすでに見られている。ここで出ていっては、あとが余計に入りにくくなる。翔太はしばらく扉を見つめて固まっていたが、やがてゆっくりと振り返り、病室の中に視線を移した。

病室は広く、壁の隅にはテレビと小物をしまらしき棚。窓はあけられており、白いカーテンが風に揺らめいていた。内装は白ではなく、薄いベージュの壁紙が貼られている。

そして、病室の真ん中には、大きなベッドと、白い布団をかぶった楓が、上半身を起こしたままでこちらを無言で見つめていた。

2 - 10 涙の理由

「あ……」

入院している楓の病室の中。楓の視線と視線が自分の視線をぶつかり、翔太は何を言えばいいかわからず固まってしまう。

二人の間にしばらく沈黙が漂う。翔太は病室に入ったままの状態、楓は読みかけらしい本を膝の上に置いたまま、翔太を見つめた状態で。

何か言わなければならない。しかし何を言えばいいのか翔太には思い浮かばない。昨日の屋上でのがフラッシュバックする。逃げ出してしまった楓。屋上にできた涙の跡。どうして楓は逃げ出してしまったのか。なぜ楓は泣いてしまったのか。それを訪ねるのか。違う。泣いてしまったのではない。泣かせてしまったのだ。翔太が言った一言で、楓は泣いてしまい、屋上を後にした。ならば、自分が言うべき言葉は一つのはずではないか。

「か、楓」

まるで初めてその言葉を発音するような、そんなぎこちない発音で翔太が呼びかけると、楓の肩がびくりと震えた。

怖がらせてしまったか。

しかし、そんなことでためらっていたら、いつまでたっても楓を泣かせたままになってしまう。

翔太は大きく息を吸い、そして、頭を下げると同時にこう言った。
「昨日は、ごめん」

頭を下げたことで楓が視線から外れ、その顔が見れなくなる。楓がどんな表情で今自分を見ているかは分からない。しかし、翔太は伝えなければならぬ事をそのまま続けた。

「昨日、僕の無神経な言葉で楓を泣かせちゃったから。だから、謝ろうと思って。実は、僕、何で楓が泣いたかまだよくわかってない。それでも、泣かせちゃったことは、楓に嫌な思いをさせたことだっ

てわかるから。だから、謝ろうと思う」

後半は言わないほうがよかったかもしれないが、ここでわかったような口を聞くよりも、楓に対して正直に今の自分の気持ちを伝えることのほうが大切だと翔太は思った。

「泣かせちゃった原因がわかってないのに、謝ったって意味ないって言われるかもしれないけど、でも、悪いことをしたと思ってる事は本当だから。ここで怒られてもかまわないし、無視されてもかまわないから、今の僕の気持ちをしっかり伝えようと思って。だから

……」

「翔太」

その呼びかけで、翔太の言葉は遮られた。翔太は思わず顔を上げる。それは、楓の声がどこか震えていたからだ。

そして、それは聞き間違いではなかった。楓は、ベッドの上で、こちらに視線を向けたまま、目から涙を流していた。

「……ごめんね。翔太は、悪くない」

涙をぬぐいながら、楓は首を横に振る。翔太はわけがわからず、また楓を泣かせてしまったのかと戸惑ってしまう。先ほどの発言に、何か言っではいけない事があったのだろうか。

「か、楓。その……」

翔太は何か言いかけるが、楓は首を横に振ってその言葉を遮った。翔太はどうしていいかわからず、完全に困惑してその場に固まってしまった。ベッドの上で楓は泣いているが、どうしていいかわからない。翔太が謝ろうとすれば首を振り、何か言いかけても首を振る。一体自分はどうすればいいのだろうか。途方にくれる翔太だったが、そこで楓が涙をぬぐい、「ごめんね」と口を開いた。

「全部、私が悪いの。私が逃げ出しちゃったから……」

そういうと楓は視線を落したまま、それでも涙は止まったようです静かに話し始めた。

「昨日、翔太に部活に誘われて、とてもうれしかったの。そんなことされたの、初めてだったから」

話し始めた楓の声は、もう普段と同じようなものに戻っている。

それは振れば壊れてしまいそうはかなげで、しかし、どこか存在感のある声だった。

「でも、その誘いも断らなきゃなかった。私には、部活をする時間がないから」

以前楓が入部を断った時も、そんなことを言っていた気がする。

自分には、部活をする余裕がないからと。そういえば、あの時の楓はどこか淡々としていて、いつもの楓とは違った雰囲気を出していた気がする。いつもはただ静かにそこにおり、空気に溶け込むでもなく、しかし存在感を出し過ぎているわけでもない。無機質に聞こえるその声も、静かに、その場で感情を微妙に表現するような口調。しかし、あの時の楓は、まるで感情を押し殺したように、機械のように話していた気がした。

「前に、私にはお母さんがいなくて、今はおじいちゃんとおばあちゃんの家で住んでるって言ってたでしょ」

楓と旅行に行った時、聞いた話だ。確か、父親が単身赴任で、祖母の家に世話になっていると言っていたはずだ。

「おじいちゃんもおばあちゃんも、まだ元気なんだけど、家の中で一番若いのは私だから。お邪魔させてもらってるから、家事くらいはしなきゃいけないし、学校の勉強だってしなきゃいけない。その上部活をしている余裕なんて、今の私にはないの。でも、翔太に誘われたら、私、我慢ができなくて」

ギュツと、楓の手が布団を握りしめる。肩がふるえ、また泣きだしそうな顔をしたが、それでも楓は話すことをやめなかった。

「それ以上そこにいたら、私、断りきれ自信がなくて。だから、思わずあそこから逃げだして」

シートをつかむ楓の手に力が一層込められる。

「それで家に帰って、いつも通り、何とか家事をしてたらめまいがして、気づいたら、床に倒れてた。先生は、疲れがたまっていたのと、精神的な疲労が重なったって言っていた」

そこまで聞いて、翔太は楓の気持ちを理解した。

楓の中では、相反する気持ちが今戦っている。家に早く帰って、家事をしなければならぬ。しかしその一方で、部活もしたい。どちらかを取れば、もう一方はあきらめざるを得ない。そんな時、どちらを選ぶべきか。お世話になっている身として、楓は家事をあきらめることなどできなかったのだろう。

しかし、翔太が昨日、屋上で自分の気持ちを言ってしまったことにより、楓の気持ちを大きく揺らいだ。本当は火事ではなく、部活動を選んだのだ。楓も卓球部に入り、楽しく学校生活を送りたかったのだろう。しかし、それはできない。だからあの場から逃げ、翔太の言葉からも逃げ、何とか自分の気持ちを抑えようとした。そのまま家に帰ったところで、緊張の糸が少しだけ緩み、たまっていた身体的な疲れと、精神的な負担に耐え切れず、楓は倒れたのだろう。

しかし、だからと言ってこれは翔太に解決できるような問題でもなかった。楓のおじいさんたちに、楓が部活に行けるようにしてくださいなどとは、いくらなんでも言えない。だからと言って、楓の気持ちの葛藤をどうにかしてあげることでもない。できることと言えば、楓が少しでも部活の事を考えないよう、翔太のほうから部活の話題には触れないようにすることくらいだ。

「ごめんね、心配かけて」

そんなことは、と言いかけて、翔太は思わず言葉を止める。

楓が、泣いていたからだった。

部活に行きたいという気持ちと、おじいさんたちに迷惑をかけられないという気持ち。考えてみれば、楓が今の気持ちを打ち明けたところで翔太には何もすることができない。悪い言い方をすれば、むしろ、翔太にどうしようもないことを押しつけて、負担を増やしてしまうような話の内容だった。それがわかつているからこそ、楓

は今までそのことを翔太には話してこなかったのだろう。

しかし、そんなことを言っていられないくらい、楓は負担に耐え切れなくなったのだろう。倒れてしまったことからそれはわかるし、何より翔太に自分の気持ちを打ち明けたのがいい証拠のように思えた。おそらく、楓の中では、誰かに話さなければもう耐えきれなかったのかもしれない。打ち明ければ相手が困ってしまうということを知りながらも、その気持ちを自分のなかだけにとどめておくことはできなかった。だから、翔太にはどうすることができないと知っていても、話さずには居られなかったのだ。

しかし、そんな楓の気持ちを知ってしまったからこそ、翔太は楓のために何かしてあげたいと思った。何とかして、楓に部活をやらせてあげたい。何とかして、楓の負担を減らしてあげたい。翔太は必死に頭を使い、何かいい案はないかと考える。自分が楓のためにできること、目の前の楓の涙を止める方法を。

そうして、一つの案が、翔太の中に生まれた。

突拍子もなく、無茶苦茶で、それでも、これくらいしか自分にはできない。すごく単純で、根本的な解決策にはなっておらず、なおかつ上手く行く可能性も低い。それでも、自分にできることは、やりたかった。できるかできないかなど関係なく、とにかく、やるしかないんだと、そう思った。

だから、無茶だろうがなんだろうが、翔太は口を開いていた。

「僕が、楓を手伝いに行くよ」

「……………え？」

泣いていた楓が、涙をぬぐうのも忘れて顔を上げる。その顔ははかなげで、まだ涙でぬれていたが、その目は驚いて翔太に向けられていた。

「僕が、楓の家に行つて、楓の家事を手伝う。正直、家事なんてそんなにしたことないから、初めのほうは足手まといになるかもしれないけど、いろいろ覚えるように、頑張るからさ」

翔太は楓に言う。楓は翔太が何を言っているのかわからないとい

ったような表情だったが、それでも翔太は続ける。

「楓のおじいさんたちにも、俺から行って、手伝いに行けるようにするからさ。ずうずうしいかもしれないけど、それでも俺、楓の負担が減らせるように頑張るからさ。だから、楓も部活に来なよ」

話すうちに、はたして本当に上手く行くのか、疑問が強くなる。

しかし、ここで自分が不安な顔をすれば、この案に対して楓を消極的にさせてしまう。この案しか思いつかないのであれば、何が何でもこの案を通すしかないのだ。そう考え、翔太は内心の不安な思いを表情に出さないように努めて明るく続ける。

「部活の間ずっといろっというわけじゃない。家事があるなら早引きしたって構わない。そこは僕が大海先輩たちに掛け合うから。もし早く帰らなきゃいけないなら、俺も早引きして楓を手伝うから」

楓の望みを、願いを、かなえて上げるために。楓が自分に、居場所を与えてくれたように、今度は、翔太が楓に新たな居場所を与えるために。そのために、翔太は言葉を紡ぐ。楓に、手を差し伸べる。「だから、楓も我慢しなくていい。入部して、一緒に部活しようよ」最後は、自分ができる限りの、とびきりの笑顔で。

翔太が言い終えた病室に、再び沈黙が降りる。先ほどの翔太の言葉が反射しているような錯覚さえ覚えてしまうほど、物音一つしない沈黙。翔太の言葉を黙って聞いていた楓は、表情一つ動かさずに、翔太のことを無言で見つめていた。

やがて、ゆっくりと、楓が口を開いた。しかし、その口から言葉は出てこない。喉に何かがつかえて、上手く言葉が出ないかのように、楓は一瞬戸惑った表情になる。そのまま声を出せないような赤ん坊のように、口を開き、閉じを繰り返しているうちに、楓の目から、再び涙がこぼれおちた。

「か、楓？」

翔太があわてて楓に駆け寄る。それでも楓は、必死に声を出そうとし、その口が、ようやく、言葉を発した。

「ぶ、部活に、行きたい」

涙で震えるその言葉を発しただけで、楓は顔を伏せてしまい、あとは泣くばかりとなってしまう。翔太は楓の言葉の意味がわからず、おろおろしてしまう。結局翔太の提案に賛成してくれたのか、反対なのか。それともわけがわからず、単に自分の言葉を発しただけなのか。

おそらく、校舎だったと思う。

だから、翔太はそれ以上声をかけることもなく、優しく、楓の頭をなでた。触れた髪の毛は予想通りさらさらした手触りで、しかし気を抜くと一瞬で壊れてしまうほどはかなげで。だから、翔太は優しく、なんども、なんども楓の頭をなでた。楓は嫌がることもなく、翔太にされるがまま泣いているだけだった。

どれくらい、そうしていただろうか。翔太の耳に入ってくるのは、廊下をあわただしく行き来する看護師さんの足音と、楓の泣き声だけ。その泣き声が、ゆっくりと小さくなっていき、やがて止まったと思うのと同時くらいだった。

コンコン、と、扉をノックする音がした。

翔太はあわてて楓から離れ、楓もあわてて涙をぬぐってから、はい、と返事をする。スライド式の扉が開かれ、複数の足音が病室に入ってきた。誰が入ってきたのだろうと翔太が目を見つめる。

そこには、一組の老夫婦と、夏目先生がいた。

2 - 1 1 楓の居場所

入ってきた人物の内二人が誰かわからず、翔太はなんと声をかけていいのか一瞬言葉に詰まってしまふ。そんな翔太を見て、一番初めに声を出したのは夏目先生だった。

「おお、相田。まだいたか。清泉も、いきなり来て悪いな」

いえ、と翔太が首を振り、問いかけるように夏目先生に視線を向ける。その視線に夏目先生が答えるよりも先に、老夫婦の内のおばあさんのほうが言葉をかけた。

「はじめまして。楓のお友達でしょうか？」

「あ、はい。えっと…」

「こんにちは。楓の祖母、好恵と、祖父、篤です」

その答えに、翔太は少し緊張してしまふ。あまりに唐突の出来事で、なんといっているのかわからなくなってしまふ。先ほど話題にあげていたことも相まって、余計緊張してしまふ翔太だったが、あわてて座っていたパイプ椅子から腰を上げ、こんにちはとあいさつをした。

「そう固くならなくても大丈夫です。楓のお見舞いにわざわざ来ていただいて、ありがとうございます」

そうお礼を言ったのはおじいさんのほうだった。おばあさんも、無言で頭を下げる。大人の人にいきなり頭を下げられ、翔太はどう対応すればいいのか「あ、えっと、いえ」などと言葉を濁してしまつた。そんな様子を少し苦笑いしながら見ていた夏目先生が、場を仕切り直すように、さて、と楓に視線を移した。

「体調のほうはどうだ、清泉。と言つても、さつき俺は見舞いに来たばかりだからそれほど変わっていないだろうが」

その言葉で、翔太が来る前、夏目先生はすでに楓のお見舞いに来ていたことを翔太は知った。楓が入院したことも知っていたから、当然のことと言えば当然かもしれないが。

「大丈夫です。ありがとうございます」

「まあ、相田もきたことだし、少しは気分がリラックスできただろ」
人のよさそうな笑みを浮かべる夏目先生に、楓は、はい、と微笑を浮かべて答える。先ほどまで泣いていた涙の跡がほほに残っていたが、それでも自然に笑えているように翔太には見えた。

「それじゃ、本題に入るかな」

一通り挨拶が済んだところで、夏目先生がそんなことを言った。
本題？ と翔太は内心で首をかしげながら夏目先生に視線を向ける。
楓も同じようなしぐさで夏目先生を見ていたが、その視線を受けて、夏目先生はもう一度繰り返した。

「おう、本題だ。ちよつと、清泉のおじいさんとおばあさんから清泉にお話があるそうなんだな。悪いが、相田はちよつと席をはずしてもらったほうがいいんだ」

「あ、わかりました」

そう言つて荷物を持ち、扉へ向かおうとしたところで、楓のおじいさんが声をかけてきた。

「もしかして、卓球部のお友達ですか？」

扉へ向かおうとしていた翔太の足が止まる。なぜそのことが分かったのかも疑問だったが、それ以前に、なぜここで卓球部という単語が出てきたのかがわからなかった。楓が部活に入りたいことを家で隠していたということは、おじいさんとおばあさんから卓球部の言葉が出てくることは考えにくい。内心で不思議に思いながらも、はい、と翔太は答える。

「では、ここにいていただいても大丈夫です。私たちのお話は、卓球部に関する事なので」

おじいさんの言っていることがつかめず、質問の代わりに楓に視線を向けると、楓は少し驚いたような顔をして夏目先生のほうを見つめていた。すぐに翔太にも思い当つて、夏目先生を振り返る。夏目先生は、少しいたずらっぽい笑みを浮かべたまま、無言でうなずいた。それだけで、翔太にはおおよその意味が理解できた。夏目先

生が、おじいさんとおばあさんに、卓球部のことを話したのだ。病室に一緒に来たことから、それは容易に想像できた。

「さて、楓。私たちがなぜ卓球部の事を知っているのか不思議に思うかも知れんが、まあ、予想はできているだろうけども、先生から少しお話をうかがったよ」

ベッドの横に立つたおばあさんの言葉に、はじかれたように楓は視線をそちらへ向ける。隠していた重大な事を見つかってしまったような、あわてたような表情がそこにはあった。

「今まで隠してきた事だから、たぶん、お前としては私たちに知られてほしくなかったのだろう。ごめんな、勝手に聞いてしまつて」

「そのことは、私に落ち度があります」

そう丁寧な言葉で言つたのは、翔太の後ろに立っていた夏目先生だった。夏目先生は静かに一歩前に出て、すつと頭を下げる。

「今回は、楓さんの秘密を、私の口から申し上げることになって大変申し訳ありませんでした。改めてここで、謝罪を申し上げます」

そう言ってから頭をあげた夏目先生は、今度は楓をまっすぐ見つめ、また頭を下げた。

「清泉も、すまなかつた。生徒の秘密を、保護者とはいえ勝手に漏らしてしまったことは、お前の信頼を裏切る行為だったと思つていゝる。許してもらえろようなことではないかもしれないが、ここで謝つておこうと思う」

いきなり謝られて、どう反応していいかわからず、楓は目を丸くしてただ夏目先生を見つめているだけだった。翔太も状況がよくつかめず、驚きを隠せないでいた。

やがて、夏目先生がゆっくりと頭をあげ、でも、と付け加えた。

「家でお前の元気がないらしいという話を、お前の担任の先生から聞いてな。この前、お前がいない間の家庭訪問に同行させてもらった。その時に、話すべきだと考えて、卓球部のことを話した。つい、一昨日のことだ」

一昨日と言えば、翔太が楓を泣かせてしまった前日のことだ。

「お前の様子がおかしくなりだしたのは、ちょうど俺がお前を卓球部に誘ったところからだ。だから、おそらくお前は卓球部に入ろうかどうか迷っているのだろうと考えて、元気がなくなったと思うんだ。だから、そのことを、保護者の方に謝りに行く意味も込めて、家庭訪問に同行したんだ」

「あなたを誘ったことで、あなたの気分を不安定にさせてしまったと、先生は謝られたの。でも、先生もあなたの事を思っていたのだいた事だから、私たちは先生にお礼をいったの」

おばあさんが、夏目先生の話の補足する。おそらく楓が、クラスで友達があまりいないことを、おばあさんたちは知っていたのだろう。楓の担任も家庭訪問に言ったということだから、それくらいはわかるはずだ。それでなくても、子どもの学校での様子というものは、家にいるときでもなんとなくわかる。友達の話が家の中で一度も出ないとなると、それくらいは容易に想像がついたりするのだ。

そんな楓に、友達ができるように配慮した夏目先生の行動は、おばあさんたちからすれば、感謝こそすれ、怒ることではなかったのだろう。

「お前が卓球部の入部で悩んでいるかもしれない。その話を聞いた時、おじいちゃんたちは先生を責めるよりも、自分たちを責めた。楓を苦しめてるのは、私たちが楓に家事をさせてしまっているからだと思っただけ」

おじいさんが少し悲しそうに言う。どこか震えていそうなその声を聞いて、楓は目に涙を浮かべそうになりながら、すぐに首を横に振った。そんなことない、と言いたかったのだろうが、声を出せば涙があふれそうだったのだろう。何も言わず、楓はただ無言で首を横に振っていた。

「でも、その話も確実な事じゃなかった。実は楓が他の事で悩んでいるだけで、卓球部のことは何も考えていないかもしれない。それなのに、私たちからお前に、卓球部の話をするのはよくないと考えて、結局、お前から話が聞けるまで、もう少しだけ、待つことにし

た」

おばあさんが状況を説明する。おそらくそれは、つらい選択だったのだろう。子どもがつらそうなのを見ても、その原因がしっかりとわからない。結局は、子どもから相談されるまで、待つしかないのだ。それがどれだけつらい選択かは、翔太は何となくわかった。翔太も、楓を旅行に連れて行ったときに、同じような気分を味わったことがあるからだ。

「そして、昨日、お前は倒れた」

おじいさんが、静かに言う。ずきりと、翔太の胸が痛んだ。おそらくその引き金を引いたのは、自分だからだった。

「取り返しのつかないことをしてしまったと思った。様子を見よう、なんて悠長に構えようとしていた自分たちの考えが、どれほど甘いかを思い知った。お前は、もうそれほどまでに追い込まれていたということに気がついてやれなかった。本当に、辛い思いをさせた」

おじいさんが楓に頭を下げ、おばあさんも無言で頭を下げる。それを見て、翔太も一歩前に進み出た。ここで自分も謝らなければならない。そんな気がしたからだ。

「楓、僕も、謝りたい。僕が、昨日、屋上で楓を部活に誘わなければ、たぶん、楓は倒れなかった。引き金を引いたのは、僕だ。だから、ごめん」

おじいさんやおばあさんのような、きれいな言葉で謝ることはできなかった。それでも、自分の気持ちを何とか伝えることはできたと翔太は思う。そのまま頭を下げて、三秒ほどそうしてから、ゆっくりと頭をあげる。そこには、涙を流しながら、首をよく二振り続ける楓がいた。

もう、謝らないでと、そう言っているように見えた。

「いろいろ、俺たちは清泉につらい思いをさせた。お前によかれと思っただけの行動が、全部裏目に出てしまった。ここまで一人で辛い思いをさせて、すまなかったな、清泉」

夏目先生がもう一度頭を下げる。楓は先ほどより、激しく首を振

っている。その目からあふれる涙もぬぐわないまま、首を振り続けた。

十秒ほど、沈黙が続いた。誰も何も言わない。楓が時折鼻をすする音が、病室に響くだけだった。

やがて、おばあさんがゆつくりと楓に近づき、その目元をぬぐってやった。優しい、ゆつくりとした動きだった。

「楓、もう、我慢しなくていい」

涙をぬぐいながら、楓を正面から見つめながら、おばあさんは静かに言った。楓が鼻をすする音が一度する。おばあさんは、ゆつくりと微笑みを浮かべて、こういった。

「楓、卓球部に、入りなさい」

楓がびつくりした表情になり、無言でおばあさんを見つめる。その表情をしっかりと受け止めながら、おばあさんは続けた。

「家事は、おじいちゃんや、おばあちゃんがしてあげる。私たちも、幸いなことに、まだ元気だ。お前が来るまでは、二人で家事をこなしてた。だから、これからは私たちも家事をする」

ゆつくりと、頭をなでて、おばあさんは言う。楓の表情が、驚きから、じよじよにまたゆがんでいく。今日何度目かわからないものが、目からあふれそうになる。

「今までみたいに、おばあちゃんたちに遠慮なんかなくていい。たくさん部活して、たくさん勉強して、たくさんやりたいことをして、その合間に、家事を手伝ってくれたらいい」

今度は、楓は首を横に振らなかった。顔が涙でくしゃくしゃになりながら、何度も何度もうなずく。それは、お礼をいいながら、頭を下げているような動作にも見えた。

「だから、友達とめいっぱい、学校生活を楽しくできなさい」

うん、という言葉は、涙で震えながらも、しっかりとした響きを持っていった。

確認するように、うん、ともう一度、今度は先ほどよりも大きな声で、返事が帰ってくる。

一人の少女には、温かな居場所があった。

2・エピソード

失礼しました、と言って、楓が職員室から出てきた。肩にはいつもの鞆をかけ、もう片方の手には、少し古めの卓球のラケットケースが握られている。

「それ、夏目先生の？」

外で待っていた翔太は、楓の手ものと見ながら尋ねる。うん、と楓は少しうれしそうにしながら、それを少し持ち上げた。

「新しいラケット買うまで、貸してくれるって」

「よかったね。これですぐに楓も卓球ができるじゃない」

今日は、楓の初めての部活に参加する日だった。退院してから、ちょうど一週間である。

退院したばかりは、体力がないことを考慮に入れて、無理な運動は避けるように医者から言われていた。もともと運動していない楓が退院してからすぐに部活動など、していいはずもなく、今日までお預けだったのだが、やっと今日、部活動に参加してもいい許可が医者から降りたのだ。

「それじゃ、行こうか」

翔太は楓と並んで、下駄箱へ向かう。楓はどこかうれしそうで、夏目先生に貸してもらったラケットケースを大切に抱えながら、笑顔で歩いている。そんな様子を見て、翔太も思わず顔をほころばせた。昼休みだけでなく、放課後も楓と一緒に入れるなど、これほどうれしいことはなかった。

下駄箱で靴を履き替え、二人並んで体育館へ。それぞれ更衣室に入り、先に着替え終わった翔太が体育館の入り口で楓を待つ。更衣室は体育館の外にあるため、先に体育館に入るよりも外で待とうと翔太は考えたからだった。

すぐに、着替え終わった楓が更衣室から出てきた。部活中は服装は自由なため、今日は体操服ではなく、短パンに半袖と、動きやす

い格好である。髪の毛は邪魔にならないよう、後ろでポニーテールにしてあった。

楓の初めての運動着姿に、翔太は思わずどきりとしてしまうが、楓に首をかしげられ、あわてて首を横に振って体育館の扉にてをかける。こんなことでこれから先大丈夫かと思いながら、楓を伴っていつもの卓球部の区画へと進んでいった。

「こんにちは！」

すでに来ていた安奈、麻紀、良平に挨拶をすると、三人がこちらを振り返って笑顔になった。

「おー、翔太。授業お疲れ」

そう真っ先に声をかけてきたのは良平だ。おう、と気軽に返事をして、翔太はラケットケースを所定の場所に置く。

「それと、清泉さんもこれからよろしゅう。俺、林良平いうねん。聞いている通りの関西人や」

良平が気さくな笑顔を楓に向ける。楓は少しだけ戸惑いながらも、よろしく、とお辞儀をする。表情は少し硬いが、それでも笑顔は浮かべていた。

「こら、良平。入部テストしてないんだから、まだ挨拶するには早いわよ」

そう声をかけてきたのは安奈だ。えー、と良平は口をとがらせる。「別にいいやないですか。せっかくの女子部員なんやから免除しても。それに翔太の彼女ですよ？」

「まだそのネタ使うか！」

翔太があわてて割り込む。よく聞こえなかったのか、楓はきょとんとしていた。それを見て、翔太は少し安心しつつもなぜか気分が少しだけ沈む。

「そんなのは関係ないわ。内に入るからには平等にテストを受けてもらわなきゃ」

そう言って、安奈は人のよさそうな笑みを浮かべながら楓に向き直る。

「改めて、はじめまして。部長の大海安奈よ。張り切って来てもらったところ悪いんだけど、この部に入るには入部テストに合格してもらわなきゃいけないの」

はい、と楓は静かに返事をする。その表情からは頬笑みが消え、少し真剣なものへと変わっていた。

その表情を見て、安奈は満足そうに笑う。

「テストの内容は簡単。あそこに立ってる麻紀と試合をしてもらって、勝つか、私たちが認めればテスト合格よ」

「志村麻紀です。お相手よろしくねっ！」

麻紀が明るく挨拶をして、ラケットケースからペンホルダーのラケットを取り出す。入部テスト専用のラケットだ。

「ラケットは…あるみたいね。それじゃ貸さなくていいかしら」
「はい、大丈夫です」

楓が夏目先生から借りたラケットケースを開き、中からラケットを取り出す。出てきたのは、ペンホルダーのラケットだった。

「試合のルールとかは麻紀が説明してから始めるから大丈夫ね？
何か質問は？」

安奈がにっこり笑って尋ねる。その笑顔を、楓は無表情ながら、しっかりとした視線で受け止める。

「私、勝つまであきらめないつもりなんですけど、大丈夫でしょうか？」

楓のそんな言葉を聞いて、翔太は驚きつつも感心する。楓のあんな力強い言葉を、表情を、今まで見たことがなかったからだ。

「初めの試合は負けるつもりで挑もうとする子は、入部をお断りするわよ？」

「すみません。そういうつもりじゃないです」

そういいながら、楓はしっかりと麻紀の立つ卓球台を見つめる。

その顔は、いつものほかない表情とは違う、意志のこもった表情だった。

「ただ、居場所というのは、自分で手に入れるものだ、ある人か

ら聞いたので」

その言葉を聞いて、安奈は満足そうに笑う。翔太も、その言葉と言った人の顔を思い出して、一人うれしい気持ちになっていた。

「いいわよ。あなたの居場所を手に入れる気持ちかどれほどのものか、見せてもらうわ」

挑戦的な言葉とは裏腹に、安奈の表情にはすでに楓を受け入れているような表情があった。

楓は、安奈の言葉を受けて、ゆっくりと麻紀の待つ台についてから、不格好ながらもラケットを構えた。

「さて、それじゃあ、テスト始めようかつ」

「よろしく願います」

楓の、新たな一歩が踏み出された。

2・エピソード（後書き）

ここで一応、この物語は完結です。なんだか最後のほうはぐだぐだ
で終わって申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2607m/>

屋上の少女

2011年6月12日09時55分発行